
左腕に十字架を宿らせる少年 in ネギま！

サクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左腕に十字架を宿らせる少年 in ネギま！

【Nコード】

N3667U

【作者名】

サクラ

【あらすじ】

突然の死から一変、異世界に転生することになった主人公。

神と名乗る少年からは、異世界で生き延びる為にと特殊能力を身につけさせともらった。

ネギま！の世界に転生する主人公。果たして彼を待つ物語とは……

そして時は刻み始める（前書き）

えー、勢いで書いてしまったこの作品。前から案はあったけど、中々踏ん切りが付かず、ようやく今回書くことができました。かなりの駄文で、ご都合主義ですが、どうか生暖かく身守ってくださいあ。

そして時は刻み始める

終わりは突然だった。

特に痛みも無く、苦しむ暇も無く、簡単にその生涯を終えた。

自分がどうやって死んでしまったかも、今では分からなくなってしまった。

思い残す事は勿論の事、まだやり残した事もあった。

しかし、今ではもう叶う事は無くなってしまった。

父や母より先に死んでしまい、自分によく懐いていた妹をおいてきてしまった。

仲の良かった友人に、何も言えずに死んでしまった。

心残りばかりが、自分の頭には浮かんでは消えての繰り返しばかり。

それから、どれくらいの時間が流れたのかは分からない。

5分かもしれない、1時間かもしれない。

ソレは現れた。

「初めまして、かな」

真っ暗な空間に、突如現れた光を纏いし少年。

いきなり現れたと思いきや、死んだ筈の自分に声をかけてくる少年に驚きながらも、何とか頷く事だけはできた。

「さて、色々と思議に思う事はあるだろうけど、今は僕の話聞いてほしい。君の質問にはその後に答えてあげる」

動揺から立ち直った俺が、少年から話を聞こうとしたが、それを少年が先に話すということなので、俺は黙って話を聞くことにした。

「先ず最初に、君が死んだ原因なんだけど、コレは正直僕にも分からない。まだ寿命でもないし、ましてや此方側が原因でも無く、本当に不明なんだ」

首を傾げるしかなかった。

いきなり、自分の死因は不明と言った目の前にいる少年。

そもそも、何故この少年が自分の死に関わっているのだろうか？

それに此方側とは一体何なのだろう？

「すまない、それを忘れてたね。君に分かりやすく言うならば、僕は『神』と呼ばれる存在だ」

俺の考えていた疑問に対し、目の前の少年が自分は神だと言った。

……GOD？

「さて、話を続けよう。先程言ったけど、君の死は全くの予想外なんだ。たまに、此方側、つまり他の神様が自分の娯楽の為に人間を殺して、異世界に転生させることはあるけど、今回の君の死に関しては、誰も関与していないんだよ」

本当に不思議そうに話す神様。

というか、娯楽のために人を殺すとか……

殺された方にしてみれば、かなりの迷惑だろうに。

「だから、君のこれからについて説明する為に僕が来たんだ。本来、人が死んだのならその魂が天国に行くなり地獄に行くなり、はたまに現世に留まったりする。だけど、君は寿命で死んだわけでも無く、此方側に殺されたわけでもない、コレは極めて異例中の異例なんだ。よって、君に対する処置を此方側で検討させてもらった」

俺に対する処置。

本来なら死んだ直後に天国か地獄に送られる魂だが、今回の俺の魂に至ってはどちらにも送られる事無く、直接神様の判断に委ねられるとのこと。

……できれば、天国に逝きたいところだが、訳の分からない死に方をして神様達を困惑させたらしいから、もしかしたら地獄に逝くかもしれないな……

「君には転生をしてもらう。有り体に言えば、第二の人生を送ってもらう事になった」

……どうやら、天国にも地獄にも逝かないらしい。

転生という事は、また同じ世界に生まれるのだろうか？

先程、神様達は自分の娯楽の為に人を殺しては異世界に転生させていたようだが、もしかして俺も異世界に行くのだろうか？

「察しが早くて助かるよ。君の考えている通り、君には異世界に転生してもらう。ちなみに、補足するならば、転生させた人間達には皆特典が付いての転生だ。一方的に送りつけても面白くないらしいからね」

面白い面白くないとか、神様の考えている事はイマイチよく分からないな。

しかし、特典って何なんだろうか？皆特典があるから、素直に転生したのか？

「そうだね、特典ってのはつまりは特殊能力の事だよ。転生先は、あらゆる漫画やアニメの平行世界となっているんだ。平行世界だから、自分が何をしても元となった世界には全く影響がないから、好きに行動しても大丈夫なようになっていて。でも、いくら平行世界だからといっても、危険がない訳じゃない。故に、転生して直ぐに死んでも面白くないから、転生する人間には特殊能力を持って転生してもらっている。特殊能力は、その転生させる神様が与えるから、あまりの無茶じゃない限りは大体が認められている。あとは、身に

つけられる特殊能力の個数は、神様によってまちまちになっている。一個の人間もいれば、五個とかの人間もいる。因みに今回の君の場合、四個となっている。いきなりで混乱しているかもしれないが、コレは既に決定事項の為、変更などは認められない。よって、時間をかけて考えてもらいたい」

ふむ、確かにかなり混乱はしている。いきなり転生しろだの、平行世界で過ごしてほしいだの、特殊能力を身につけてやるなどと、しかも変更などは許されんなんて、少々強引すぎではないだろうか？

「そう思うのも無理はないだろうけど、此方としても、異例なことだからどう対処すれば良いか分からなくてね。ならば、他の転生者と同じ扱いにすれば良いという結論になったんだよ」

納得はし難いが、理解はできる。

そりゃ、普通なら放置されてもおかしく無いのに、それを特別扱いしてくれているのだからあまり文句も言えなくなってしまう。

しかし、特殊能力と言われても何処に転生するか分からないのに、それで決めると言われても決めづらい事には変わらない。

「転生先かい？本来なら転生する人間の行きたい世界なんだけど、今回は既に決まっていね。君が転生するのは、ネギま！という漫画の平行世界だ。知っているかい？」

ねぎま？残念ながら焼き鳥の漫画なんて知らないな。

「ネギま！ね。かなり簡単に説明するけど、主人公が立派な魔法使いを目指す、いちゃいちゃラブラブ漫画だね。因みに主人公は、十

歳の男の子だ」

果てしなく意味が分らん。

何故、立派な魔法使いを目指しているのに、いちやいやラブラブ何て単語がでてるんだろうか？しかも、十歳とかまだ子供じゃん。

「某Wikipediaさんでは、学園ハーレム作品と書かれているね」

それ、メタ発言じゃね？

と言うか、同じ男としてはかなり羨ましいな。子供だから可愛がられるんだろうし。

しかし、立派な魔法使いって事は、少なくとも魔法が存在する訳だな。

「他にも、気が使えたりとか、敵には悪魔がいたり、妖怪や亜人も存在するし、ましてや、悪の魔法使いがいたりとか、かなりのファンタジー要素満点の作品だ」

かなりの危険溢れる世界だということが分かった。

そうすると、特殊能力は魔法関係の方が有利なのだろうか？

「特殊能力については、他作品の特殊能力でも良いし、または特殊能力じゃなくて、武器やアイテムなんかでも持ち込むことができるよ。まあ、そうした場合は特殊能力の個数一つ分ってなるけどね」

なるほど、必ずしもその作品の特殊能力じゃなきゃダメと言う事はないんだな。

本来の特殊能力とは少し違うようにしても良いのだろうか？

「どういことだい？」

つまりは、本来は悪魔専用能力だけど、悪魔以外にも同じ効果が与えられるのかな。

「ふむ、具体的には？」

D・Graymanの対アクマ武器

「なるほど、確かにあればあの作品にでてくるアクマ専用武器だね。まあそのくらいなら大丈夫だよ。きちんとネギま！でも使えるようにしてあげるよ」

なら一つ目の特殊能力は、アレン・ウォーカーの対アクマ武器の十字架及び神ノ道化^{ロス・クラウン・クラウン}にしてくれ。

二つ目は、アレンのアクマ化した左目。原作ではアクマの魂が見れただけど、ネギま！ではあらゆる魂が見れるようにしてほしい。

三つ目は、身体能力の限界突破。でも、鍛えすぎて筋肉だらけになりたくないから、見た目は変わらないようにしてほしい。

最後は、武装錬金にでてくる核鉄を作れる知識と技法、及び材料の無限生成で。

「うーん、特に問題は無いけど、敷いて言うなら最後のかな。知識と技法は大丈夫だけど、材料の無限生成は難しいかな。それに、転生先でも別に材料が手に入らないこともないしね」

流石に無理があったか。まあ、そんなことしたら原作では百個だけだったのに対して、此方は無限に作れるようになるしな。

因みに、黒と白の核鉄は作れるのか？

「それは大丈夫。あのシリーズも作れるようにしておくよ」

なら能力についてはそれでよろしく頼む。

「了解したよ。後、サービスで容姿をアレン・ウォーカーと同じにしとくよ」

おお、それはありがたい。……悪いけど、もう一つ良いか？

「特殊能力以外なら」

生前、つまりは前世の記憶を一般常識や、培ってきた知識以外を消して欲しいんだが……

「……理由を聞いても？」

俺はもう元の世界では死んだ人間だ。確かに両親や友人達との思い出は大切だ。でも、新しく生を受けるなら、その世界の両親に愛されたいし、愛したい。新しく友人も作りたい。未練を持ったまま転生したら、新しい両親に対して壁を作るようで、新しい友人には溝を作ってしまうそうで仲良くなれない。だから……消して欲しい。

ネギま!の世界で新しい人生を歩む為にも。

「……つまらない理由だったら、却下したけど……。分かった、その願い確かに聞き入れたよ」

我が儘言ってすまない。

「構わないよ。さて、それではそろそろ転生させようと思うけど、良いかな？」

ああ、世話になった。

「気にすることないよ。……それじゃ、時間だ。コレでお別れだね。また会えるのを楽しみにしているよ、アレン・ウォーカー」

容姿がまんま同じなら、名前も同じってか。ま、いっか。

ーじゃ、行ってきますー

そして、コレから始まるアレン・ウォーカーの物語。果たしてどのような運命が彼を待ち受けるのか。

ー時の針はゆっくりと刻み始めたー

そして時は刻み始める（後書き）

プロローグ、こんなに長くするつもりは無かったんだが……

本編はもう少し長く書くつもりですが、……できるかな？

誤字脱字ありましたら、教えて下さると嬉しいです。

後、優しい感想もくれるともっと嬉しいです。……ちょっと調子に
乗りました。まあ、感想は罵詈雑言以外なら受付ますんで、これか
らもよろしくお願いします。

廻り始めた運命の齒車（前書き）

前話から一気に時間は飛びます。過去の話などは途中途中で入れていくつもりです。後、今回はオリキャラが出ますがこの先出番があるかは未定です。アレンの所属している組織については、次話で紹介するつもりです。駄文で、グダグダだとは思いますがよろしくお願いします。

廻り始めた運命の齒車

誰かが泣いている。

雨に打たれながら、ひたすら泣き続けている。

子供が泣いている。

ただひたすら、自分の犯した罪を目の前に泣いている。

雨は流し続ける。

地面の朱を、子供の涙を。

泣き続ける子供の前に、黒尽くめの服を着た男が現れた。

男は何も言わない。

じっと子供を見つめている。

子供の言葉を待つかの如く、子供の眼を見つめている。

子供は言った。強くなりたい、と。

子供は誓った。護る強さを手に入れる、と。

子供は刻んだ。再び悲劇は繰り返させない、と。

それを聞いた男は、黙って子供に手を差し伸べた。ただ一言、「着いて来い」と言っ

子供は黙って、差し伸べられた手を掴んだ。その眼に強い決意を抱いて。

雨は降り続ける。

子供の涙を拭うかの如く、降り続ける。

そして、この日から子供は涙を流さなくなった。

A l e n s i d e

夢を見ていた。まだ、自分が無力だった頃の夢だ。

頭が重く感じたが、少し左右に降ること

で意識を覚醒させる。久々に見た過去の夢。当時はよく見た夢だが、ここ数年は見る事のなかった夢。

「働きすぎたかな？」

ここ最近、立て続けに仕事だったから見たのだろうか？

まあ、今考えても仕方ないかな。そう自分の中で結論を出してゆつくりとベットから降りて、軽く身体を動かす。

「疲れは大体取れたかな。これなら特に支障はないだろ」

昨日、長期の仕事から帰って来た僕を待っていたのは、師匠以外の元帥達からの説教だった。

「昨夜の説教は、かなり厳しかったなあ。特にクレアさんは………はあ……」

師匠の許可があれば長期の仕事でも受けて良いはずなのに、何故か他の面々は渋い顔をする始末。

特にクレアさんは、いの一番に反対意見を押し付けてくる。

「毎回毎回任務の度に私からも許可を貰いなさいって言われても……なあ」

誰かに言うでもなく、一人呟いてみる。

「そんなに頼りなく思われてるのかな」

などと独り言を言いながら着替えを済ませる。

着替えたならそのまま洗面台に行き、身だしなみを整えたりする。

本来ならばもう少し寝ていた所だが、今回の任務の報告がまだ終わっていないからだ。なので朝食も食べずに部屋を出る。

廊下には自分の歩く音だけが響いている。目指すは教会の中にある数多くの部屋の一つである、師匠含む元帥達が控えている部屋だ。

「（しかし、あの日から今年で15年か。時が流れるのは早いもんだな）」

あの日、自分が生まれた時のことを思い出す。

「（まさか生まれて直ぐに捨てられるとは、そんなとこまで似ているとは思ってもなかったな……）」

自分には前世の記憶がある。あると言っても全部鮮明に思い出せる訳じゃない。所々思い出せない記憶もある。しかも、前世の自分に関する記憶は全くもって思い出せない。だからどんな人生を送ったかなんてのも分からない。

だからと言って、不満を感じている訳じゃない。それはあくまで前世の記憶であって、今の記憶ではないからだ。なのでいくら思い出せないからと言って、無理に思い出す必要は無い。

「（でも、無駄な知識は忘れないんだな）」

無駄な知識、つまりは前世の漫画やアニメなどと言ったオタク方面の知識だ。

「（何故、こんな知識はずっと覚えているんだろうか）」

まああって損はないかな、っと思いつながら歩いていると目的の部屋に着いたようだ。

「（相変わらず部屋の外にまで漏れている威圧感。僕以外にもこういう対応なのかな？）」

自分がくると分かっているといつも威圧感が部屋から感じ取れる。

「（はあ……先が思いやられるな）失礼します、アレン・ウォーカ―です」

内心愚痴りながらドアをノックする。恐らく返答するであろう人物に何て言い訳しようかと考えていると。

「やっと来たか。さっさと入れ」

ぶっきらぼうに、また不機嫌を隠そうともしない声に内心かなり驚愕している。

「（何で師匠が！？あの面倒臭がりの師匠がどうして?!）し、失礼します。遅くなり申し訳ありません」

動揺を隠せるはずもなく、背中に冷や汗を流しながら入室し、本来目の前にいるはずのない師匠に謝罪の言葉を言う。

「テメエ、この俺を待たせるとは良い度胸じゃねえか。何様のつもりだ？」

俺様の師匠に初っ端から殺されそうになる。むしろ何故師匠が此処にいるかを知りたい。

「クロス！何を馬鹿な事を言っているのですか！？貴方も今さっき来たばかりではないですか！なのに約束の時間通りに来たアレンを何故貴方が怒るのですか！」

と僕が師匠に意識を向けていると師匠の向かい側の席にいるクレアさんが、大声をあげて師匠に突っかかる。

「やかましい、俺が何時^{いつ}来たかはどうでも良いんだよ。重要なのは、アレン如きがこの俺を待たせたってのが気に食わねえんだよ」

流石は師匠。理不尽の塊のような悪魔だ。いや、人だ。

そんなことを思っているとまたしてもクレアさんが

「貴方という人は！最早我慢できません、やはりアレンを貴方に任せることはできません！私がアレンを導きます！貴方には手出しさせません！！」

「上等じゃねえか、クレア。奪えるもんならやってみる、アレン（財布）が誰のものはつきりと教えてやろうじゃねえか」

クレアさんの暴走発言に師匠は声を低くして挑発する。というか師匠。僕は貴方の金ずるではありません。

「双方、そこまでにしておけ。小僧がどちらのなど今はどうでも良いことだ」

今まさに師匠とクレアさんがお互いの武器を出そうとする直前、僕の真っ正面に位置する席、師匠とクレアさんの間にいるこの面子の中で最年長者である、ゴゴ元帥が二人を止めに入る。

「ああん？ 何で爺の指図を受けなきゃならねえんだ、この老いぼれが」

口を挟まれたのがムカついたのか、師匠がゴゴ元帥にも喧嘩を売る。因みにクレアさんは渋々引き下がって既に席に座っている。

「阿呆が。貴様も良い加減に大人しくしておらんか」

師匠の暴言を軽く流し、ゴゴ元帥と師匠が睨み合っている。

「ちっ」

舌打ちして乱暴に席に座る師匠。それを見てゴゴ元帥がやれやれといった感じに溜息を吐く。

「さて、小僧よ。早速ではあるが今回の任務についての報告をしてもらおうか」

ゴゴ元帥は今まで蚊帳の外にいた僕に対して、本題の任務の報告をするよう言ってきた。

「あ、はい。今回の長期任務はクロス元帥から許可をもらい、単独での任務を行いました。結果だけを言えば成功、したと言えます」

僕の報告を聞いて、師匠は鼻で笑うだけで特に何も言わず、クレアさんは唇を噛み締めながら、此方を睨みつけてくる。ゴゴ元帥はた

だ黙って報告に耳を傾けている。

三者三様の様子に内心溜息を吐く。師匠はいつも通りできて当たり前だと言わんばかりの態度。クレアさんは任務の内容が内容だけに、僕の事情を知っているから何も言ってはこないが、少しは頼れと言わんばかりに睨みつけてくる。ゴゴ元帥は……相変わらず読めないな。

「なるほど、報告は以上か？」

頷いて返答する。失礼かとは思ったが、特に何も言われなかった。

しかし、やはり分からない。ゴゴ元帥やクレアさんが報告に立ち会うのは分かる。でも何故この場に師匠がいるのだろうか？

通常、報告するならば何も師匠に報告する必要もなく元帥ならば誰でも良い筈なんだけど……

「クロスが居ることが不思議か？」

その一言に僕は思わず苦笑いをしてしまった。

………やってしまった。

そっと師匠の方を見る。

見なけりゃ良かった……

無言で睨みつけてくる師匠。その表情はまさに地獄の鬼すらも逃げだしそうなほど。

「無理もない。この程度の報告ならば儂かクレア、または別の者でも良かったのだからな」

フォローするかのようによゴ元帥がそう言うてくる。

「儂ら三人が集まっているのには理由がある。それは次の小僧の任務内容を知っているのが、儂ら三人だけだからじゃ」

次の任務。

まだ僕は帰って来たばかりで、次の任務なんか決めていない筈だ。

師匠やクレアさんを見る。

師匠は眼を閉じていてただ話を聞いているだけに見える。しかし師匠の雰囲気は何となく分かる。アレは内心面白がっている様子だ。クレアさんは、此方を真剣な表情で見つめている。その眼には母親の様な優しさが込められている。何故そんな眼で見てくるかは分からないが……。

「小僧が知らんのも無理はない。この件に関しては今回の長期任務の間に決めたことだからな」

となると、任務で此処を離れていた4ヶ月の間に決めたことになるな。

一体どんな任務をさせられるのか、予想すらできない。できないがコレだけは言える。

「小僧に次の任務を申し付ける」

確実に面倒事なんだろうな……。

「小僧一人で、日本にある学園都市、麻帆良学園にて期間未定の特
別任務を行ってもらう」

師匠は最早隠すつもりもないのか、それでも声を抑えながら笑って
いるし、クレアさんに至っては何故か涙目で此方に微笑んでくる始
末……。

「なお、既に学園側には転校手続きをしているため、拒否は認めら
れない。以上だ」

そういつて話を纏めるゴゴ元帥……。

最早諦めの境地にいる僕は、やるせ無い気持ちでいっぱいだった。

それから数時間の間にゴゴ元帥とクレアさんから、麻帆良でのこと
で話し合いをしていたが正直頭に内容が入らずに心此处にあらずの
状態だった。

はぁ……不幸だ。

なし崩し的に麻帆良に行く事になったアレン。彼は麻帆良で何をす
るのか、どんな出来事が起こるのか。

ー運命の齒車が今ゆっくりと廻り始めたー

廻り始めた運命の齒車（後書き）

ご都合主義満載の話でしたね。ぶっちゃけ、どうやってアレンを麻帆良に絡ませるか悩みました。なので強引に特別任務として麻帆良に行ってもらいました。この先もご都合主義があるかもしれませんが何卒よろしく願います。

引き続き、誤字脱字のご指摘や罵詈雑言以外の感想お待ちしております。またアレンに麻帆良でやって欲しい事があれば遠慮なく言ってください。それではノシ

交わるは心と心（前書き）

今回もグダグダで書かせて頂きました。早く麻帆良に行かせたいのに、今だに行けずじまい。どうしてこうなった……orz

交わるは心と心

「それで、ゴゴ元帥。麻帆良での特別任務って、結局は何をすれば良いんですか？このままでは、ただ学生生活をしに行くだけになるんですけど……」

そういつて僕の目の前で、麻帆良学園のパンフレットに載っている部活紹介のページで、僕をどの部活に入部させるか言い争っている師匠とクレアさんを尻目に、ゴゴ元帥から詳しい任務内容を教えてもらうことにした。

「その話をする前に、小僧には知っておいてもらわなければならな
いことがある。二十年前の魔法世界の大戦でメセンブリーナ連合に
紅き翼を率いて参加し、大戦を裏で操っていた完全なる世界という
組織を壊滅させ、文字通り世界を救った英雄ナギ・スプリングフィ
ールド。その英雄の息子であるネギ・スプリングフィールドが麻帆
良にやって来るといいう情報を手に入れたのじゃ」

ナギ・スプリングフィールド。

それは今では、正義の魔法使いが憧れてやまない立派な魔法使いの
代名詞と言っても過言ではない人物。

その英雄とも言われている人物の息子が麻帆良に来る。それと僕の
任務にどんな関係が？

「小僧には、この小童の監視をしてもらいたい。とは言っても四六
時中ではなく、何か麻帆良で事を起こす場合での監視じゃがな」

そう気張る事でも無い。とネギ・スプリングフィールドと今回の任務での関連性を教えてくれたゴゴ元帥。

「それはつまり、暗にそのネギ・スプリングフィールドの面倒を見る。と？」

厄介な事を起こすネギ・スプリングフィールドのフォローをしろとでも言いたいのだろうか？

「いや、言葉通りただ監視するだけで良い。監視し、その出来事を後日報告してくればそれで良い。手を出す出さないは小僧に任せる。出したとしてもそれをも報告してくれば、此方としても別に文句は無い」

どうやら出しやばる必要はないとのこと。

「ただし、手を出した場合の責任は全て自己責任として後処理までも済ませてから報告するように」

念を押すように話すゴゴ元帥。

「因みに、僕が黒の教会の所属だと言うのは知らせているんですか？」

黒の教会

これが僕の所属している組織の名だ。名前がD・Graymanの黒の教団と似ているが、その実態はかなり違っている。

先ずは、この黒の教会には表の顔が存在している。名を白の教会と言う。その活動内容は、新旧どちらの世界にも多くの支部があり、世界各国に存在している孤児院や、住む場所に困っている難民達に支援している。簡単に言えば善良な支援団体なのだ。

一方で、裏の顔の黒の教会は拠点がヴェネツィアにある本部のみ。白の教会も本部は黒の教会と一緒になので、本部は並々ならぬ大きさとなっている。

黒の教会の活動内容は言わずもがな裏の仕事である。だからといって、悪い事や法を犯す様な真似はしていない。紛争地帯での制圧活動、マフィアや人身売買に関わっている組織の壊滅など正義の魔法使いがやるようなことばかり。

しかし黒の教会の人達は、そんな名誉欲しさに戦っているわけじゃない。言うなればただの自己満足。自分だけの正義を掲げて戦っている人達ばかりだ。

黒の教会は独立した組織。故に黒の教会を傘下にしようとメセンブリーナ連合の一つである、メガロメセンブリアが事ある事に黒の教会に名誉やら栄誉をやるから傘下に入れとしつこいくらい通告してくるが、黒の教会はこれを全て断り続けている。メガロメセンブリアが黒の教会に強引な手で傘下に入れようにも、そんなことをすればメガロは他からの反感を受けることとなる。一つの組織を強引に傘下に入れて他からの反感を受けるくらいなら、やらないにこしたことはない。

そんな黒の教会に所属している僕が来るとなると、麻帆良では動きにくくなると思うけどどうなっているのだろうか？

「アレンには白の教会所属って、向こう側には説明しているわ。日本にも支部はあるけど、本国からの留学生という形で麻帆良に行ってもらわ」

今まで師匠と言いつ争っていたクレアさんが答えてくれた。しかもどこか得意げな顔で。

「安心して良いのよ、アレン。麻帆良の学園長には私の名前での推薦状を既に送っているわ。もちろん、黒の方じゃなくて白の方の肩書きでの推薦状よ。卑下な扱いをされることはまずないから」

思いつきり職権乱用している人が此処にいた。元帥達は皆黒と白の教会の肩書きを兼任している。

つまり、白の教会の元帥が僕を推薦して麻帆良に送るということだ。

「クレアよ、あれ程やり過ぎるなど言ったじゃろうが」

ゴゴ元帥が溜息混じりにクレアさんに言った。

「これでもまだ足りないくらいです。本来なら、元帥全員の名前が入った推薦状を送りたかったけれど、流石に全員分は難しかったから諦めました。ですが、これくらいやらないと返って怪しまれてアレンの事を徹底的に調べる筈です。白の教会も、全員魔法関係者で統一してますし、疑われるくらいなら最初から魔法関係者だとバラしていれば問題無いかと。しかもアレンの事をベタ褒めした元帥の名前入りの推薦状を見れば、下手な疑いもかけられる事は絶対にありますせんし」

ゴゴ元帥の発言に対し、クレアさんは最初から見せても問題ない手

札を切ったまでだと言った。

「あの、ベタ褒めって……推薦状に何て書いたんですか？」

一応、何て書いたか聞いておいた方が対応しやすいと思い、クレアさんに聞いてみた。

「それはもちろん、アレンは（黒の）教会ではまだ子供ながらも辛い現実を目を向けながら世の為人の為、周りの自分よりも年上の人にも負けない程の成果を出し、尚且つ（黒の）教会の仕事の先々では困っている人々を最優先に仕事をこなして周りからの人望もあり、けれどしっかりと自分にできる事を見極め、決して愚かな行為をする様な子ではない。と、まあ一部ではあるけれどこの様にアレンの素晴らしさを向こうに教えてあげたの」

……クレアさん。僕に何の怨みがあるんですか……。明らかに僕の行動を制限しようとしてますよね？むしろ強制してますよね？

ゴゴ元帥を見ると、クレアさんに推薦状を任せたのは失敗だったかというように、頭を抑えている。

ふと気になり、師匠にも目を向ける。師匠は自分が書きたかったんだがな、と呟いていた。正直、師匠の推薦状が送られていたと考えるとゾツとする。確実に麻帆良側に敵視されるようなことを書くに決まっている。

「あ、後は麻帆良に日本支部の助力者サポーターも居るから、向こうに行ったら合流するのよ？本当ならどんな任務にも助力者は連れて行くのに、貴方は自分一人で任務をするけど今回に限っては目的地に既に助力者が居るから、必ず合流するようにするのよ？」

サポーター
助力者

本来、黒の教会で任務を行う際には黒と白どちらかにいる非戦闘員が任務に同行し、任務のあらゆる補佐をするのが仕事である人達のことを助力者と呼ぶ。しかし、僕は今までの任務で助力者を連れて行くことはしなかった。信頼していいわけじゃない。むしろいくれたほうが任務が楽になるくらいだ。それでも僕は助力者を連れては行かない。理由は簡単、死んで欲しくないからだ。助力者達には戦う術があっても、それはあくまで自衛程度。僕が護ってあげれば良いのだが、常に護れるというわけじゃない。僕が戦っていればその間は護ることができない。助力者達は死ぬ覚悟を持って任務について来る。だから僕の考えが甘いのは分かっている。クレアさんにも何回も言われていたけど、それでも連れて行く事はなかった。

「今回に限っては、助力者が必要不可欠。彼女には今回の任務の事を話して、麻帆良に待機してもらっているの。麻帆良での生活面での補佐を主に担当してもらってるから、生活費やらも彼女の方に送られることになっているから」

麻帆良での生活費、つまりは衣食住のお金も助力者に預けられるということか。っていうか

「助力者って女性ですか？」

そう、クレアさんは彼女に、と言っていた。つまりそれは、助力者が女性である事を示している。

「ええ、とは言っても歳は貴方の一つ上だけだね。歳も近い方が馴染みやすいと思ってね」

それも可愛い子よ、と一言余計な事を言ってきた。

大抵、キツイ任務について来るのは男性の助力者が多いのだが、今回は学園生活とのことで、女性の助力者だとのことらしい。

「名前はリナリー・クロイツェフ。心優しくて、仲間思いのとても良い子よ。家事が得意で、特に料理に関してはアレンも満足できる程よ。生まれは何処か分からないけど、育ちは中国で、中国にいる彼女を白の教会がスカウト。助力者としての戦闘経験も何回かあるらしいわ。そして、今回の任務の為に先に麻帆良で学園生活を送っているの」

他に知りたい事は？と聞いてきたが、正直それどころじゃない。此処は確かネギま！の世界だ、D・Gray-manの世界のリナリーとは違うだろうとは思うけど、名前や性格、料理が得意などと似ているにも程がある。もしかしたら、アレも同じなのだろうか？

「あの、クレアさん。そのリナリーって子の嫌いな物っていうか、嫌っているようなことって何かありますか？」

内心冷や汗を書きつつ、クレアさんに聞いてみる。どうか同じじゃないありませんように。

「あるわよ。それも見越して彼女にお願いしたのよ」

ああ、やっぱり同じか。確かに原作に似た並行世界だとは言っていたけど、D・Gray-manのキャラそっくりな人物が出てこなくても良いじゃないか……。いや、確かに好きなキャラではあったけどさ、それとこれとは……。なあ？クレアさんがニタニタした顔で

言ってきた。

「自分を犠牲にして、自分を大事にしない人が許せないそうよ？ 良かったわね、アレン。貴方にピッタリの助力者で」

まだ見ぬ遠い地にいる少女。少女の心にはこれから来るであろう少年の心をどう思っているのだろうか？

ー今、心と心が交わろうとしているー

交わるは心と心（後書き）

と言うわけで、麻帆良に先回りしているオリジナルに近いリナリー。違う所と言え、コムイの妹ではなかったりとか、学生してるとかそんな些細なことですかね？

引き続き、誤字脱字ありましたらご指摘してください。あと感想も罵詈雑言以外受け付けています。またハーレムもどきのメンバー何かも募集します。

出会は突然に（前書き）

グダグダです。思うように先に進みません。文才がほしい……

出会いは突然に

麻帆良学園の敷地内には、世界樹と呼ばれている樹が存在している。しかしこの樹は普通の樹より遥かに大きく、普通なら注目を集めてもおかしくは無い筈なのだが、学園を囲っている認識阻害結界によって普通の樹と同じように認識されているため、学園都市に住む人々は何ら気にしていない。

そんな世界樹のある広場に学園長を筆頭に、一部の教師や生徒達が集まっている。

「麻帆良学園の魔法先生、及び魔法生徒の諸君。今日は、こんな夜遅くに集まってくれたのにはちと理由があつての。皆には悪いが少しばかり話を聞いてもらいたい」

皆の視線が集まる先には、麻帆良学園の学園長である近衛近右衛門が自慢の髭を撫でながら話を進める。

「皆も知つての通り、明日より麻帆良学園は夏休みに入る。夏休みには帰省する生徒もいれば、学園に残る生徒も多々おると思われる。夏休みだからと言って、夜遅くまで外出している生徒も出て来るやもしれんので、学園広域指導員である先生方は十分注意して見回りをしてもらいたい」

その場にいる魔法先生兼学園広域指導員達は、学園長の言葉を聞いてその場で力強く頷きながらで返事をした。

「また、魔法生徒で夜の警護をしている生徒達も夜に散歩している

一般の生徒がいたら、すぐに学園広域指導員に連絡をしてもらいたい。夏休みだからといって、この麻帆良学園に侵入してくる者がいないというわけではないからの」

生徒達の反応はそれぞれである。正義感を燃やしながら力強く頷いている生徒もいれば、自分の大事な人を守る為に全力を尽くす生徒。また相応の給料をくれるなら働く生徒など、動機はそれぞれ違うが皆やる気を持っている。ただ一人、例外はいるが。

「おいジジイ。まさかそんなくだらん事でこの私を呼び出したのではないだろうな？」

不機嫌を隠さずに学園長に文句を言う生徒。その生徒の言葉を聞いて、周りにいた魔法先生が生徒を睨みつけるが、当の本人は全く気にするそぶりを見せない。

「ふおっふおっふおっ。エヴァよ、そう苛立つでない。今の話は確認事項であって、本題は今から話すからもう少し付き合ってはくれぬかな？」

そう言って、学園長はエヴァと呼ばれた生徒の殺気を込められた視線を無視しながら説明を始めた。

「さて、それでは本題に入ろうかの。実は夏休みが明けた二学期から、麻帆良学園にとある人物が入園してくるのじゃ。その人物は本来なら四月に来る予定じゃったが、少々訳があって二学期から来ることになった」

本題の内容を聞いて、周りは困惑した面持ちで学園長を見る。

「やはりくだらん事だったか」

そう言ってこの広場を離れようとするエヴァと呼ばれた生徒。

「まあ待つんじゃない、エヴァよ。話は最後まで聞いてくれんかの？」

何とか最後まで話を聞いてもらおうと、学園長が引き止める。

「さて、この人物なのじゃが二学期からと言うので恐らくは夏休み中にこの麻帆良に来るじやろう。何分、具体的な日にちが分からないので此方から迎えようにもそれができんなのでな。もし諸君の中でその人物を見かけたらそのままワシの所まで案内をしてもらいたいんじゃない」

と話す学園長に、魔法先生のガンドルフィーニが周りの疑問の声を代表するかのように学園長に質問する。

「学園長。その人物の詳細な説明をお願いしますか？それだけの情報ではよく分かりませんし、此方としても対処の仕様がありません」

ガンドルフィーニ先生の質問に周りは頷くばかり。その中には、害ある人物ならばその場で捕らえるべきだと意義を申し立てる生徒までする。

「ふむ、皆の疑問は最もじゃ。本来なら詳細を話したい所なのじゃが……」

何かを言いよどむかのようにする学園長。そんな学園長を見て周りの魔法先生や魔法生徒は、その人物がいよいよもって怪しい存在に

なってきた。

「何だジジイ、またよからぬ事を企んでいるのか？」

さも楽しまんばかり学園長に話しかけるエヴァ。彼女にとってその人物が怪しかろうがどうでも良かった。ただ学園長が困っているのを見て楽しんでいるからだ。

「皆落ち着くのじゃ。この人物に関しての身元はハッキリしておる。それとエヴァ、わしは何も企んではおらんから周りを煽るような発言はよしてくれんかの」

ざわつき始めた周りを鎮めるように学園長が再度説明を始める。

「まず、人物の名前はアレン・ウォーカーと言う。歳は十五で、明るく優しい性格との事らしい」

説明しながら懷からある一枚の書状を出す。それを見た魔法先生の一人であるタカミチ・T・高畑は驚愕の声を出す。

「が、学園長！？その書状にある印は、まさか白の教会の！？」

その一言に周りは更にざわめき始めた。

「静かにするのじゃ。……確かに、これはあの白の教会から届いた推薦状じゃ。しかも、元帥の名が書かれた推薦状じゃ。つまり、アレン・ウォーカーは白の教会の所属であり、尚且つ元帥からの推薦を受ける程の人物じゃ」

驚きを通り越して、最早言葉がでてこない魔法先生と魔法生徒の面

々。

それもそうであろう。白の教会と言えば、今や世界中にその名が知れ渡っているくらいの組織だ。その組織に所属している、十五歳という異例の若さで白の教会の元帥の推薦を受けたのだ。これで驚かない方がおかしいとも言えよう。

「驚くのも無理はないじやろうが、あくまで彼はこの麻帆良に勉学をさせるために留学させるとのこと。よって、やたらむやみに彼には接触をしないようにとのことじゃ」

サインやら色々な話を聞こうとしていた面々は、見てわかるように落ち込んでしまった。

「また、彼の世話役として同じ白の教会所属であるリナリー君が選ばれた。アレン君も慣れない土地で過ごすため、何かと世話が必要との事なのでリナリー君にアレン君のサポートを頼みたいとのことじゃ」

学園長からアレンのサポートを任せたと言う言葉にリナリー・クロイツェフは、頷く事で返事をした。

「ふむ、では任せたぞ。……さて、以上でわしの話を終わりとする。明日からの夏休み、諸君も存分に楽しい休みにしてもらいたい。それでは、解散」

学園長からの解散とともに、広場から離れて行く面々。

この話し合いから時は過ぎ、七月が終わり八月になった。

刹那 side

夏休み、お嬢様は京都にあるご実家に帰ることはなく、この麻帆良にて過ごすとのこと。なので、護衛である私も麻帆良でお嬢様を御守りしている。

しかし、麻帆良学園にある剣道部に所属しているため部活動がある時は、式神に護衛を任せている。

今日も午前中の部活が終わり、寮に帰って汗を流そうと帰路に着いていた。夏休みも八月に入り、夏本番と言わんばかりに太陽はその暑さを此処ぞとばかりに発揮している。つまり、何が言いたいかと言うと。

「あ、暑い……」

暑すぎるのだ。部活でも防具を身に付けて活動していたため、最早暑さによって頭がぼんやりしてきた。

「（こんなことでは、お嬢様の護衛に支障がきたす……）」

そう考え、早く帰って冷たいシャワーで汗を流し熱を冷まそうと自然に早足になってしまう。

この暑さの為か、夏休みにも関わらずあまり外には他の人達がいない。しかしこの暑い中、とある人物が目に入った。

「(辺りを見回して、何をしているんだ？しかもこの暑いのに、あんなコートを着ているなんて……)」

旅行などに使う鞆を片手に、恐らくは地図を見ながら周りを見回しているいかにも怪しい人物がそこにいた。

そこで、ふと夏休みに入る前の学園長の話を思い出した。

「(もしかして、彼が話に出てきたアレン・ウォーカーだろうか？)」

髪の毛は若干長めで、髪全てが白髪となっている。若白髪だろうか？身長は170？前後だろう。体の線も細く、左手には赤い手袋をはめている。極め付けは、真っ白なコートに胸元には十字架があらわれている事から、彼がアレン・ウォーカーである可能性は高い。

「(本人なら学園長の所まで案内すれば良いし、不審者ならその場で捕らえれば良いだろう)」

とりあえずは話しかけてみる事にした。

「あの、すみません。もしかして、アレン・ウォーカーさんですか？」

アレン・ウォーカーと思われる人物に近づき、訪ねてみた。

『？確かに、僕はアレン・ウォーカーですけど？』

……………えっ？

『えっと、もしかしてこの学園の生徒さんですか？でしたら、ちょっと道を聞きたいんだけど』

何を言っているかサッパリだった。まさか英語で返されるとは思ってもなかった。

「えっと、その、あの、えーっと……」

ヤバイ。自分でも何を言っているか分からなくなってきた。

『あの、大丈夫ですか？』

何やら話してくるが、残念ながら全くもって分からない。一体どうすれば……。！そうだ、真名に頼ろう！よし、なら早速電話だ。彼には悪いが少し待ってもらおう。

「すみません、少し待ってください。ちょっと人を呼びますので」一言断りを入れたが、通じているかどうか微妙だ。今はそんな事より電話が先だ。

「……………もしもし、刹那かい？一体どうしたんだい急に？」

ようやく電話に出た真名。

「すまない、真名。助けてくれ。私ではどうしようもできないんだ。すぐに来てほしい。場所は……」

何とか来てもらうようにはできた。後は真名が早く来てくれれば良いんだが……

真名 side

いきなりの刹那からの電話。内容はよく分からなかったが、とにかく焦っているようだったので刹那が待っている場所へと急いだ。

少しして目的の場所に着くと、刹那の他にもう一人そこに居た。

「刹那、いきなりの呼び出しはもしかして彼の事かい？」

刹那の隣にいた白髪の少年。着ているコートや、そのコートにある十字架。旅行鞆などを見るに彼が学園長の話していた、アレン・ウォーカーだろう。

「そっちの彼は、もしかしてアレン・ウォーカーか？ならば学園長室まで連れて行けば良いだろう？」

刹那も話を聞いていた筈だから、それくらいは分かっている筈なのだが。

「言葉が分からないんだ。名前を聞いても返されるのは英語ばかり。

私には到底理解出来ないんだ」

と、刹那は落ち込みながら現状を説明してくれた。

「なるほど、それであんなに慌てていたんだな。まあ、確かに私は仕事柄それなりに他国の言葉を理解できるが」

この学園に来るまで、様々な紛争地帯に行っている為、日本語のみならず他国の言葉をも話せたりする。

『相方が失礼をしたようだね。私の名は龍宮真名、そっちの相方は桜咲刹那だ。貴方は、アレン・ウォーカーさんだね?』

とりあえず、刹那の事も紹介したが刹那自身紹介された事を分かっているようにうだ。

『はい、アレン・ウォーカーは僕ですけど……。一応、そちらの子にも名乗ったんだけど名乗ったらいきなりパニックになったらしくて、あまり会話が出来ない状態になってしまっ……。』

どうやらアレン・ウォーカーで間違いないようだ。ならこのまま彼を学園長室まで案内すれば良いかな。

「お、おい、真名。私にも説明してくれないか? 結局、彼はアレン・ウォーカーなのか?」

刹那が小声で聞いて来た。

「ああ、間違いなく彼はアレン・ウォーカー本人だろう。一応、私とお前の名前は彼に教えておいた。と言うか刹那、何もパニックに

ならなくても良いじゃないか。彼はどうやら日本語は分かるようだから」

刹那の問い掛けは分かっていたらしく、どうやら聞き取ることは出来るみたいだ。

「アレンさん、日本語が聞き取れるなら話すことは出来ないのかい？」

駄目元で聞いてみた。

「……………あれ？僕、喋れてませんでしたか？」

……………どうやら彼は、今まで日本語を話していたつもりだったらしい。

「真名！彼は日本語が話せるのか！？」

アレンさんが話せることに驚愕している刹那。

「どうやらそうみたいだね。彼としては、今まで日本語を話していたつもりらしい」

私の苦労は何だったんだ、と落ち込む刹那に慌ててアレンさんがフォローする。

「ご、ごめんなさい！本国では英語しか使わなかったので、つい無意識に使ってました」

無理もないだろう。今までが英語の生活だったから、日本語が話せ

るにしても無意識に英語で話してしまう癖が身についてしまっているのだから。

「さてと、早速だけどアレンさん。今から私達と一緒に、この麻帆良学園の最高責任者である近衛学園長の所まで着いて来てくれないか？」

そう言って、刹那を連れて彼を学園長の所まで案内することにした、のだが。

「私も一緒なのか？」

刹那が疑問の声をあげる。

「当然だろ。元々はお前がアレンさんを案内する筈だったのに、途中で呼ばれた私に押し付けられないでもらいたいね」

私の発言にアレンさんが苦笑いする。

「あの、場所さえ教えてもらえれば僕一人で行きますけど……」

しまった。アレンさんに、余計な気を使わせてしまった。

「いや、別に迷惑って訳じゃないんだ。ただ刹那が押し付けてきただけで、アレンさんを案内したくない訳じゃない」

「おい、真名！私は押し付けたつもりはないぞ！ただ案内するのに、二人も必要なのかって聞いたただけだ！」

まあ、案内するのに二人も必要はないだろうけど、私がついて行く

のは単純にアレンさんに興味があるだけだ。

「この際だ。案内する人が二人でも問題は無いだろ。それに、案内しがてら色々な話が聞けそうだしね。役得ってやつだよ」

ある意味本音だ。彼の話す内容に興味もあるし、彼自身にも興味がある。

「それは、まあ、そうだが……。：それではアレンさん。私達二人で学園長室まで案内しますので、着いて来てください」

刹那がアレンさんを先導する形になり、アレンさんがその後ろに着いて歩く。私はアレンさんの左隣に並ぶように歩く。

さて、先ずは何から聞こうとしようかな。

少年との出会い。この出会いから彼女達は何を思うようになるのか……。

出会いは突然に（後書き）

と言う訳で、強引に刹那と真名をだしました。ホントはリナリーでも良かったんですけど、そうすると二人との接点がなくなるので、だしました。

次回あたりにリナリーを出せる様にしたいです。

引き続き、誤字脱字のご指摘。罵詈雑言以外の感想、まだハーレムメンバーを募集しています。他には、アレンにやってほしいことがありますら、ご意見ください。

話すは己の力（前書き）

ちよつと時間をかけてしまいました。予告通り、今回はリナリーが
だせました。それではどうぞ。

あ、お気に入りか100件超えました。本当に読んでくださっている
皆様に感謝感謝です。

話すは己の力

アレン side

麻帆良学園に来て出会った刹那と真名（二人から自分達の方が年下だから、呼び捨てでも構わないと言われた。）に麻帆良を案内されつつ、学園長室に向かっている。何でも学園長室は麻帆良学園中部にあるとのこと。しかしこの中部が、女子専用で男は教師だけで後は全て女性の教師と、女子生徒しかいないとのこと。

そう説明していた真名がニヤついた顔で聞いて来た。

「どうだい、アレンさん。夏休みであまり人はいないだろうけど、それでも男子はまず入ることができずに、男子からしたら楽園とも言える場所に行ける今の心境は？ しかも、自賛する訳じゃ無いけど、美少女二人連れてだよ」

ニヤニヤ顔で聞いてきた真名に、刹那が真っ赤な顔で真名に怒鳴り声を上げる。

「お、おい、真名！私が美少女だと、ふ、ふざけた事を言うんじゃない！しかも、アレンさんに何て事を聞いているんだ！！」

美少女、と自分が評されたのが恥ずかしかったのか、はたまた真名のふざけ具合に血が登ったのかまだ顔は真っ赤だ。

「何を言っているんだ、刹那は？少なくとも刹那は他から見ても美少女と言われてもおかしくはないだろうし、私も自分で評するのもなんだが美少女に見えるだろうさ。そんな美少女二人を連れて歩いて

いる、何とも役得な今の状況をアレンさんはどう思っているのか聞きたいんだが、正直どうなんだい？」

左隣で僕と、最初は僕の前を歩いていたが今は僕の右隣にいる刹那を交互に見ながら、真名がそんな事を聞いてきた。

「あまり意識はしてなかったけど。……そうだね、確かに美少女二人に挟まれているのは悪くないかもね」

あっけらかんに言う僕に対して、刹那は自分が美少女と言われたのがやはり恥ずかしかったのだろうか、顔を更に真っ赤にして俯いてしまった。真名の方は、僕が慌てる事なく冷静に返してきたのが面白くなかったようで、ガツカリとしたような顔をしている。

「何だ、てっきり慌てふためくと思ったのにそんなに簡単に返されるとは思ってたよ。以外と経験豊富なのかい？」

やはり慌てる僕を見たかったらしい真名。しかし経験豊富って恋愛に関してだよな？何でそんな回りくどく聞くんだろう？

「け、経験！？豊富！？何を馬鹿な事を言っているんだ真名！！アレンさんに失礼だろ！？」

どうやら刹那は経験豊富の意味合いを違う捉え方をしたようだ。以外とムツツリなんだな。

「それは分からないだろ？アレンさんだってそういう経験があってもおかしくは無いんじゃないか？何だかんだ言って、アレンさんだって顔立ちも良いし性格も申し分ない。堕ちる女ひとがいても不思議はないだろ」

ああ、分かった。真名は僕をからかうと同時に刹那をもからかっていたのか。真名ってこんな性格だったんだ。印象は知的で冷静沈着なイメージだったけど、素はこうなのか。

「あ、あわわ。ア、アレンさん、ほ、本当に、その、け、経験が豊富だったり、す、するんでふは」

あ、噛んだ。しかしそろそろ止めないと刹那が僕に対する印象を変えてしまいそうだ。

「刹那、落ち着いてください。それでは真名にいい様にかかわれたままですよ。真名が言った経験とは恋愛の事で、刹那が思っているようなことでは無いですよ。それと、真名。これ以上刹那をからかうのはやめてください。僕は今まで誰とも、そういった関係にはなったことはありませんから」

からかわれていた。そう言われた刹那は、ようやく自分がからかわれていた事に気が付いたようだ。

「……真名、覚悟は良いか？今の私はいにく手加減出来そうに無いのでな。怨むなら自分を怨むが良い」

殺気全開で真名を睨む刹那。真名も少々やり過ぎたかな、と呟くが後の祭りとはこの事か。

「待て、刹那。何も悪気があってやった訳じゃないんだ。私はただ、場を賑わせ様としたまでであってだな、その方がアレンさんも話しやすいかなっと思ったただけだ」

必死に弁明する真名。刹那も今の説明で、納得は出来てないが理解は出来たようだ。先程までの殺気は今ももう無くなっている。

「それならば他の言い方があるだろうに。……すいません、アレンさん。真名が出しゃばるような真似をしてしまった」

刹那が真名の行いを謝罪してくる。

「いえ、気にしないで良いですよ。真名も僕の事を思ってたのだと言うので」

少なからず、ギスギスした空気よりかは賑やかな空気の方が、お互いが楽で話しやすいのは確かだし。

「本来なら話はこれから、って言いたいんだけどそろそろ学園長室がある女子中等部に到着だね。もう少し、アレンさんと話したかったんだけどね」

残念だよ、と肩をすくめる真名。見ると刹那も少し残念そうにしている。

「もし良かったら、今日の案内のお礼がしたいから学園長との話の後にお茶をご馳走したいんだけど、時間あるかな？」

たかが案内だろうと思うけど、やはりきちんとお礼はしたい。

「すみません、お気持ちは嬉しいのですが、私は午後から外せない用事があります……。今回は遠慮させていただきます」

「ふむ、ならば私はお呼ばれしようかな、つと言いたいがおそらく

は叶わないだろうから、またの機会にさせて頂くよ」

その時は刹那も一緒にね、と言う真名。しかし何故叶わないのだろうか？

「あの、叶わないってどういう事ですか？真名も何か用事が？」

「いや、私は特に用事がある訳じゃないんだ。ただ、学園長室に行けば自然と彼女にも会う事になるだろう。そうだったら、今日は引越しの事やらなんやらで時間が足りないだろうから、また後日ということさ」

彼女、多分と言うか絶対にリナリーの事か。確かに、リナリーと会えば今後の予定を話しあったり、住居の事も聞かなければならなくなる。そうなる二人にお礼をするどころか、余計な気を二人やりナリーにさせてしまいかねない。

「すみません、確かにそう言われればそうですね。自分から言っておいて何ですが、お礼はまた後日で良いですか？」

それでもやはり、お礼はしたい。

「此処で断る訳にもいきませんし、分かりました。また予定が空きましたら、その時にでも」

「二人別々は面倒だろうから、刹那の予定に合わせるよ。……これが私の連絡先だ。何か困りごとがあれば、その時は初回だけは安くしてあげるよ」

そう言って連絡先を書いた紙を渡してくる真名を、刹那が驚いた表

情で見る。

「驚いたな。まさか真名が初対面の人に、最初だけとは言え自分から安くするなんて言うとは……」

どうやらかなり驚きだったようだ。

「なに、ほんの気まぐれさ。アレンさんには、少なからず興味があつてね。これを気にもう少し、アレンさんの事を知ろうと思つてね」

僕に興味がある、と真名は言うが僕の何に興味があるのだろうか？

「あまり失礼な事はするなよ？あ、アレンさん、これが私の連絡先です。……それと、予定が空いた時に連絡を入れたいので、アレンさんの連絡先も教えてもらえないでしょうか？」

確かに、僕の連絡先を聞かない事には、刹那もどう連絡を取れば良いか分からないな。

「そうでしたね。……これが僕の連絡先です。大抵は暇でしょうか、気軽に連絡ください」

言いながら刹那と真名に、連絡先を書いた紙を渡す。

「ありがとう、なら私もたまに誘ってみようかな。……さてアレンさん。おしゃべりしてたら目的場所の学園長室に着いたよ。私達も案内したため一緒に入室はするけど、すぐに出て行くから実質此処で案内は終了だ。後は、補佐役のリナリーに任せるよ」

そう言って真名と刹那が、僕の前に出て学園長室の扉の前に立つ。

「学園長、白の教会のアレン・ウォーカーさんをお連れしました」

刹那がドアをノックして要件を話す。

「入りたまえ」

学園長と思われる声の中から聞こえた。

「失礼します」

刹那、真名、僕の順番に学園長室に入っていく。

「桜咲君に龍宮君、ご苦労じゃったの。後はこちらでやるから、君達はゆっくり休みたまえ」

ありがとうございます、と二人が言い部屋から出て行く。

「初めまして、アレン・ウォーカー君。わしがこの麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門じゃ。よろしく頼むぞい」

髭を撫でながらの学園長。長い髭だな。

「初めまして、白の教会本部から来ました、アレン・ウォーカーです。突然にも関わらず、学園に通わせていただきありがとうございます」

とりあえず自己紹介。ホント、よく他の関係者達は何も反論しなかったな。いきなり、白の教会本部の人間が学園に通いに来るなんて。

「それと、この子が麻帆良での君の補佐役になるリナリー君じゃ」

今まで、黙って僕の事を見ていたリナリーが紹介された。

「初めまして、リナリー・クロイツェフです。リナリーで良いよ。麻帆良でアレン君の補佐を任されてるの。これからよろしくね」

笑顔で話してくるリナリー。……やはり向こうのリナリーそっくりだ。

「初めまして、リナリー。これからよろしくお願いします」

「うん、こちらこそよろしくね」

なるほど、クレアさんがオススメする訳だな。

「さて、挨拶が終わった所でアレン君の今後の事なんじゃが、先ずはこれからリナリー君にはアレン君の新しく住む場所に案内を頼みたい。とは言ったものの、住む場所が同じアパートの隣の部屋じゃから、特に問題は無いじゃろう。その後の事は二人に任せるのでな。わしからは以上じゃ」

特に学園長からは何も無いらしい。まあ、住む場所については仕方ない。近くじゃないとリナリーがフォローし辛いだろうし。

「分かりました。それじゃ、リナリー。アパートまでの案内お願い出来ますか？」

「もちろんよ、アレン君。早速行きましょ。それでは学園長、私達はこれで」

簡単にすませて学園長室から出ようとする僕とリナリー。

「うむ、何かまた用事があれば此方から連絡するのでな。それではアレン君。麻帆良での良い夏休みをな」

ふおっふおっふおっと笑いながら部屋を出て行く僕らを見送る学園長。

「さて、アレン君。ここからアパートまで、先ずは駅に行かなきゃならないの。この学園都市は各エリアごとに分けられていて、この学園長室のある女子中等部や女子高等部のあるエリアは放課後以外は男子は入る事が出来ないの。今は夏休みだから、どのエリアに行っても良いんだけどね。私もこのエリアにある中等部に通っているんだけど、住んでる場所は違うの。本来なら、寮に住むなり近辺に住むんだけど、アレン君の補佐があるし、絶対って訳じゃ無いから気にしないでね」

ふう、ととりあえず移動しながら話すリナリー。なるほど、かなり広いとは聞いていたけど、まさかここまで広いとは……。

「あれ？リナリーって僕の一つ上でしたよね？なら何で女子中等部なんですか？」

「ああ、それだと私が先に卒業しちゃうでしょ？大学部まではあるけど、今は高等部の卒業までしか視野に入れてないらしくて、だからアレン君の学年に合わせて麻帆良に入れさせてもらったの」

なるほど、先にリナリーが卒業すると不具合が出るから、僕と同じ学年なのか。

「さて、そういう話している間に駅に着いたね。アパートのあるエリアはここから一つしか離れてないの。それで、アレン君の通う男子中等部は、その更に一つ向こうのエリアになってるの。間違えないようにしてね」

分かりやすく説明されたので、間違えることは無いだろう。

「と言うか、間違えるような事なの？」

「朝はかなり混雑してるからね。簡単に人の波に攫われる事もあるから、気をつけてね」

それはかなり厳しそうだ。下手に女性の波に攫われでもしてしまったら、痴漢扱い確定だ。

「そこは気をつけます。因みに、リナリーは攫われた事が？」

「私は無いんだけど、新入生の子がね。こっちの波に攫われて乗り合わせた女の子達に揉みくちにされた事があるらしいの」

まさかの痴女被害に合うとは。下手したらトラウマになりそうだな。

「それで、電車を降りて五分歩けばアパートに着くよ。道も分かりやすく、迷うことは無いから安心してね」

かなり立地条件の良いアパートだな。道もほぼ一本道だから迷うことは無いだろう。

「そして、ここがアレン君のこれから住むアパートだよ。私の部屋

の隣だから、二階の奥の角部屋ね。……はい、これがアレン君の部屋の鍵。一応、予備のも渡しておくね」

着いたアパートは五階建ての綺麗なアパートである。その二階の奥の角部屋が僕の部屋とのこと。

「因みに、他の部屋の人達に挨拶とかってしなくて良いんですか？」

引越し蕎麦を渡したりとかしなくて良いのかな？

「それについてはまた後でね。二階の部屋数もそこまである訳じゃないし。今はとりあえず、今後の予定を決めましょ？」

そう言うことなら、

今はこの先の予定を優先しよう。

「さ、アレン君。部屋の鍵を開けて。向こうから届いた荷物はすでに中に運んでいるから」

部屋の鍵を開けて中にはいる僕とリナリー。部屋の中は2LKとなっており、寝室もあった。余談だが、トイレと風呂は別々だった。

「今、お茶入れてくるからちょっと待ってて」

キッチンにお茶を入れに行ったりナリー。ヤバイな、頼りっぱなしになるのだけは何とか回避しないと。

「お茶くらい、僕が入れますよ。リナリーは座って休んでいてください」

「大丈夫。アレン君の方が長旅で疲れてるんじゃない？私は平気だから、アレン君が座ってて」

やはりリナリーは、何処の世界も同じなんだろうか？

「はい、外は暑かったから冷えた麦茶。アレン君、コートの下も長袖でよく暑くないね」

暑さに関しては、すでに慣れているので別に対した事はない。まあ、流石に部屋の中ではコートを脱ぐけど。

「さてと。じゃあ、アレン君、今後の予定を決めていく訳だけど、特に何か特別な事があったりする？」

ふむ、今まで助力者を連れて任務をした事が無いから、どうしても主導権がリナリーにいつてしまうな。

本来なら、リナリーが危険な目に会うような事があって欲しくは無いんだけど……。

「そうだね、まずリナリーには渡したい物、それから話さなければならぬ事があります。まず渡したい物はこれです」

持ってきた鞆の中から銀色の六角形の物をテーブルの上に置く。

「これって、……もしかして核鉄！？何でアレン君が！？」

リナリーは核鉄の事を知っているようだ。これを持っているのは黒の教会でも少なくは無いけど、そこまで出回っている訳じゃない。

「それも含めて話します。この核鉄の事、そして……僕の力の事を」
本来なら巻き込みたくない。でも、知らない危険より知っている危険の方が未然に防ぎやすい。その為に僕はリナリーに力の事を話す。
僕はもう失いたくない。だからリナリーの事も必ず護って見せる。
この左腕に誓って……。

少年は少女を護るべく、少女に話す。己の力を。しかし、少女もまた少年を守ろうと心に誓っていた。

二人は話す。己の力を。己の心を――

話すは己の力（後書き）

という訳で、ようやく出てきた核鉄。ぶっちゃけ、オリジナルにしようかどうか悩んでいます。どなたか良い案があればぜひ教えてください。

それと、感想を書いてくださりました方々。本当にありがとうございます。おかげでテンション上がりまくりです。これからも、罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。また感想は一つ一つ返信します。確認の方よろしく願います。それではまた次回

新たな決意、己の進む道（前書き）

まずは、お詫びを。感想受付をユーザーのみにしてました。制限を無くしたので、皆様気軽に感想の方を書いてくださるとありがたいです。

新たなる決意、己の進む道

リナリー side

「それも含めて話します。この核鉄の事、そして……僕の力の事を」
そう言って、アレン君は真剣な、しかしどこか悲しそうな顔をして私を見つめてくる。

「その前に、リナリーはクレアさんから僕のことについて何か聞かされましたか？ あったのなら、教えて欲しいのですが……」

そう言われて思い出す、あの時の事を……。

「久しぶりね、リナリー。中国で貴方をスカウトした時以来だから、もう三年近くになるかしらね」

時が経つのは早いわね、と言いながら再開を喜んでいるクレア元帥。

「でも驚きました。日本支部に元帥が来るだけでも驚きなのに、まさか私に直接任務を伝えに来るだなんて」

流石に元帥が直接任務を伝えに来るだけに、日本に来るなんて思いもよらなかった。

「ええ、この件については本部でも私を含めて数名の元帥しか知られてない事なの。だから、下手に他に情報が漏れる訳にはいけないの。今回の日本支部への訪問は、表向きは視察やら教会が援助している孤児院の子供達へのプレゼントを渡す事だけど、本当の目的は貴方にこの任務を伝える為なの」

そう、クレア元帥は既に日本支部の視察を終えて、孤児院へは明日行く手筈になっている。その忙しい中、自分がスカウトした子が居る筈だから連れて来て、と支部長に言って支部長が私をクレア元帥の所まで連れて来て、二人で話している。

「それでクレア元帥、その任務って……」

元帥でもその一部しか知らない任務。しかも助力者は私一人……。

「貴方には一足先に、関東にある麻帆良学園に生徒として通って欲しいの」

……生徒？

「あの、潜入捜査とかですか？」

「いえ、普通に通ってくれるだけで良いの。ただその際に、学園には貴方が白の教会所属と言うことは話しておいて」

それって、どんな意味があるのかしら？

「黒の教会の人はどうするんですか？」

「この子よ。一通り目を通しておいて」

クレア元帥が書類を見せてくれる。とりあえず読んでみる。

「…………嘘。……クレア元帥、ここに書かれてる事って……」

信じられない、違う、信じたくない。これが本当だとすると、あまりにも……。

「事実よ。当時、彼を弟子にしたクロスに非難が集中したわ。私達元帥も、彼を白の教会で保護しようとしたけど、それをクロスが拒否。何よりも彼自身が、強く拒んだの。自分は戦う人間だ、って言うてね」

言葉が出なかった。幼い子供が言うとは到底思えない。

「それから彼は、クロスに連れられ各地を転々と渡り歩いたらしいの。自分で任務に行くようになって、助力者を連れずに一人で戦ってる。私はね、リナリー。あの子を普通の生活をさせてあげれなかった事を、今でも悔やんでいるの。今では笑ったり怒ったりできるけど、昔はそれさえもできなかった。でも、やっぱりアレンには戦いの無い世界で、生きて、欲しかったの」

最後の方は涙を流しながら話すクレア元帥。

「今更アレンの生き方を変えることはできない。できないけど、せめて少しの間だけでも戦いの無い世界で過ごして欲しい。だから、アレンが長期任務でいない間にアレンの次の任務を此方で用意するの。麻帆良学園で生徒となり、今はまだいけないけどいずれ来る人物を監視するように、と」

その言葉を聞いて分かった。クレア元帥がどれほどアレン君を思っているのかを。

「それでねリナリー。良かったら、アレンと仲良くして欲しいの。貴方は私が見てきた人の中でも、特に人の心が分かる見たいだから。貴方になら、アレンも心を開いてくれる筈よ」

私になら、心を……。

「で、ですが、クレア元帥。私なんかで、大丈夫なんですか？聞けばアレン君は、今まで助力者を任務に連れて行かなかったらしいですし」

私はアレン君に必要とされるのだろうか？

「その点については大丈夫よ。現地での貴方の役割は、アレン君の生活をサポートして欲しいの。何分、学園生活なんてアレンにとっては未知数だからね。アレンも、物分りが悪い訳じゃないから」

だから、心配しないで。と微笑みながら言うクレア元帥。

「話が長くなったわね。…リナリーには直ぐに麻帆良学園に行ってもらおうわ。手続きなんかは此方で済ませるから、リナリーは引越しの準備をお願いね。アレンは今の任務が終わり次第、麻帆良に送るからおそらくは夏頃に会える筈よ。大変だろうけど、頑張ってね。アレンは強く生きているつもりだろうけど、簡単に壊れてしまいうな生き方をしているわ。だから、リナリー。アレンの事、よろしくね」

頭を下げてお願いしてきたクレア元帥。

「クレア元帥……。分かりました。アレン君の助けになってみせます。私の心に誓って」

クレア元帥との話をアレン君に話した。

「クレアさんが……」

自分がそこまで思われているとは思っていなかったのか、少し某然としているアレン君。

「アレン君、私はね、そこまで強い人間じゃないの。だから他の仲間に助けてもらったりしてる。私はアレン君の助けになりたい。もしかししたら、アレン君に守られるかもしれない。でも、私もアレン君を守ってみせる。あの時、クレア元帥にも誓ったけどもう一度、私はアレン君の助けになるって誓う。クレア元帥に言われたからじゃない、私が自分で守りたいって感じたから。私はアレン君を守ってみせる」

アレン君に私の思いを、気持ちを話す。私の心を知ってもらいたいから。

アレン君が話そうとしてくれた、核鉄の事やアレン君自身の力。そ

れを知った所で、私の心は変わらない。

必ず、アレン君を守ってみせる。

少女は心の言葉を少年に話した。一人じゃないと、教える為に。少女の決意を新たに、今少女の歩く道が見えてきた。

新たな決意、己の進む道（後書き）

はい、時間がかかったにも関わらずこの低クオリティ。今回はリナリー視点で、麻帆良に行く前の回想を交えてリナリーの決意を書きました。本来なら核鉄やイノセンスなんかの話にしたかったけど、あえてワンクッションおきました。

次回は今回書けなかった核鉄やイノセンスの話などなどの内容になるかと思いますが、よろしくお願いします。

随時、罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

力の使い道（前書き）

またまた説明だけの話になってしまいました。早く話を進めたいのに、どうしてもこうなった？

力の使い道

アレンside

驚くしかなかった。まだ会って少ししか経ってないのに、そこまで言えるリナリーにただ驚くことしか出来なかった。

でも、どうしてだろう。胸が少し、暖かくなったような気がする。

「……リナリー」

「なに？アレン君」

眩きにも近い言葉。それでもリナリーには聞こえていた。

「……ありがとう」

それしか言えなかった。僕自身驚いているから仕方ないが。リナリーは返事はしなかったが、代わりに笑顔で答えてくれた。………可愛いと思ったのは内緒だ。

「それじゃあ、そろそろ本題に入ろうか」

気持ちを切り替えて本題を話そうとする。リナリーも、真剣な表情をしている。

「まずリナリーに渡す核鉄の事を話します。そもそも、この核鉄は黒の教会でも持っている人はかなり限られています。黒の教会は人数がそこまで多くないことは知っているとと思うけど、これを持っている人は元帥を除けば十人しかいません。あまり多く作れる代物でもありませんから」

材料が珍しい鉱石やかなり貴重な物を大量に消費する為、量産が難しいのが事実だけど。

「私は一度だけ、クレア元帥を見せてもらったくらいで、あまり性能とかは教えてもらえなかったの」

クレアさんのを見たのか。確かにあの人は事あるごとに、自慢してたからな。リナリーも犠牲者だったか……。

「でも、何でそんな貴重な核鉄をアレン君が持ってるの？私にじゃなくて、アレン君が使った方が良いんじゃないかな？」

最もな疑問を聞いて来るリナリー。

「大丈夫ですよ。僕も持ってますから。これは僕の予備として保管していた物なので、それをリナリーにあげるので誰にも文句は言われません」

実際予備なんて、必要無かったけど念のため持っていただけだし。

「……どうして、アレン君は二つ持っていたの？まさか……盗んだんじゃないよね？」

リナリーに物騒な事を言われた。

「いやいや、盗んだ訳無いじゃないですか!？これは正真正銘、僕のですから!」

「あ、あはは。そ、そうだよね、そんな訳ないもんね」

ちょっと驚かせてしまったかな。でも流石に、泥棒扱いはごめんだ。

「ふう。まあ、ちゃんと説明はしますよ。元々、核鉄を開発したのは僕なんです。正確に言うと、核鉄の作り方を教会の元帥であり技術局長のファウスト元帥に教えて、そこからファウスト元帥が独自の改良を施してできたのが今のこの核鉄です。ファウスト元帥は僕の為に、核鉄を二つ作ってくださったのでその内の一つを予備にしていたんです。だから僕は、核鉄を二つ所有していました」

一人で核鉄を作るのは不可能に近かった為、技術局長でもあるファウスト元帥に頼んでみたところ、かなり興奮した様子で僕の書いた設計図を持って研究室に引きこもり、何と一ヶ月で試作品を作ってしまったのだ。あの時のファウスト元帥はかなり輝いていたな。…普段はマッドサイエンティストの癖に。

「核鉄を開発したのは、ファウスト元帥だって聞いてたけど、原案はアレン君だったんだ……。でもどうして、アレン君は核鉄を必要としたの？クロス元帥の弟子だったんだから、あまり必要と思わないんだけど……」

流石師匠。元帥の中でもかなりの強さを誇るから、その弟子である僕も強いと思われている。

「……実は僕、魔法が使えないんですよ。魔力を使う魔法具なんか

は使えるんですけど、どうしても魔法は発動できないんです。そんな時に思いついたのが核鉄です。魔力を消費する事で発動するので、僕にはピッタリだと考えていたんですが、材料や作る為の道具が無かったからファウスト元帥にお願いして作ってもらったんです」

「そうだったんだ……。ごめんね、気にしてる事聞いちゃって」

魔法が使えないのを気にしてると思われたらしい。

「気にしないでください。別に、魔法が使えないからといって不便だと思った事はありませんから。後、師匠に鍛えさせられたのが、魔法符ですね。市販されてるのより性能の良い符が作れます。攻撃や防御、転移の符は一通り作れるようにされたので自信はありますよ」

最初の頃は、全く役立たずな符だったけど今ではかなりの腕になったから、いちいち買わなくてもすむしね。

「結構、クロス元帥の修行って厳しいんだね」

リナリーがトラウマをついてくる

「ええ、本当に滅茶苦茶な人でしたよ。丸腰で紛争地に投げ込まれたり、精神修行とか言って真冬に氷の張った湖に投げ込まれたり、魔獣の目の前で符を書いて戦わされたりとそりゃあもう、自分でもよく頑張ったって褒めたいくらいですよ」

あの頃を思い出していると、どうしても自虐的になってしまう。

「……つくづくごめんね」

「いえ、リナリーが悪いんじゃないですよ。あの極悪非道の師匠が全て悪いんですから」

少なからず、あの修行を考えた師匠に責任がある。リナリーは何も悪くない。

「さて、話が少しずれましたね。それで、この核鉄は使用する際に魔力を流す事で、持ち主に合った武器に変化します。一度魔力を流せば、武器に変形したままで自分の意思で今度は解除をします。なので、魔力を多用する事なく済むので戦闘が非常に楽になります。ただし、核鉄を操る際には核鉄とシンクロしなければなりません。シンクロ率が弱いと、途中で武装が強制解除される事があるので、今は要修行ですね。戦うことに慣れるんじゃないくて、武装に慣れるようにしましょう。修行については、僕が教えますので二人で頑張りますよう」

とりあえずは、核鉄に慣れることから始めなければ、ぶっつけ本番は危険すぎる。

「持ち主によって武装が変わるんだ。なら私の場合、どんな武装になるんだろ？」

リナリーの武装錬金、……靴かな？

「そればかりは、使って見ないことには分かりません。ですが、修行する際には人目につかない所でやらないと、どんな事が起きるか分からないので、そこは注意が必要ですね」

あまり、この学園の魔法関係者に見られるのは避けた方が良いしね。

一応、核鉄は機密扱いだから。

「そうだね。流石に、周りに被害をだす訳にもいかないしね」

リナリーも分かってくれているようだな。

「最後に、僕自身の力。いわゆる固有能力ですけど、僕は二つ持ってます。一つはこの左眼です」

そう言って、左眼の方の前髪をあげてリナリーに見せる。

「……眼の上にあるのって、ペンタクル五芒星？でも何で逆さになってるの？」

「それはですね、厳密に言えばこの左眼は呪われているんです。昔、左眼に傷をつけられた時に呪われてしまい、それ以降人外の魂が見えるようになったんですよ」

呪いと言う名の、僕の罪。決して消える事の無い逆さ五芒星。

「呪い……。祓ってもらったりは？」

「していません。僕はこの傷を無くすような事はしません。これは僕の、……背負うべき罪ですから」

リナリーはそれでも何か言いたそうだったけど、あえてもう一つの方を説明する。

「もう一つが、この左腕なんですけど、これは生まれつきから持っていた能力です」

左腕の服の袖を捲って、リナリーに左腕を見せる。

「!?!?……この左手の甲に埋め込まれてるのって、十字架? これも生まれつきなの?」

真っ赤な左腕を見て、驚愕していたリナリーだが、恐る恐る観察して左手の十字架を見つけた。

「はい、これも生まれつきです。……この左腕の能力は、左腕が武器にと変化するんです。見ててください」

イノセンス発動。

「えっ!?!? 左腕が……鉤爪見たいになった!?!」

この世界にはないイノセンス。しかも寄生型の為、リナリーには刺激が強すぎたようだ。とりあえず、元に戻そう。

「今が僕の固有能力、イノセンスと言います。発動すると、今の様に左腕が変化してそれを武器に戦います。でも、人間相手にこれは使いません。人間には核鉄で戦ってますので。これは、どちらかと言うと魔の類に対して使っています。どうやら、そっち方面向き見たいなので」

人間には核鉄。魔にはイノセンスと分けて戦っている。

「一応、これが僕の能力の説明です。リナリーには刺激が強すぎたかもしれませんが、知ってもらいたかったので見せました。師匠やクレアさん達元帥は、この事を知っていますが、それを除くとリナリーが初めてですね」

あまり、人に言いふらす事でもないから黙っていた。

「……どうして、私には教えてくれたの？」

「僕もどうしてだか分かりません。けど、リナリーには話しておきたかったんです。左眼と左腕の事を」

これに関しては本当に分からない。何故リナリーに説明したのかが。でも説明するのに、抵抗はなかった。

「アレン君、私ね、話してもらえて嬉しいよ。最初はビックリしちゃったけど、それでも私はアレン君を拒絶したりはしない。その左眼と左腕、どちらもあってアレン君なんだから」

ああ、そっか。怖かったのか。この世界にはイノセンスはない、だから他の人が見たら僕は異端に見える。それが怖くて誰にも話さなかったのか。

「話してくれて、ありがとうアレン君」

そうリナリーに言われた。違うんだリナリー。お礼を言いたいの僕なんだ。元帥を除いて僕を受け入れてくれたリナリー。

「あり……が……とう」

ただ一言、声を振り絞ってだした一言。僕の胸はさっきよりも暖かくなっていた。

力の使い道（後書き）

アレンよ、何故そんなに簡単にリナリーに心を開こうとしているんだ。書いていてビックリだ。と言う訳で、アレンとリナリーの心の距離がまた縮まった話でした。なんだかなあ。

引き続き、罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。そろそろハーレムメンバーの募集も締め切るかも知れませんが、一応まだ受け付けてはおりますのでご要望があれば是非。

一時の休息（前書き）

今回でようやく初日が終わりです。一日がかなり長くりましたが、次回からはもう少しテンポよくいききたいと思います。

一時の休息

リナリー side

アレン君との話が終わり、今は二人でくつろいでいる。時刻はそろそろ六時になるうとしていた。

「もうこんな時間ですか。そろそろ晩御飯にしませんか？ 昼は機内食だったので、あまり量が無くて満足出来なかったんですよ」

と言って、お腹をさする仕草をする。

「なら少し早いけど、ご飯にしようか。……って言いたいんだけど、食材が足りないから外食でも良いかな？」

アレン君が来るって分かっていたら、買い出ししていたけど残念ながらそれができなかったから、今日は我慢してもらおう。

「良いですよ。でもお金は大丈夫なんですか？」

「領収書さえあれば、経費でおちる様になってるから。あまり無駄遣いしないかぎり、怒られる事はないから」

経費でおとさないと自腹になっちゃうしね。

「それなら大丈夫ですね。……着替えてから行くので、少し待っていてもらえますか？」

「なら私も着替えてくるね。待ち合わせは、アパートの外で。勝手に先行っちゃダメだよ？」

制服ってのも堅苦しいから、私も私服に着替えてこようっと。

「分かりました。ではまた後で」

「うん、また後でね」

そう言って、私も着替えに部屋に戻る。……何を着て行こうかな？

「ここが安くて美味しいって評判の中華屋台、超包子。経営してるのは、女子中等部の子達なんだけど味の方は誰もが美味しいって言うくらいなの。……かく言う、私もちよくちよく来てるんだけどね」

オーナーの超鈴音ちゃんを始め、お料理研究会の人達でこの店の料理を作っている。

「……まだ中等部なのに、店を持つ事ができるんですね」

「この麻帆良では、学園長の許可があれば持てるみたい。それ以外にもいろいろ許可は必要だけど、不可能ではないみたいなの」

そういうもんですか、と軽く流すアレン君。

「ダレかと思ったら、リナリーさんじゃないアルか。いらっしやいアル。……そっちの人は彼氏アルか？」

不意に声が聞こえたから、そっちを見れば古菲ちゃんがいる。……
って言うか。

「く、古菲ちゃん！？アレン君とは、か、彼氏とかまだそういう関係じゃないから！？」

いきなり彼氏とか聞かれたからかなりテンパってるのが、自分でも分かる。……アレン君が彼氏か…。

「そうアルか。なら何でそんなに、嬉しそうな顔をしてるアル？」

「えっ？」

自分の顔を触って見るが、いまいち分からない。

「自覚なかつたアルか。それで、お兄さんの名前は何て言うアルね？ワタシは古菲って言うアル。ここの超包子でアルバイトしてるアル。どぞヨロシクアルね」

苦笑いしていたアレン君に古菲ちゃんが名前を聞いてきた。

「初めまして、アレン・ウォーカーと言います。今日この麻帆良学園に来たばかりなので、こちらこそよろしくお願いします」

礼儀正しく挨拶するアレン君。ちょっと堅くないかな？

「転校生アルか。ワタシより、年上アルか？ちなみにワタシは、十

四アルヨ」

「なら僕の方が一つ年上ですね。リナリーと同学年なので」

アレン君は少し童顔ぽいから、ぱっと見では年下にも見えなくはない。……古菲ちゃんも実年齢より、下に見られがちだけど。

「おお、リナリーさんと同じ年だったアルか！？あまりそうは見えないアルけど……」

あはは、と苦笑いするアレン君。……そりゃ、本当は私はアレン君より一つ年上だしね。そう見られても仕方ないかな。

「つと、そう言えば古菲ちゃん、私達ご飯食べに来たんだった。今良いかな？」

話していてスツカリ忘れてた。見ればアレン君も忘れてたようだ。

「アイヤ、それはすまなかったアル。店の前で立ち話してたから、様子を見に来たんだたアルよ。それじゃ、二名様ご案内アル」

そう言って席に案内してもらった。時間も時間だから、今は人がいない状況だった。

「さてと。……私はいつものにしようかな。アレン君も、決まったら教えてね」

私が頼むのは、値段もお手頃で量もそこまで多くはないけど、女の子に人気のあるコース料理。

「なかなか豊富なメニューですね。……決めました。古菲、注文良いですか？」

アレン君も決まったみたいで、近くにいた古菲ちゃんに注文を頼もうとする。

「了解アル。リナリーさんは、いつものフカヒレのコースで良かたアルね。それで、アレンさんは何を食べるアル？」

「えっと、焼売と餃子と回鍋肉にエビチリと麻婆豆腐と春巻に炒飯とラーメンと焼きそばにフカヒレスープにご飯とカニ玉と担々麺とフカヒレ炒飯にデザートは杏仁豆腐とゴマ団子とマンゴープリンでお願いします」

………えっ!?

「ア、アレン君!?!頼み過ぎじゃない!?!」

一人で食べれる量を遥かに超えてるにも程があるから!?!

「あ、すみません。全部量多めでお願いします」

さらに全部大盛りとか!?!古菲ちゃんも途中で固まってるから!

「……ホントに全部大盛りで食べれるアルか?」

「もちろん、全部食べれますよ」

即答するアレン君。途中で書くのをやめていた古菲ちゃんは、アレン君にもう一度注文内容を聞いて厨房に入っていた。……厨房大

丈夫かな？

古菲side

もう驚くしかなかたアルね。リナリーさんが連れて来たアレんさんは、どう見ても大食いには見えないアル。

「おや、古。注文かな？リナリーさんはいつものだろうけど、もう一人の方は何を注文したのかな？」

親友である鈴音が聞いてきたアル。ワタシは注文を書いた紙を鈴音に見せるアル。

「……………これは本当に、彼が注文したのか。何かの間違いとかじゃ無くテ」

やはり、信じられないアルね。

「絶対に食べれるって言ってたアル。かなりの自信だったアルよ」

「ふむ、ならば此方も作るしかないかな？……………五月、やるヨ」

鈴音と料理を作るのは、同じクラスメイトの四葉五月アルね。かなりの腕があるらしくて、超包子で厨房を任されてるアル。そんな五月も頷いて作り始めたアルね。……………ホントに大丈夫アルかな？

リナリーside

「凄い……」

出てくる料理の数や量も凄いけど、それを次々とももの凄い勢いで食べてるアレン君。口の中がパンパンになりながらも、料理を食べ続けている。

「ほらアレン君、少しは落ち着いて食べようよ。口の周りが汚れてるよ?」

ん?と首を傾げるアレン君。

「ほら、動かないで。今拭いてあげるから」

新しくもらったおしぼりで、アレン君の口周りを拭いてあげる。

「ムグムグ……。すいません、リナリー。つい料理が美味しくて夢中になってました」

「だからと言って、そんなに詰め込まないの。喉に詰まっちゃうよ?」

大丈夫ですよ、と言ってまた食べ始める。……それにしても、本当に全部食べるなんて。

「ズズッ……。ふはあ、美味しかった。リナリーがオススメする訳ですね」

こんなに美味しいんですから。笑顔でそう言うアレン君。……ドキドキしているのは秘密。

「ホントに食べたアルね。見た目によらず、アレンさんは大食いアルよ」

積み重なった食器の山を見て、古菲ちゃんが驚きの声を出す。

「このくらいは、普通に食べれますよ。また食べに来ますね」

「いつでも来ると良いアルね。待ってるアルよ」

そう言って、古菲ちゃんは食器を持って厨房に片付けに行った。

「……………此方がお会計になります」

「えっと、領収書もらえるかな？」

お金を払って、領収書をもらう。この領収書は教会に渡して、経費でおとしてもらう。

「さて、それじゃ帰ろっか」

「そうですね。もう暗くなってきましたし、帰りましょうか」

二人並んで帰路につく。その時間はゆっくりと流れていく。ずっと変わらない日々が続けば良い。

歯車はゆっくりと動いている。少年を中心にゆっくりと……………。

一時の休息（後書き）

アレンならあのくらい余裕で食べれそうですね。更に追加で食べそうな気もしますがw

さて、今回は少し時間が進んでようやく初バトルが書けます。戦闘描写は苦手ですが、精一杯書きたいと思います。何卒、よろしくお願いします。

お気に入り気付けば200件超えてました。ありがたい事です。これからも、生暖かく見守ってください。

随時、罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。またそろそろハーレムの方も締め切ろうかなって考えています。ご要望はお早めに。

麻帆良での戦い（前書き）

かなりグダグダです。やはり戦闘は難しいですね。日常風景を書いた方が楽です。そんな事を考えさせられた今回の話。

麻帆良での戦い

アレンside

麻帆良に来て、十日が過ぎた。八月も半ばになって、夏休みも残すは後僅かになってきた。

この十日の間で、ここの生活にも大体慣れてきた。暇な時間があれば、麻帆良を歩き回り地理を調べたりしている。一人だと必ず迷子になるから、リナリーが着いてきてくれたりもする。たまに、真名が暇だからと言って連絡を入れてきて一緒に歩いたりもしている。

真名と刹那には、初日の案内のお礼にと約束していたお茶をご馳走したのを切っ掛けに、刹那とは簡単なメールのやりとりをするくらいになり、真名とは麻帆良巡りを一緒にするくらいに仲良くなった。たまにリナリーと真名と僕の三人で近場に遊びに行ったりも。

リナリーの核鉄の修行は、深夜なら多少派手な事をしないかぎり大丈夫だろうという事で、二時間程度の修行にしている。

リナリーの核鉄はやはり、靴の武装錬金だった。リナリー曰く、特に違和感も無く重さもあまり感じないとのこと。ただ、少し力を入れて走ろうとすると、思いも寄らない程のスピードになってしまう。その時は幸い怪我が無くすんだけど、今の内に力の制御をしっかりとしなければ、到底戦う事なんてできない。なので、今のリナリーの修行内容は、一時間は核鉄とのシンクロ率を高めること。武装状態で、自分の一部だと意識しながら歩いたりして馴染ませたりする。残りの一時間は、殆どが力の制御に当てている。リナリー自身も、感覚で覚えようと試行錯誤している。シンクロ率は問題無くなつて

きたから、そろそろ次のステップに上がろうと思っている。

「さて、そろそろ時間かな。今夜から新しい段階になるから、またリナリーに注意点を……………」

話そうかなと考えてたら、少し離れた場所に違和感を覚えた。修行時代、（無理矢理）師匠に叩き込まれた気配察知能力。無意識でもそれなりに強い気配が近くにあれば反応できるが、これが遠くになると違和感程度になってしまう。意識して集中すれば大体は分かるけど。

「この感じは……………！？戦闘か！？」

意識を集中させた所、その場所で戦闘が起こってるのに気がつく。

「リナリー！！！」

直ぐに部屋を出て、隣の部屋にいるリナリーを呼び出す。

「どうしたの、アレン君？大声なんか出して？今夜の修行について？」

「違います！少し離れた場所で誰かが戦っているみたいなんです！前にリナリーが話してくれた、関西呪術協会の人間が攻めてきたのかも知れません！」

関西呪術協会は、関東魔法協会の傘下である麻帆良を目の敵にしている、度々麻帆良に攻め込んで来るらしい。

「えっ！？本当なの、アレン君！？」

「かなりの気配を感じるんですけど、殆どが人間の気配じゃありません。恐らくは、鬼の類かと」

近づけば、左眼の探知能力でハッキリとするんだけど……。

「それ程の規模だと、多分他の場所も襲撃されてるかもしれないね。でも、アレン君……」

「……確かに、首を突っ込めば確実に僕の素性はバレるでしょう。でも、それでも僕は行きます」

戦うのなら、僕は黒の教会の人間として戦う。戦わなければならないんだ！

「分かったよ、アレン君。私も戦う。…私だって、戦えるんだから！」

「……危ないと思ったら、直ぐに逃げてください。約束です」

もし本当に危なくなったら全力で護ってみせる。

「アレン君も、決して無茶な行動しないでね。約束だよ」

そう言って、お互い直ぐに部屋に戻り準備をする。黒の教会服コートに身を包み、部屋を出る。リナリーは白の教会服コートを来ていた。リナリーのは特注のデザインで、動き易くなっている。

「さあ、行こう！」

リナリーはまだ瞬動ができないから、核鉄を使つての移動となる。
僕は瞬動や縮地は使えるが、今回は余裕が無いためリナリーの手を
掴んで移動する。

「うん、行こう！」

闇夜を、黒と白が疾走する……。

刹那 side

「くそ！こいつ等、斬ってもきりがないぞ！？」

襲撃は突然だった。今夜の見回りを真名としていたら、別の学区を
担当していたタカミチ先生から念話があり、
突然鬼が襲ってきたとの事で私と真名、他の見回りをしている人達
に警戒を呼びかけてきた。その直後、私と真名の周りに大量の鬼が
現れた。

「なに！？一体何処から現れたんだ！？術者の気配は無かったのに
！？？」

「恐らくは、召喚の陣を予め仕掛けていたんだろう。後はその陣に
魔力を流せば、勝手に鬼が召喚される仕組みになっていたんだろう」
面倒な事を、ぼやく真名。やはり相方が冷静だと、状況確認が的確
だ。……私は直ぐに熱くなるため、あまりそういうのが得意ではな
い。

夕風で近くの鬼を次々と切り裂いていく。真名も手当たり次第に銃
での確に鬼の脳天を撃ち抜いている。

「くらえ！神鳴流奥義、斬岩剣！！」

巨大な岩をも両断できる程の威力を持つ斬岩剣。硬い皮膚を持つ鬼
でさえも、切り裂く事ができる。これにより、周りで固まって動い
ていた鬼を次々と還して行く。

「まだだ！斬鉄閃！！はああああ！！！！」

斬岩剣の範囲外にいた鬼共に、螺旋状の気の斬撃を飛ばして倒して
行く。

「やれやれ、これは特別手当をもらわなければ割に合わないな」

両手に銃を持ち、軽やかなステップで敵を翻弄しつつ、正確無比の
銃弾が鬼達を襲う。

「しかしこのままでは、此方が圧倒的に不利だ。先に此方の体力が
無くなりそうだ、よっと！」

喋りながらも撃ち続ける真名。まだかすり傷程度ですんでいるが、
真名の言う通り体力が持つかどうかだ。体力が尽きる前に、術者を
探して捕えなければ！

「真名！魔眼で術者を探せないのか！？」

「先程から探してはいるんだが、鬼が邪魔で中々見つけるのが難し
くてね。気を抜けば鬼の攻撃を食らってしまうし、かなり手詰まり

の状況だ」

「援軍を期待したいが、恐らくは他も同じ状況か。ならば、一気に蹴散らすのみ!!」

気で身体能力を底上げして、夕凧を振るう。気を使えば体力は減る一方だが、出し惜しみしている場合でもない。

「たあああ!! 斬岩剣!!」

とにかく斬る。何とか持ちこたえて、勝機を見つけなければ。

「はあ…はあ…はあ……。……真名、まだ生きてるか？」

「ふう……。何とかね。しかしもう弾丸も尽きてしまっただね。かなりヤバイ状態だ」

背中を合わせて真名と話す。気での強化も限界になってしまい、最早斬岩剣すら放てない。

「姉ちゃん達、よお頑張ったなあ。そやけど、どうやらここまでの様やな。オレ等も仕事やさかい、堪忍してな」

私の前にいる鬼はそう言って、手にしている棍棒を振りかぶって叩きつけようとしていた。

「刹那!!」

後ろにいる真名が叫ぶ。避けようにも、既に体はボロボロで夕風で体を支えている為、防ぎようがない。

「（ああ、ここまでなのか……。……。このちゃん、堪忍なあ）」

心の中でお嬢様に謝る。……。さようなら、このちゃん。

あれ？いつまで待っても鬼の攻撃がこない。でも周りは真っ暗。一瞬、もう死んだのかと思ったがどうやら目を閉じていたようだ。

「ふう、何とか間に合ったかな」

声が聞こえた。鬼の声でも無く真名の声でもない。それでも私はこの声の人物を知っている。

知り合ってまだ間もないが、こんな私と仲良くしてくれてくださる人。でもどうして？何で貴方がここにいますか？疑問は尽きない。

「遅れてすみません。刹那。真名はリナリーが助けました。後は僕達に任せてください」

閉じてた目を開く。私の目の先にはリナリーさんと真名が。そして

私の後ろには。

「アレン……さん」

初めて会った時に着ていた白いコートじゃなくて、黒いコートを着て私を守ってくれてるアレンさんがいた。

A l e n s i d e

何とか間に合った。鬼の攻撃が刹那に当たる前に鬼を蹴り飛ばす。真名はリナリーが助けて、今は刹那同様、真名も呆然としている。

「ア、アレンさん！？ どうしてここに！？ それにリナリーさんまで！？ 危険ですから逃げてください！！ この鬼達は次から次へと現れます！ お二人では敵いません！！」

「そうだね、助けてくれたのは嬉しいんだけど、今はここを離れた方が良く。援軍を待とう」

刹那と真名が撤退を呼びかける。

「それは出来ません。援軍がいつ来るかも分かりませんし、それに何より二人が頑張ったのに僕達は何もせずに逃げるだなんて、絶対に出来ません」

「大丈夫だよ、二人とも。二人は私達を守ってみせるから」

僕とリナリーの言葉を聞いて、二人は更に啞然としている。

「おい兄ちゃん、えらい立派なこと言うてるけど、ひよろっちい体で勝てると思っとるんかい。それに兄ちゃん何処のモンや？その嬢ちゃん達とはまた格好が違うけど、ここの生徒なんやろ？」

刹那は学園の制服で、真名は仕事着でいる。

「ええ、僕もここの生徒ですよ。そして……黒の教会の人間です」

「なんや、よう分からんけど邪魔するなら容赦せんで！」

そう言って襲ってくる鬼。刹那と真名は後ろで叫んでいるが、僕は核鉄を構えて立ち向かう。

本来ならイノセンスで戦うんだけど、リナリーが極力使わない方が良いと言ってきたので、核鉄で戦う事にした。まあ、人外にも核鉄は通用するから良いんだけどね。

「武装錬金!!」

発動キ―を唱えて核鉄に魔力を流す。すると、核鉄が光だしてその形を変える。

「クラウンソード！」

150?ほどの大きさの大剣が現れる。見た目は、退魔ノ剣によく似ているが能力は全く違っている。

クラウンソードを両手で持ち、構える。今まで呆然としていた鬼が一斉に襲い掛かってくる。

「ふっ！」

横薙ぎに剣を振るう。突っ込んでくる鬼を横に両断して、その数を減らしていく。しかし、術者が魔力を流している状態のため、新しく鬼が召喚される。

「恐らく術者は、この鬼達の後ろに潜んでるとみて良いかな。…リナリー！僕がこの鬼達を一気に蹴散らします！蹴散らした隙をついて突破して、術者を捕らえてください！」

「分かったよ、アレン君！術者は気絶させれば良いの？」

捕らえ方についてリナリーが聞いてくる。

「この捕縛符を使ってください。そうすれば無力化できます」

「うん、分かったよ。…それじゃあ、アレン君。気をつけてね」

リナリーに自作の符を渡して、再び鬼を相手どる。

「行くぞ！！うおおおお！！」

鬼の群れに斬り込んで突撃する。ざっと数えて三十はいる鬼。だがやれない事はない。このまま全力で道を作る！

「一気に決める！剣技、十字架ノ墓！！」
クロス・グレイヴ

目の前にいる三十近い鬼に十字架の斬撃を刻みつける。斬撃の速さは一瞬で、鬼も反応する事ができず呆気なく還っていく。鬼の壁の

向こう側に、術者が慌てる素振りを見せている。

ブンッ、と陣が光だして新たな鬼を召喚しようとする、その一瞬の隙。

「今だ、リナリー!!」

リナリーの武装鍊金、シルバーブーツでならこの一瞬で術者の元に辿り着ける。

「任せて!」

足に力を入れ、体制を低くして走り出す。まさか一瞬で間合いを詰められるとは思っていなかったのか、術者はなす術なく文字通り突進してきたリナリーの攻撃をモロに食らう。

「これで、終わりよ!!」

リナリーが捕縛符を術者に貼り付ける。そうすると、今まで魔力を流されて維持していた陣が機能を停止し、崩壊した。術者の方は、リナリーの高速の突進を食らって気絶している。念の為、腕を縄で拘束して魔法の媒体になっていた指輪をその場で破壊。これで完全に無力化した事になる。

「す、すごい……」

「本当にね……。これでは此方の立つ瀬が無いよ」

僕とリナリーの戦闘を間近で見ていた刹那と真名が、呆然とした様子で此方を見ている。

「アレンさん、リナリーさん。ありがとうございました。二人には本当に、何とお礼を言えば良いのか……」

「私からも言わせてもらおうよ。本当にありがとう。私や刹那を助けてくれて」

二人がこぞって、僕とリナリーに感謝の言葉を言ってくる。

「いえ、二人が無事ならそれで十分ですよ。元々、お礼とかが目当てじゃ無いんですから。ただ助けたかっただけですから」

「そうだね、本当に間に合って良かった」

少しでも遅かったらどうなっていたか。……想像だにしたくない。

「……それで、助けてもらって何なんですが、……あのお、……そのお……ですね……」

刹那が何か言い淀んでいる。まあ、内容は予想できるけど。

「……そうだね、私も気になる……かな。助けてもらっていて……なんだけど」

やはり真名も聞きたそうにしていた。リナリーを見ると、リナリーも僕を見ていて二人に話す覚悟をしていた。この二人に話せば、確実に学園長の耳に入る事になる。

それは承知の上だ。知られるのを恐れていては、護れる人も護れなくなってしまう。だから僕は後悔していない。……若干師匠やクレ

アさん、ゴゴ元帥に報告するのに気が重くなるけど。

「……………！刹那、今夜の襲撃はかなり苦戦したな」

いきなり真名が刹那に話しかけた。

「？苦戦したも何も、現にこうしてお二人に助けてもらったんじゃないか？」

「いや、刹那。今夜、私達はかなり苦戦を強いられたが、何とか術者を捕縛する事ができた。戦っていたのは、私達二人だ。そう学園長達に報告しよう。…そして明日、アレンさんの部屋に二人でお邪魔に行こうじゃないか」

僕とリナリーは驚くしか無かった。真名は今夜の事を秘密にしてくれろみたいだ。刹那はまだあまり理解できていないのか、首を傾げている。

「真名？一体何を……………！？なるほど、そう言う事か。……………それで、良いですか？」

「正直、僕達はあるがたいんだけど……………。本当に良いですか？」

「そうだね、私達も学園長達にバレる事を承知での事だったのに……………。私達の事を黙っていると、二人も危ないんじゃないの？」

そう、僕達は、厳密に言えば僕だけだけど、正直に黒の教会の人間だと話すだけで良い。でも、二人が今夜の事を隠蔽すると、不利な状況になるのは刹那と真名になる。

「お二人は、私達を助けてくださりました。ならば、私達も出来る限りの事をします。……ですが明日、私と真名にお話してほしいです。もちろん、学園には報告しません。私はお二人の事を、信頼しています」

「私も刹那と気持ちは一緒に、二人の事は信頼しているよ。助けてくれた恩義もあるし。けどやはり教えてもらいたいね。二人の事を」リナリーを見れば、微笑んで僕を見ていた。僕に判断を任せてくれるようだ。

「二人とも、ありがとうございます。明日二人には、本当の事を話します」

そう僕が言うと、刹那と真名は嬉しそうな顔をする。リナリーも僕の答えに賛成してくれてるようで、ただ微笑んでいる。

「それではアレンさんにリナリーさん、私達は襲撃犯を連行しますのでこれで失礼します。多分、他の学区も終わっているでしょうから、帰りは見つからないようにしてください」

「多分、先生達が他の学区を見回りしている可能性があるからね。気をつけて帰ってくださいね」

刹那は野太刀を片手に、もう片手に今だ気絶している術者を引きずるように歩き出す。真名はそんな刹那の横に並び、この場を離れて行った。

「私達も帰ろっか」

「そうですね。一応、見回りに気をつけながら、帰りましょう」

二人並んで、この場を後にする。麻帆良での初めての戦い。これをきっかけに、運命はどの様に少年を導くのか。今はただ、月の光が二人を照らしている。

麻帆良での戦い（後書き）

めっさ、戦闘短かったですねorz

それ以外の描写の方が長くなってしまいました。やっぱり戦闘シーンは難しすぎる。期待していた読者の方々、本当に申し訳ありませんでした。見捨てないでくれるとありがたいです。

戦闘シーンについてアドバイスしてくれる方を、密かに募集します。よろしくお願いします。

また、罵詈雑言以外の感想もお待ちしております。そして、ハーレムメンバーですが、次回を含めて後2回の募集で締め切らせてもらいます。ご希望のある方はお早めに。

守るのは大事な人（前書き）

少し遅くなりました。今回は最初だけ少しエロい？です。反省はしているが後悔はしていない。そんな今回の話。

守るのは大事な人

刹那 side

昨夜の大規模な襲撃は、負傷者こそ出たものの幸い重傷を負った生徒や先生はおらず、何とか撃退することができた。襲撃してきた術者達は、学園側に引き渡し妥当な処分をするとのことで幕を降ろした。……少しの秘密を抱えて。

「ん……ん……ん」

朝、起きて軽く伸びをしてベッドから降りる。流石にまだ疲れが残っていて、動くのが少し怠い。今の時間とは思いつ計を見ると、まだ九時になったばかりだった。

「……真名は……まだ寝てるのか……」

ぼんやりとした視界で真名のベッドを見ると、暑かったのか布団を蹴飛ばした格好で寝ていた。その為、今の真名の格好はかなりマズイ事になっている。上は薄手のシャツを着ているが、半分程めくれている為胸の下半分が露出している。しかもブラジャーをしていない。……大きいな……。私もあれくらいとは言わないが、もう少し大きくなりたい……。更に視線を下に向けると、ベッドの下に寝巻きのズボンが落ちていた。……真名はかなり大人びたのを履いているんだな。しかも黒か。肉付きも良くて足もスラリと長くかなり羨ましい体をしている。褐色の肌に黒髪のロングストレートで背も高くモデルのような体型。……ぐすっ……。

「……人の身体を見て何をしてるんだい？……欲情でもしたのかな？」

いきなり真名が喋ったのにビックリして、固まってしまった。…と
言うか、欲情って。

「おや？もしかして、本当に欲情したのか？……仕方ないな、少し
だけだぞ？」

そう言って真名は、自分の下着に手をかけ下げる仕草をする。

「な、何を馬鹿な事を言っているんだ！誰が欲情なんかしていると
言った！？それと下着を脱ごうとするな！」

何とか止めることができた。

「冗談だよ。そう朝から大声を出すなよ。みっともないだろう？」

「誰のせいだと思っているんだ、お前は……」

朝から無駄な体力を使ってしまった。

「なに、朝から陰気臭いのよりかはマシだろ。たまにはこんな朝も
悪くないさ」

「そういう問題か？と言うか、たまにでもこんな朝は嫌だ」

それは残念、と言いながらベッドから降りる真名。ズボンもはき直
して身だしなみを整えている。

「まあそう言わずに。今の時間は……っと、まだ余裕はあるな。朝ご飯を食べてからお邪魔しに行こうか」

「そうだな、……場所は分かるのか？」

前にアレンさんから教えてもらったが、実際に行った訳じゃないから少し不安だ。

「ああ、何度か尋ねた事があるから問題はないよ」

「そうか。話では聞いていたが、本当に仲が良いんだな」

あの真名がここまで、男の人と仲が良くなるなんて今まで見た事がない。

「そうだね、かく言う私も驚いてるよ。最初は興味本位だったけど、今では純粋にアレンさんの事を気に入っているのがね」

参ったな、と頬をかきながら照れている真名。

「お前でも照れたりするんだな」

「そりゃそうさ。女の子だからね。そろそろ朝ご飯にしようか。少しばかり話しすぎたようだ」

確かにそろそろ食べなければ、ギリギリになってしまう。私も領いて朝食を食べることにした。

朝食を食べた私達は、アレンさんとリナリーさんが住んでいるアパートへと向かっている。途中で手土産にと、真名と私でアレンさんの好物であるみたらし団子をそれぞれ二十本ずつ買った。……少し買いすぎたかな？

「なあ真名。やはり買いすぎたんじゃないか？いくら好物だからと言って、限度があるだろ？」

「刹那は知らなかったな。ああ見えてアレンさんは、かなりの大飯食らいなんだ。私も初めて見た時は、流石に自分の目を疑ったよ」

真名はそう言うが、やはり半信半疑だ。別に真名を疑う訳じゃないけど、少しばかり大袈裟じゃないだろうか？

「っと、着いたよ刹那。このアパートの二階だ」

辿り着いたアパートは、外装も綺麗で中々良いアパートだと思う。

アパートの二階の奥の部屋。ここがアレンさんの部屋か。隣はリナリーさんの部屋とのこと。真名がドアをノックする。すると中からアレンさんが出迎えてくれた。

「いらっしやい、刹那に真名。わざわざ来てもらってありがとうございます」

「いえ、私達が来たいって無茶を言ったので。此方こそ今日はありがとうございます。後コレは、私と真名からです。リナリーさんと一緒に食べてください」

私と真名の買ってきたみたらし団子をアレンさんに渡す。

「中はみたらし団子だよ。評判の良い店で買ってきたからね。きつと満足してもらえるとと思うよ」

「本当ですか！ありがとうございます！それじゃあ中にどうぞ。リナリーも来てますから」

みたらし団子と分かったら、ご機嫌のアレンさん。その笑顔に少し胸の鼓動が高まった。

「「お邪魔します」」

部屋の中は至ってシンプルだった。特に物がある訳でもなく、逆に少ないようにも見える。

「刹那に真名、おはよう。みたらし団子ありがとうね。後で皆で食べましょうね」

居間にいたりリナリーさんが挨拶してきた。

「おはようございます、リナリーさん。みたらし団子、気に入ってもらえれば良いのですが」

「おはよう、リナリーさん。あのくらいの量なら軽くアレンさんが食べきりそうだけどね」

私と真名も挨拶し、他愛のない話をする。

「そうかもね。でもやっぱり皆で食べた方が美味しいよ」

「アレンさんはガツカリするだろうね」

真名が笑いながら、アレンさんを見る。

「うっ……。そ、それよりも先に話をしましょう。みたらしはその後で」

ガツカリしていたようだ。……。その反応はズルい。可愛く思ってしまった。

「それじゃあ、その、教えてもらえますか？アレンさん達が学園側に秘密にしている事を。あ、もちろん、話せない部分もあるでしょうから、その辺は深く聞いたりしないので」

いくら教えてもらえるとと言っても、言えない話もあるだろうからそこはあまり聞かないようにする。

「刹那の言うとおり、私達が知りたいのはアレンさんが何者かって事が第一かな。話せる範囲で構わないよ」

真名も余計な事を聞くつもりはないみたいだ。私と真名の話を聞いて、アレンさんとリナリーさんは啞然としていた。

「……どうして、ですか？」

「昨夜も言いましたが、私はお二人を信頼しています。けど、だからと言って話にくい事を無理に聞くつもりはありません。それに私達は助けてもらった立場ですし、こうやって話していただけるだけありがたいです」

「そう言う訳さ。アレンさんが不思議に思うのも仕方ないとは思いますが、私達もアレンさんを困らせたくないんだよ」

リナリーさんは目に涙を浮かべ、優しく此方を微笑んでいた。

「ありがとうございます、二人とも。本当に、ありがとう」

アレンさんも私達に深く頭を下げて、お礼を言ってきた。

「まず最初に、僕はリナリーと同じ白の教会の人間ではありません」

アレンさんが話を始めた。私と真名は黙って話を聞いている。

「僕は白の教会のもう一つの顔である、黒の教会の人間です」

アレンさんが、黒の教会の事を色々話してくれる。私は知らなかったが、真名は昔耳にしたことがあったらしいが、やはり詳しくは知らなかったようだ。

「また、黒の教会の人間は周りからは黒の聖職者エクソシストと呼ばれています。本来エクソシストとは、魔を討つ為の存在ですが今では人々を魔から守る為の存在となっています」

エクソシスト。確か昔魔女狩りなんかがあったときに、真っ先に討伐に当たったのがエクソシストだと聞いている。しかし、魔女狩りを行ったのが全てがエクソシストではないらしい。

更にアレンさんが、この麻帆良に來た本当の理由も教えてもらった。魔法世界の英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子が、この麻帆良に來るらしいからその監視をしに來たとのこと。それと、きちんとこの麻帆良学園を卒業するとのことだった。

「監視、ですか。アレンさん達は、そのネギ・スプリングフィールドを危険視しているんですか？」

「良くも悪くも、英雄の息子ですからね。潜在能力はかなりのモノだと考えています」

明確に危険とは言わないが、やはり注意は必要とのことらしい。

「ふむ、アレンさんの立場は理解できたよ。確かにそれなら、あまり学園側には知られない方が良いだろうね。だが、いまいち分からないのは何故その英雄の息子が、この麻帆良に來るのかって事だね。魔法世界でも構わないと思うんだけど」

「それに関しては、僕もよく分からないんです。ただ、もしかしたらそうせざるを得ない状況なのかも知れません」

「一応、本国でも調べているらしいけど、情報が隠蔽されてて時間が掛かるみたいなの」

アレンさんの説明にフォローを入れるリナリーさん。

「なるほどね、まあまだ來るのには時間があるし、焦った所で仕方がないよ。來たときに対処できるようにすれば良いしね。その時は、微力ながら手伝わせてもらうよ」

「そうですね。私も表立っては難しいとは思いますが、お二人を影からお手伝いします」

私と真名も無関係ではないんだ。ならば少しでもアレンさん達のお役になれるように頑張ろう。

「ありがとうね、刹那、真名。でもあまり無茶はしないでね。それでもし二人が狙われる立場になる様な事があれば、すぐに私達に話してね」

「リナリーの言うとおり、本来は僕とリナリーの任務ですからそこまで危険な事はしないでください」

アレンさんとリナリーさんはやはり私達に害が及ぶのを良しとしていない。それでも、私は二人の力になりたい。……しかし、そこでふと思うのは私の大事な人の安否だった。

「?どうしたんですか、刹那?何か考えているみたいですけど」

顔に出ていたのか、アレンさんが聞いてくる。

「刹那、もしかして木乃香の事かい?」

「!?!」

真名は私の事情を知っている。だからお嬢様の事だと分かったんだろう。

「失礼ですが、木乃香さんとは?」

「…………近衛木乃香お嬢様。学園長のお孫さんにして、私が護衛している人です。お嬢様は、関西呪術協会の長、近衛詠春様の娘で本来なら総本山のある京都にいるはずなのですが、少し訳あってこの麻帆良に引っ越して来ました。私も幼少の頃にお嬢様と一緒にいたのですが……」

どうしても言葉が続けない。私はあの時お嬢様の近くにいたにも関わらず、お嬢様を危険な目に合わせてしまった。その件について長は、私に落ち度は無いと仰ってくださいましたが、それでも私は自分が許せなかった。……それに、私はその事が無かったとしても、お嬢様のお側にいる事はできない。できない理由がある。

「…………護衛と言っていました、それは昔からそうだったんですか？」

アレンさんの問いに頷いて答える。

「刹那と木乃香さんの事は深く聞くつもりはありません。ですが、これだけは聞かせてください。…………木乃香さんは、大事な人ですか？」

「もちろんです。木乃香お嬢様は、私の初めての友達にして、最も大事なお方です。お嬢様の為ならこの命、惜しくはありません」

これだけは胸を張って言える。お嬢様は私の大事なお方だと。

「…………刹那。木乃香さんがどれだけ大事な人かは良く分かりました。ですが、命を捨てるような真似はしないでください」

「!?!? 何故ですか!?!? 私はお嬢様を守る為ならば、命くらい……!?!?」

バチンッ!!

惜しくありません、そう言おうとしたが言えなかった。リナリーさんが何時の間にか近づいて来ていて、私の頬にビンタしたからだ。

「そんな、簡単に、命を投げ捨てるような事、私は許さない!もし、刹那が、自分から死に行きそうになったら、助けてやるんだから!何回でも!助けてやるんだから!!」

泣きながら怒るリナリーさん。私は頬を抑えながら呆然としている。

「……リナリーさん。コレを使って涙を拭いて」

真名がリナリーさんにハンカチを渡す。リナリーさんが少し落ち着いてた所で、アレンさんが話してきた。

「刹那。何故リナリーがキミを叩いたか分かりますか?リナリーはもちろん、僕や真名も同じ気持ちです。刹那には死んで欲しくないからです。それに、刹那のその考えで一番傷付くのは誰でも無い木乃香さんなんですよ」

「…えっ?」

どうして?何故お嬢様が?

「自分の所為で刹那が死んだと分かったら、間違いなく木乃香さんは自分を責めるでしょう。自分が刹那を殺した、と」

……何も言えなかった。そんな筈はない、そう言いたかった。けれ

と言えない。お嬢様の為と思っていたが、それがお嬢様を苦しめるなんて、思っても無かった。

「……私は、どうすれば良いのですか……。お嬢様のお側にいる事もできず、お嬢様の為に戦えばお嬢様が悲しむ。……お嬢様を守る事だけが、私にできる事なのに……」

身寄りも無く、ひとりぼっちだった私。同じく総本山で子供はお嬢様お一人。嬉しかった。こんな私とお嬢様は友達になってくださった。それが支えとなり、今の私がいる。なのに、なのに!!

「刹那。刹那は今、一人ですか？」

アレンさんの言っている事がイマイチ理解できず、首を傾げてしまふ。

「少なくともここに三人、刹那の事を大事に思っていますよ」

ニツコリと、私に笑いかけてくれるアレンさん。まだ目は赤いけど、それでも微笑んでくれているリナリーさん。やれやれと、困った仕事はしているがそれでも離れずにいてくれる真名。

「一緒に護りましょう、刹那。刹那はもう、一人じゃないんですから」

限界だった。気付けばアレンさんの近くまで行き、アレンさんに抱きついて泣いてしまった。

「うう……うわあああああ！」

アレンさんに泣きついた。アレンさんも優しく頭を撫でてくれる。みっともなく、大声を出して泣き続ける。でも不思議と胸は暖かった。

ああ、私は一人じゃ無いんだ。

守るのは大事な人（後書き）

真名が若干壊れ気味ですね。

今回は刹那の説教と言う名のフラグ回でした。少し強引かと思ったけど、そこはご都合主義と言う事で一つお願いします。

罵詈雑言以外の感想を受け付けています。ハーレムメンバーも次回でいよいよ締め切ります。まだ要望のある方はお急ぎください。

乙女の受難（前書き）

まず先にお知らせが。今回の話は長くなる為、またいくつかに分けていきたいと思えます。なので、展開が遅くなるかもしれませんが、どうかよろしくお願いします。

乙女の受難

明日なんかこなければ良い。

九月なんて来てほしくない。

けれど無常にも時は進み続ける。

いくら願っても止まってはくれない。

提出しなければならぬ宿題がまだ終わっていないのに。

明日菜 side

「ああもう！何でこんなに残ってんのよ！」

机の上には大量の夏休みの宿題が散乱している。残る夏休みも後一日。つまり明日中にこれを全部終わらせないといけない。

「何で一つも終わっていないのよ……。これじゃ明日終わるかどうかも分からないじゃない！」

「そんなこと言うてもなあ。毎日少しずつやれば良えのに、明日菜は全く手えつけへんのやし。そら仕方ないことやえ？」

私が宿題で大変な思いをしていると、木乃香がベッドに座って足を

ぶらぶらさせながら、そんな事を言ってきた。

「それはそうだけど……。と言うか、木乃香は終わったの？ そんな余裕にしてるけど？」

「ウチは終わったえ。やから宿題見せて上げることはできるで。やけど、読書感想文はどないする？ 本を借りて読まなあかんし」

流石木乃香。毎年頼りになるなあ。でも読書感想文か。

「うう、本読むの嫌いなよね……。ねえ、木乃香？ 良かったらそっちも手伝ってくれない？ 私にも読みやすい本を教えて？ お願い！ この通り！」

木乃香に両手を合わせてお願いする。もはやなりふり構ってはいられない。ここは親友である木乃香の力が必要なのだ。

「分かったえ。なら明日一緒に、図書館島に行って本を探して来ような」

「ありがとう木乃香！ 頼りにしてるわよ！」

やはり持つべきは親友。しかも木乃香は図書館探索部の一員だから、本にも詳しい。これなら何とか間に合うかも。

「せや、他にも声掛けてみん？ もしかしたら、まだ終わってない人がおるやもしれへんし」

「そうね。うちのクラス、勉強嫌いが結構いるからもしかしたらいるかもね。それに、大勢の方がはかどるかも知れないし」

不名誉ながら、うちのクラスにはバカレンジャーたる称号を持つ生徒がいる。……私もその内の一人だけど。でも私の他にもバカレンジャーはいるんだから、当然そのメンバーは宿題が終わっていないだろう。

「ほなら、メールで誘っておくわな。時間は朝の十時くらいで良えよな？」

「まあ、そのくらいの時間が妥当でしょうね。早すぎず遅すぎずだし」

分かったえー、と言いながらクラスの皆にメールを送っている。果たしてどれくらい、集まるかな。……私も急いで宿題終わらせなきゃ。

真名side

夜、自室にて暇を持て余していると携帯にメールが届いた。アレンさんが送ってきたのかな？

「どれどれ……。なるほど、これはまた面白い事を…」

「どうした、真名？誰からだったんだ？」

メールの内容が気になったのか、刹那が聞いてきた。

「いや、今木乃香からメールがきてね。どうやら、まだ夏休みの宿題が終わってない人を誘って、皆で図書館島で勉強をしないか？だ

とさ。と言うか、刹那はメールきてないのか？」

「うっ、……お嬢様には私が携帯を持っている事を話していないから……。こなくて当然だ……」

はぁ、やれやれだな……。

「いい加減素直になったらどうだ？いつまでもそんな状態では、アレンさんに申し訳ないだろ？あの時はアレンさんの胸元で泣いたくせに……」

「それは……そうなんだが……。それにあの時は、無我夢中だったから……そのお……」

アレンさんに泣きついた時の事を思い出しているのか、少しもじもじする刹那。……乙女だ。

あの後、アレンさんは今の刹那と木乃香の微妙な距離関係を知って、刹那に助言をした。

「今の状況では、刹那が一方的に避けてしまっている為、護衛としての意味があまりありません。なので、これから少しずつ距離を縮めて行くように頑張りましょう。もし、上手く距離を縮めれないようでしたら僕達も協力して、刹那の力になります。なので、困ったらいつでも言ってくださいね」

アレンさんがあそこまで言ってくれたにも関わらず……。

「イマイチ踏ん切りがつかないのか？」

「……今まで私は、お嬢様を避けるような形で接してきていたんだ。やはり、どう接して行けば良いのか分からないんだ」

まあ、今までが今までだ。刹那自身、あまり人付き合いが上手い方じゃないからね。

「ふむ、ならばこれを機に木乃香と近づこうじゃないか」

「図書館島での勉強会か？真名は宿題終わってないのか？」

確かに私はもう宿題は終わっている。が、しかし。

「刹那、聞けけどお前は宿題終わったのかい？私が知る限り、まだ読書感想文が残っていたと思うんだけど」

刹那も、どちらかと言うとあまり勉強ができる方ではない。この夏休みは私と一緒に勉強することもあったので、比較的早い段階で宿題はあらかた終わらせていた。

「あ、……そうだった……。まだ題材にする本すら決めてない……」

そんな事だろうと思った。

「なら、決まりだな。明日の勉強会は参加しよう。なに、私も着いて行くからフォロー何かはしてあげれるよ」

「あ、ありがとう、真名……。……アレンさんとリナリーさんも来てくれないかな？真名も頼りにはしてるけど、あのお二人もいてくれ

ると心強いんだが…」

少し頬を赤くする刹那。……むう。

「どうだろうな。今回の勉強会はうちのクラスが主体だし、学年が違えばアレンさんやリナリーさんと呼んでもあまり意味がないと思うけど。第一、アレンさんに宿題があるのかどうかも分からないし」

アレンさんは夏休みに入ってから麻帆良に来たんだし、リナリーさんについてはすでに宿題終わってそうだし。それに何より。

「うちのクラスがアレンさんを見れば騒ぎだして、勉強どころじゃ無くなるだろう。それだと本末転倒になってしまう」

「やはり難しいか……。なら仕方ないか……」

少し気落ちする刹那。気持ちとは分かんなくてもないけど。……個人的にはアレンさんをうちのクラスの連中に合わせたくないという気持ちもある。

「決まりだな。木乃香には私と刹那が参加する事を伝えておくよ。時間は朝の十時、集合場所は女子寮の玄関だ」

「ああ、分かった。ならお嬢様への連絡は任せた」

こうして私と刹那の勉強会参加が決定した。

明日菜 side

翌朝、私と木乃香は集合場所である寮の玄関に来ている。時間までもう少しあるけど、すでに来ている人もいた。案の定、バカレンジャーと言われている面々も揃っていた。

「いやはや、拙者一人ではほとほと困り果てていた故、本当に助かったでござるよ」

そう言って話しかけてくるのは、バカブルーこと長瀬楓。本人は否定しているけど、周りは彼女の事を忍者だと疑っている。

「ワタシはあまり勉強したくないアル。そんな事より、鍛錬しときたいアルヨ」

バカイエローの古菲は勉強よりも修行がしたいとのこと。なら何で参加したのかしら？

「いやー、私は大助かりかな。夏は部活で遊ぶ暇はあれど、勉強する暇はなかったからねー。亜子達に手伝ってもらってはいたけど、中々終わらなくて」

笑いながら言ってくるのはバカレンジャーの中でも二番目にバカと言われている、佐々木まき絵だ。……ちなみに一番は私。言っていて悲しくなってきた。

「何をバカな事を言ってるんですか。遊ぶ暇があるなら勉強するです」

「ゆ、ゆえも人の事言えないよお。終わってるの、読書感想文くらいだし…」

佐々木に辛口なコメントをするのは、バカレンジャーのリーダーを

務めるバカブラックこと綾瀬夕映と、そんな綾瀬に話しかけるのは、本屋の異名を持つくらいに本好きな宮崎のどかだ。

「結構集まってるわね。ねえ、木乃香？これで全員？」

「まだやえ。他にもぎょうさん来いはるはずや。……あ、ほら明日菜、噂をすればや」

そう言って木乃香が指を指す方を見ると、これまたたくさん集まってきた。

「やつほ、原稿上がったから何とか来れたよ。お陰で全然勉強進んでないよ」

二本のアホ毛を揺らしながら、眠そうな顔をして話してくるのは早乙女ハルナ、通称パール。何でもペンネームがパールだから、皆でパールと呼んでいる。

「あらあら、来て見て正解みたいね。教える側が不足してるんじゃないかと、心配してたけど当たりみたいね」

クラスの中でも面倒見が良いと言われている那波千鶴も、教える側として参加してくれるらしい。余談だけど、クラス一の巨乳でもある。

「ああ！ちづ姉にかえで姉がいる！かえで姉は分かるけど、何でちづ姉まで？」

「お、お姉ちゃん！？流石にかえで姉に失礼だよ！？ちづ姉は教える側だって言ってたじゃない！」

声はすれども姿が見えない。ただ単に背が小さいだけなのだけど。この見た目小学生の双子姉妹、ツインテールで活発的な僕っ娘が姉の鳴滝風香で、ダブルシニョンの髪型をしている、姉とは逆の性格で大人しいのが妹の鳴滝史伽だ。

「やあ、わざわざ誘ってくれてありがとう。今日はよろしく願いするよ」

「お、おはよう、ございます。今日はよろしく願います」

最後に来たのは予想外の二人組だった。一人はクラス一の長身で、肌は古菲と同じで褐色、スタイルも良い龍宮真名と、夏休みなのに制服姿で、黒髪をサイドテールにして束ねている桜咲利那だった。

「せっちゃん……。ほんまに来てくれたんやね…」

「あれ、木乃香？桜咲さんと知り合い？」

桜咲さんはあまり話した事もないし、確か中等部から同じクラスになったっただけで、あまりどういう人かは知らない。そんな桜咲さんと木乃香が知り合いだなんて初耳だ。

「うん、明日菜には言うてなかったけど、ウチ麻帆良に来る前は実家のある京都におったんよ。せっちゃんはその時に一緒に遊んだ友達なんや」

そう木乃香が教えてくれると、二人がこっちに、と言うか木乃香のどこまで来た。

「せっちゃん…」

「ほら、刹那。木乃香に言うんだろ？」

何やら桜咲さんが木乃香に用があるみたい。でも桜咲さんはどこかバツの悪い顔をしている。

「あ、あの、お、お嬢様、実はですね」

「…うん、どないしたん？せっちゃん」

「わ、私、まだ読書感想文が終わってなくて、それで良かったら、できればで良いんですが、題材の本をお嬢様を選んで頂きたくて、その、突然の事で申し訳ないのですが、…手伝って頂けないでしょうか？」

かなり緊張した様子の桜咲さん。てか、木乃香の事をお嬢様って呼んでたけど、何でだろう？

「せっちゃん！！」

「お、お嬢様！？」

涙目になりながら抱きついた木乃香。いきなり大声を出すもんだから、他の皆も一斉にこっちを見てきた。

「ごめんな、せっちゃん。あまりに嬉しゅうてついはいでまったわ。良えよ、一緒に選ぼうな」

「お嬢様……。ありがとうございます」

「ややわあ、お嬢様なんて。昔みたいにな、このちゃんって呼んでえなあ」

「し、しかしですね、お嬢様？それは昔の話であって、今は、その、……分かりました！分かりましたから泣かないでください！このちゃんって呼びますから！」

このちゃんって呼ばれないから泣きはじめた木乃香。泣いた木乃香を見て焦り出す桜咲さん。観念してこのちゃんって呼ぶと、すでに木乃香は笑顔になっていた。……嘘泣きか。

「えへへ、ようやく呼んでくれたなあ。ウチ嬉しいわあ」

「お、おじょう……このちゃん……」

お嬢様と言おうとすると、すぐに涙目になる木乃香。これには桜咲さんもお手上げで、結局このちゃんと呼んでしまう。

「ああ、仲睦まじいのは良いんだが、二人とも？いつまで抱きついているつもりだい？周りが大変なことになってるんだけど」

「良えやん、抱きついとるくらい。細かいことは気にしたらあかんえ？」

やれやれと首を振る龍宮さん。でも確かに周りはお祭り騒ぎだ。

「かなりのラブ臭キター！これでネームが一本書けそうだわ！」

「ふむ、中々美しい友情でござるな。ニンニン」

「あいやー、これが百合ってやつアルか。何か見てて恥ずかしいアルね……」

「あらあら、仲の良いこと。うふふっ」

「ありやーや、何か凄いいことになってるね、これは」

勝手に騒ぎ出す面々。木乃香は聞こえてないのか、今だに抱きついたらまだ。桜咲さんは、顔を赤くしている事から周りの声が聞こえているんだろう。それでも離れようとしないうあたり、満更でもないみたい。でも良かった。ケンカしていた訳じゃ無いみたいだけど、今ではお互いに笑って話せるようになって。

少女二人の笑い声。それは昔から叶えたかった、二人の細やかな願い。何時の間にか笑い合う事ができなくなってしまっていた二人が、今再び笑い合えるようになった。

乙女の受難（後書き）

今回はほとんどが明日菜の視点でした。……いや、かなりキャラの口調に苦戦しました。一話にこれだけのキャラを書いたのは初めてなので、四苦八苦しながらでしたのでもしかしたらおかしい点もあるかもしれませんが、皆様の深い心でどうかご勘弁を。

随時罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。一度だけじゃなく、何度も頂けるとかなりテンションが上がり、筆が進むかもしれません。どうか皆様、感想のほうよろしくお願いします。

ハーレムメンバーの募集は今回で最後です。今後は皆様から頂いた案を元に、構成させていただきます。

少女達の誘い（前書き）

キャラ全員話させるのは難しいですね。少し読みにくいかも知れませんが、楽しく読んでいただければ幸いです。

少女達の誘い

明日菜 side

木乃香と桜咲さんが仲直り？して、私達は今日の目的地である図書館島へと移動しという。道中木乃香は、桜咲さんに引っ付いたまま歩いている。桜咲さんも満更ではないって顔してるし、周りも茶化す事なく二人を見ている。

皆でこの夏休み中であつた出来事を話しながら歩いている。その中でも噂好きのパルが私達にある噂を話してきた。

「ねえねえ知ってる？私も朝倉から聞いた話なんだけどさ、何でも一風変わった少年が麻帆良をうろついているらしいよ？」

パパラッチ朝倉が情報源の噂ねえ。また大袈裟に広めてるだけなんじゃない？

「一風変わったとは、どういう事でござるか？」

「ああ、それ私も部活で聞いた事ある。見たのは先輩だったんだけど、何でも白髪頭でこの暑いのに長袖長ズボンを着ているとか」

長瀬さんの質問に答えたのはまき絵だった。確かにちょっと変わってるかもね。

「そうそう、その少年！しかも服装は必ずワイシャツに黒のスラックスでのビジネススタイル。しかもベストまで！明らかに今の季節

「に着る服装じゃないでしょ！」

「そんなのは個人の自由です。他人にとにかく言われる筋合いはないと思うんですけど」

熱く語るパルにツッコミを入れる夕映ちゃん。確かに服装は個人の自由だしね。そう言われれば特に変わって訳じゃないみたいね。

「と言うか、それってアレムグッ……」

何かを言おうとした古ちゃんだけど、龍宮さんが口を抑えてしまった。

「……くーちゃん今何て言おうとしたの？ たつみーも何で邪魔するのかな？」

「たつみー言うな。古は勘違いしていたようだ。ただの人違いだよ、なあ古？」

口を塞がれてる為、頷いて答える古ちゃん。若干青ざめてないかな？

「……怪しい」

「怪しいでござるな」

「「たつみー怪しいー」」

「あらあら」

「くだらないです」

「ゆ、ゆえ」

「うむむ、これは怪しいね」

「せっちゃんどう思う？」

「あ、あはは」

やはりあの行動は怪しすぎたようだ。やはり何か隠しているのかな？

「気にする事はないさ。ほら、もう少しで図書館島だ。そろそろ昼近くになりそうだし、先に昼食にでもしないかい？」

明らかに話を変えてきたけど、もうそんな時間になるのか。それなら先にお昼ご飯にした方が良いかな？

「ん、どうしようか木乃香？先に食べちゃう？」

「せやなあ、なんやかんやで寮を出たのも予定より少し遅れてもうたしな、先に食べてまおうか」

他の皆も賛成との事なので、近くにあるファミレスで早めのお昼ご飯となった。

店内はまだ昼時じゃないからか、客も少ない。ふとテーブルの一角を見ると見知った顔ぶれがいた。

「ああー！亜子にゆーなにアキラだー！それと……誰の彼氏？」

「もちろん、アキラの彼氏に決まってんじゃない!」

「ちょ、ちょっとゆーな! いきなり何を言い出すの!? アレンさんに失礼だよ!？」

かなりのテンションで騒ぎ立てるのは、明石裕奈。真っ赤な顔でゆーなに突っかかるのは水泳部のエース、大河内アキラ。そんな二人とアレンさんと呼ばれていた人を交互に見てあたふたしているのは、和泉亜子だ。

「あれあれ、アキラったら真っ赤な顔してどうしたのかにゃ? アレンさんじゃ、不満なのかな?」

「おお、もしかして照れてるの?」

ゆーなどまき絵にからかわれて小さくなるアキラ。そんなやりとりを苦笑いしながら見ているアレンさん。

「って言うか、もしかして噂の少年君じゃない!？」

「この御仁がでござるか?」

「ホントに白髪頭なんだ。お爺ちゃんみたいだね」

「お、お姉ちゃん。あまり言わない方が良いよ?」

「あらあら、外国の方かしら? あまり見ない瞳の色だけど?」

「アレンさん……。何をしていますか……。」

「やっぱり、アレンさんが噂の少年だたアルね。真名はどうして隠しておきたかったアルか？」

「ホントに暑そうな格好してはるんやなく。…せっちゃん？どないしたん？」

「…あっ！？い、いえ！何でもありません！」

「桜咲さん、それは何でもないような反応じゃないわよ？」

「全く、騒がしい面々です。どうしたんですか、のどか？顔が赤いですよ？」

「ふえっ！？な、何でもないよ！？顔が赤いのは暑かったからじゃないかな！？」

最早収集がつかなくなってきた。どうしようか？

「えっと、まず落ち着きませんか？流石にお店の人に迷惑ですし」

「そ、そうだよ、ひとまず皆席に座ったら？立ちっぱなしも疲れるだろうし」

アレンさんがやんわりと注意し、アキラが続いて席に座るよう言うてくる。一同はゆるやかな達の隣のテーブルに座る。

「…何でたつみーはアレンさんの隣に座るのかにゃ？」

「向こうは少し窮屈だね。此方の方が空いてるし、アレンさんの隣はただの偶然さ」

「お、おい真名！ずるいぞ一人だけ！わ、私だって……」

確かにこの人数で一つのテーブルは窮屈かもしれない。でもゆるやかな言う通り、どうしてアレンさんの隣に座ったんだろ？他にも空いてるのに。桜咲さんも、最後の方が聞き取れなかったけど、何を言いたかったんだろ？

「ならせっちゃん。ウチらも移動しよか？ちょうど真名の反対側が空いとることやし」

「こ、このちゃん！？べ、別に私は無理して隣に座りたい訳じゃないので！？ただ少し、真名が羨ましいなって思ったりしただけで……」

「ふうーん、せっちゃんがそう言うなら仕方ないわなあ。ならウチが隣に行こうかなあ」

「ええっ！！！？」

何とまあ、あの木乃香がニヤニヤしながら桜咲さんをおちよくってるなんて。…桜咲さんも、ちょっとバレバレの反応だけど。

「ほな、隣失礼しますえ。ウチの名前は近衛木乃香言います。さっきは騒がしゅうして、ほんま堪忍なあ？皆アレンさんの事が気にのうて気にのうて仕方ないんやわあ」

「いえ、僕は気にしてないので。自己紹介が遅れました、僕の名前はアレン・ウォーカーです。隣にいる真名と木乃香さんの隣にいる刹那とは友人関係です。それから、そこにいる古菲とは超包子で何回か会ったりもしています」

「……せっちゃんの友達してくれとるん？」

「ええ、刹那にはこの学園に来た時にお世話になって。真名もその時に知り合って、それからの付き合いです」

へえ、そうだったんだ。桜咲さんと龍宮さん、結構面倒見が良いんだ。

「木乃香ばつか話しててずるい！ 私達だって話したいのに！」

「パル、あんたちよっとうるさいわよ？ 順番くらい待ちなさいよ」

パルが痺れを切らして文句を言うので、少し注意する。

「何より、アスナったら良い子ちゃん面しちゃってさ」

「まあまあ、落ち着いてください。…それでは、皆さんのお名前を教えてくださいますか？」

「はあい！なら私からね。私は早乙女ハルナ、皆からはパルって呼ばれてるから、アレンさんもそう呼んで構わないよ」

「なら次は私、佐々木まき絵だよ。特技は小さな頃からやってる、新体操。特にリボンの扱いは結構上手いんだよ」

「拙者、長瀬楓と申すでござる。よろしく願いますでござるよ」

「かえで姉の次は僕達だよ。僕は鳴滝風香でこっちが妹の史伽。見てわかるように双子だよ。背が低いけど、こう見えてかえで姉達と

「同年だからね」

「えっと、よろしく願いします」

「初めまして、那波千鶴です。さっきは皆騒いでたけど、根は良い子達ばかりだから許してあげてね」

「でも結局、騒がしいのは事実なのです。私は綾瀬夕映です。一応よろしくするです」

「は、は、初めまして、み、宮崎、のどかです。よろしく、願いします…」

「ごめんね、アレンさん。本屋ちゃん、あまり男の人と面と向かって話すのが苦手なの。最後は私、神楽坂明日菜です。よろしくね」

「私達はさっきしたから大丈夫だね。改めてよろしくね、アレンさん」

「はい、僕もまだ麻帆良に来たばかりなので、此方こそよろしくお願いします」

とりあえず、全員の自己紹介が終わった所でそろそろ注文することにした。…何食べようかな。

「アレンさん……。ホントに、それ全部食べれるの？」

「少し、足りないくらいですかね？」

「そんだけあるのに!？」

アキラとゆうーなが驚くのも無理はない。他の皆も一部を除いては驚きのあまり固まっている。アレンさんの前には、私達全員で食べるくらいの量の料理が並んでいる。

「それじゃあ、いただきます」

「ごちそうさまでした」

「凄い……」

「手品みたいやわあ」

「見てるこっちが胸焼けしそう……」

亜子と木乃香にパルが、アレンさんの前に積み重なった食器の山を見て呆然と呟いた。

「あれだけ食べたら、確実に太るよね……」

まき絵の言葉に頷く私達。

「あ、僕いくら食べても太らないんですよ」

瞬間、黒いオーラが周りを覆う。

「太らない？何で太らないのかな？かな？」

「流石に羨ましすぎるでしょ」

「あらあらまあまあ」

「大丈夫、まだ大丈夫……」

ゆーな、パル、千鶴、亜子が黒いオーラを纏いながら呟いている。
正直、かなり怖い。

「それで、どうしてアレンさんは彼女達と一緒にいたんだい？まさかナンパでもしたのかな？」

食事を終えて一休みしていると、龍宮さんがアレンさんに話を聞こうとしていた。

「実はですね、図書館島に行こうとしてたんです。でも、……また迷子になってしまって、そんな時にアキラ達に会ったんです」

「ウチらもビックリやったわ。いきなり外人さんに声かけられるんやもん」

「そうそう、私達も最初はナンパかと思ったけど、普通に道聞いただけだったし。本人も迷子なんです、って言ってたから」

「だから道教えるだけじゃちょっと不安だったから、私達も着いて来たって訳。それで、アレンさんがお礼にとってご飯をごちそうしてくれるって言うから、このファミレスに」

なるほど、確かにこの麻帆良は広いから迷子になってもおかしくはないけど…。

「え？アレンさん、麻帆良の生徒じゃないの？」

同じく疑問に思ったパルがアレンさんに聞いた。

「僕、この夏休みの間に引っ越してきたんです。なのでまだ、道がよく分からなくて。普段ならリナリーや真名が案内してくれるんですけど、リナリーは私用でいなくて、真名にも電話したんですけど出なくて、だから一人で歩いて探してたんですけど……」

「迷子になった、と」

「はい…」

「ん、本当だ。着信がきてた」

何とも運が良いのか悪いのか。

「なら私達と一緒に行きませんか？私達も勉強しに図書館島に行くんですけど」

桜咲さんが誘ってみる。別に私達も構わないから誰も反対はしない。

「亜子達はどうするの？」

「私達も元々はまき絵達の手伝いに行こうとしてたし、一緒しても良いかな？」

「ウチらは構わへんよ？ならアレンさんも一緒に行こか。折角、せっちゃんも勇気だして誘ったんやし」

「このちゃん!？」

亜子達も行くとの事なので、皆で行く事になった。

「なら、折角なので一緒にさせてもらいますね」

「なら早速行こうか。そろそろ他の客も来はじめたみたいだし」

「そうでござるな。しからば行くでござるよ」

「勉強面倒アルよ。修行しときたいアル」

「そんな事言わないの。ほら古ちゃん、行きましょ？」

「待ってよ、ちづ姉」

「早いよ、お姉ちゃん」

「ほら、せっちゃんも行くえ？」

「あつ、今行きます」

「ふう、また大勢になったです」

「ゆ、ゆえ、そんな事言わないの」

「じゃあ、お会計して行きましょ」

こうして、私達はアレンさん達と図書館島に行く事になった。

少女達の誘い（後書き）

はい、迷子のアレン＋aが合流しました。本来ならリナリーもセツトにしようと思いましたが、今回リナリーは出番なしです。今回は原作組の出番です。でもやっぱり出しすぎたかな？キャラの口調も怪しいし、次回はもう少し頑張ります。

ハーレムのご応募ありがとうございます。多々ある意見の中から参考にさせていただきますので、もしかしたらご希望にそぐわないかもしれませんが、ご了承ください。

随時罵詈雑言以外の感想をお待ちしています。感想があると結構励みになったりしますので、良かったら感想の程よろしくお願いします。

少女達の気持ち（前書き）

はい、今回で図書館島の話は終わりです。結構ごちゃごちゃとして読みにくいかと思いますが、またご都合主義と思われる部分もあるかもしれませんが、大目に見てもらえたら幸いです。

少女達の気持ち

明日菜 side

アレンさん達を交えて、私達は図書館島に向かう。道中、やはり話題はアレンさんのことについて皆が質問攻めをしている。アレンさんも、嫌な顔せず答えてくれる。

「へえ、アレンさんって麻帆良に来る前は世界中を旅してたんだ。何か懂れるなあ」

「とは言っても、少し前の事ですけどね。今はまた別の事をしていました」

パルの、麻帆良に来る前は何をしていたのかって質問に答えてくれるアレンさん。世界中を旅してたのか、私達とあまり歳が変わらないのにそんな経験してるだなんて。

「少し前って何歳くらいの頃なんですか？」

千鶴が気になったのかそんな事を聞いていた。

「えっと、…五歳くらいの時でしたね。それから三年程、師匠と一緒に世界中を旅していました」

「五歳！？そんなに小さな頃からですか！？」

あまりの驚きに、つい大声で反応してしまった。…恥ずかしい。

「それも驚きでござるが、師匠とは一体何でござるかな？」

「そうアル。ワタシも気になるアルヨ」

楓と古ちゃんはその気がなるらしい。

「師匠と言うのは、当時僕を拾ってくれた人なんです。師匠って呼んでるのは、僕が弟子入りをしたからです。師匠は幼い僕にいろんな事を教えてくださったので」

さらっと爆弾発言された。

「あんなあアレンさん。今ちいっと聞き捨てならん事聞いたんやけど、…もう少し聞いても良えですか？」

木乃香が恐る恐る聞いてみる。隣にいる桜咲さんも真剣な表情で聞いている。他の皆も同じ表情だ。

「僕、生まれた時から孤児だったんです。それで五歳になるまで、いろんな孤児院を転々としていました。そしてあの時、僕は師匠に拾われたんです。その後は先程話した通りです」

「…孤児院を転々って何ですか？ひょっとして、その…眼の傷が原因ですか？」

アレンさんの生い立ちを聞いた私達。そんな中、亜子がアレンさんの眼の傷が原因で孤児院を転々としていたんじゃないかと思っている。

「ああ、これが原因じゃ無いんです。この傷は師匠と会うほんの少

し前にできた傷なんです」

「なら、…………何が原因なんですか？」

「亜子、それ以上はマズイよ」

流石にこれ以上聞くのはマズイと思ったのか、アキラが亜子を止める。

「でも、酷いやん……。何で孤児院を転々としんならんのや……。まだ子供やっていうのに……」

亜子にしては珍しく熱くなっている。亜子自身、背中に傷があつてそれが今でもコンプレックスになつてゐる。だから亜子は、あまり目立たないよう心掛けてゐる。

「僕自身、今ではもう氣にしてないので良いんですけどね。…原因は、この左腕なんです」

あっさりと教えてくれたアレクサンダーさん。周りもまさか教えてくれるとは思つておらず、拍子抜けした感じだ。

「左腕ですか？ ……特に変わった感じは……！？」

「えっ？」

「真っ赤……」

「…この手の甲に埋められてるのって、…十字架？」

アレンさんが手袋を外して、袖を肩まで捲って見せてくれた左腕。そこにあっただのは肌色をした腕ではなく、真っ赤な血に染まったような色をしている腕だった。本屋ちゃんや鳴滝姉妹には刺激が強かったのか、少し顔が青ざめていた。龍宮さんや桜咲さんはどこか悲痛の表情をしている。

「すいません、あまり見せるような物じゃありませんでしたね…」

そう言って袖を直そうとするアレンさん。しかし、その前に木乃香がアレンさんの左腕を触り始めた。

「って、何してるのよ木乃香!？」

「ん? 見て分かるやろ? 触つとるんやえ?」

「いや、そりゃ分かるけどさ。私が聞きたいのは、何でいきなり触ったりしてるのかって事よ!」

アレンさんも苦笑いしてるじゃない!

「……温かいなあ」

「…えっ?」

「なんや、見た目が全部やないで? アレンさんの左腕、しっかりと温かいで? 皆も触ってみい?」

そう言って触り続ける木乃香。それに続いて他の皆も触り始める。

「少々筋張ってござるな。不思議な手触りでござるなあ」

「ちょっとゴツゴツしてるけど、ただそれだけみたいね。後は普通の腕となんら変わらないわね」

「あいやー、結構たくましい腕してるアルネ。もしかしてアレンさん、かなりの強者アルカ!? なら、ワタシと勝負するアルヨ!」

「こら、古やめないか。流石にそれは見過ごせないな」

「えっと、失礼します…。本当だ。温かいですね、アレンさんの腕…」

「よくよく見ればどうって事ないわね。何でこの程度で、怖がるのかしら?」

黙々と触る人もいれば、様々な感想を言う人もいる。でも、悪く言う人は誰もいない。

「えっと…」

流石に呆然としてるアレンさん。そんなアレンさんに私達は。

「ありがとうな、ウチらに話してくれて」

「そうね、話してもらえて嬉しいわ」

「それに私達は、これくらいじゃ驚きはしてもきみ悪がったりしないし」

「そうそう! 私がかっこ良く見えるよ!」

「そういう事！確かにアレンさんはもう気にしてないって言ったけど、少しだけ苦しそうな顔してた。やっぱりどこか不安だったんだと思うの。それでもアレンさんは見せてくれた。それが私達は嬉しかった！だから、ありがとう、アレンさん！」

ありがとう！皆で声を合わせて言う。そこには笑顔でお礼を言う私達。そして、笑顔で微笑み返してくれるアレンさんの顔があった。

「ここが図書館島ですか……。凄く、大きいです…」

あれからかなり打ち解ける事ができた私達。ようやく図書館島に着いて、図書館島を初めて見るアレンさんが驚きを見せていた。

「それはそうなのです。この図書館島は、学園が創立された時に建設された世界最大規模を誇る巨大図書館なのです」

「へえ、詳しいんですね」

夕映ちゃんがアレンさんに図書館島の説明をしている。因みに他の面子は各々自由行動となった。……私もそろそろ本探さなきゃ。

夕映side

アスナさんにアレンさんの事を頼まれたので、少々この図書館島の

事を教えることにします。

「と言うわけで、ここからは私とのどこでお送りしたいと思います」

「ゆえ、それより勉強しなきゃ…」

「却下です。そんな面倒な事をするくらいなら、アレンさんに図書館島を案内した方が万倍マシです」

「それはありがたいんですが、本当に大丈夫ですか？」

ほら、アレンさんに余計な気を使わせてしまったです。

「大丈夫です。それでは早速行きましょう。ほら、のどこも行きますよ」

「ま、待ってよ」

「今日は残念ながらあまり時間がないので、この図書館島の構造をざっとお教えします。この図書館島は地上部分にある本は誰でも借りる事ができる本ばかりです。まあそれでもかなりの量がありますけど」

「えっと、それでここでは昔戦争から本を守るため、世界各地から様々な貴重書が集められました。けど、本が増えることにより地下に新しく保管場所を造り続けていき、今ではどのくらいの規模になってるかは判明できてないんです」

「そこでこの図書館島を調査する為に発足されたのが、私やのどかが所属している図書館探検部なのです！因みに中・高・大での合同サークルとなってるです。なので、自ずと調査できる範囲は限られてくるのです」

「私達中等部の生徒は、地下三階までの調査しか許されてません。ですが、この地下三階を調べるのもまたかなり大変なんです。本棚のあちこちには盗難防止用の罠があって、おちおち歩く事もままありません」

「ですので、調査する際にはそれ相応の装備が必要となります。下手に丸腰で足を踏み入れようものなら、怪我ではすまないかもです。なので、くれぐれも一人で行こうなんて考えないでくださいです」

「は、はあ。分かりました。気をつけます」

分かっていただけたなら良かったです。何でもアレンさんは、迷子のプロらしいですから下手に一人にしたら地下まで行きそうですから。きちんと釘を刺しておかないと。

「因みに、アレンさんはどんな本が目的で今日ここに来たんですか？」

「あつ、実は暇な時に読む本を探しに。ジャンルは特に選ばないんですが、何かオススメはありますか？」

「そうですね、私としてはファンタジー物をオススメするです。のどかは？」

「んっと、私もゆえと同じかな。魔法とかそういうのに憧れてるか

ら」

魔法に憧れる。私もそうだ。そういった非日常的な事に憧れを持っている。

「魔法、ですか？なるほど、夢があって良いですね」

「アレンさんはどう思うですか？魔法を使いたいって思ったりしますか？」

「僕ですか？そうですね……、何とも言えません…」

「それはどういう意味です？」

「確かに使えたら便利だと思います。でも反面、魔法は危険なモノです。いえ、魔法が危ないんじゃない、魔法を使う人次第で変わってきます。人の為に使う人もいれば、悪用する人もいるわけです。必ずしも、皆が皆善意の為に使う訳ではないんですから」

「……なるほど、それは確かにそうですね。魔法は使う人次第、ですか。……物語でもそうでしたね。悪い魔法使いを倒す為に戦う正義の魔法使い。結局、人を傷つける訳ですね」

「そうだね、そう考えるとちょっと怖いかも…」

「まあ、あくまで僕の考えですので。すみません、現実的な考えで…」

「そんな事はないです。そういう意見も大事なんですから。それに所詮作り話ですから、そこまで真剣になることないですよ。ただあ

くまでも、憧れですのぞ」

「そ、そうですね。謝ることないです」

のどかもフォローする。：と言うか、のどかが普通に男の人と話してるです…。

「そうですね。：ありがとうございます、夕映、のどか」

そう言って笑うアレンさん。のどかは顔を真っ赤にしてあたふたしている。かく言う私もちよつと危ないところだったです…。

「あ、おつたえ。アレンさん」

おや、あれは？

「木乃香さんと桜咲さんですね」

「探したえ、なんや夕映とまどかと一緒やったんやな」

「ええ、二人に図書館島の事を色々教えてもらいました。あとオススめの本も少し」

「せやったんやあ、ウチも図書館探検部やでウチも頼ってえなあ。寂しいやんかあ」

「そうだったんですか。ならその時はお願いしますね」

木乃香さんと話し込むアレンさん。木乃香さんも何か用があつて来たんじゃないんでしょうか？

「それで、木乃香さん。アレンさんに何か用でもあったんじゃないですか？」

「ああ、そうやったわあ。夕映にのどか、ちょっとアレンさん借りても良えかな？」

「私は良いですけど、のどかはどうです？」

「わ、私も良いよ」

なからはアレンさんに任せましょう。

「なら私達はこれで失礼するです。ではアレンさん、また機会があればお話ししましょう」

「それじゃ、アレンさん。またです」

「二人とも、ありがとうございました」

軽く手を振ってアレンさん達と別れる。…中々楽しめたですね。

木乃香 side

夕映とのどかが手を振って離れて行きなつた。なんや、あの二人ともう仲良うなるやなんてアレンさんも隅におけんなあ。

「それで、木乃香に刹那。何か僕に用との事でしたが、何でしょう

か？」

アレンさんが聞いてくるけど。

「その前になあ、ウチらの方が年下なんやし、敬語なんていらへんよ？」

「もう癖になってしまつてて、こればかりは直せないんですよ」

「癖、ですか…」

アレンさんらしいって言うか、難儀な性格やなあ。

「実はな、お礼を言いたくて探してたんよ」

「お礼、ですか？…何かしましたっけ？」

ほんまに分からんのか、考える素振りを見せるアレンさん。

「あるで。ウチとせっちゃんの仲を取り繕うてくれたやろ？それのお礼や」

「本当にありがとうございます。お陰様で、またこのちゃんとうして話す事が出来る様になりました。これもアレンさん、そしてリナリーさんと真名のお陰です。…真名にも先程同じ様にお礼を言ったんですけど、礼を言われるような事はしていないよって。…真名らしいですよね」

「アレンさん達がせっちゃんを支えてくれたお陰で、せっちゃんも自分に自信を持てるようになったみたいやし、中でも一番はアレン

さんの言葉が嬉しかった言うてたしな」

「こっ、このちゃん!？」

言わんといて言われとったけど、つい言うてもうた。でもほんまにウチも嬉しいわあ。こうやって、せっちゃんの事を見といてくれる人がおってくれて。

「いえ、僕はただ刹那は一人じゃないって事を教えたかっただけです。そこから後は全て、刹那の思いですから僕は何もしていませんよ」

謙虚すぎやなあ、ほんまに。

「あかんえ、アレンさん? そういう時は、どういたしましてっていうのが男ってもんや。そんなに腰が低いとせっちゃんを任せる事ができひんやろ?」

「ちよっとこのちゃん!?!?何を言うてるんや!?!?どうしてそう言う話になるん!?!?」

真っ赤な顔したせっちゃんが素に戻りながら話してくる。バレバレの反応やなあ。

「ダメやで、せっちゃん?アレンさんはお人好しすぎるんやで、気持ちはストレートに伝えんと、泣き寝入りは嫌やろ?」

アレンさん、誰にでも優しくそうやしなあ。優しくされると勘違いしそうになるわあ。

「まあまあ、木乃香と刹那の気持ちは分かりました。なら刹那？これからも木乃香と仲良くしてください。何か困ったら、いつでも力になりますからね」

そう言って笑うアレンさん。……ほんまずつこいわあ。ウチまで顔が赤うなってまう。

「はい、その時はよろしくお願いします」

頭を下げるせつちゃん。何か仲間外れみたいやなあ。

「そうだ、二人にプレゼントしたい物があるんです」

そう言ってポケットに手を入れるアレンさん。せつちゃんも突然の事で首を傾げとる。

「はい、お揃いのヘアピンです。僕が作った物なんですけど、いつか二人がまた仲良くなる日が来た時に渡そうと思って作りました。どうぞ、受け取ってください」

ウチとせつちゃんの為に作ってくれはったやなんて。…嬉しすぎるわあ。せつちゃんも涙目やし、ウチもちよつと涙目なのが分かる。早速二人で着けて見ることにした。

「…どう、ですか？」

「似合うとるかなあ？」

お揃いのヘアピンを前髪に着ける。

「とても良く似合ってますよ。可愛らしいです」

「かつ、可愛い!？」

「…照れてまうなあ」

ちよつとストレートすぎる言葉に恥ずかしがるウチとせっちゃん。

「ずっと大事にします。…本当に、ありがとうございます」

「ウチも後生大事にさせてもらうな。ほんまにありがとう」

頭を下げるウチとせっちゃん。それを笑顔で受け止めてくれるアレ
ンさん。

「おや? 二人にはあげて私にはくれないのかな?」

突然の声に驚くウチとせっちゃんとアレンさん。声の主は真名やつ
た。

「えっ? いや、これはですね…。…きちんとありますよ? 真名の分
も…」

「ほう、それは楽しみだな。一体どんなのをくれるのか、楽しみに
しているよ」

あたふたするアレンさんを見て、ウチとせっちゃんは思わず笑うて
まう。真名もニヤニヤしながらアレンさんを見ている。アレンさん
が来てから良えことづくしやなあ。せっちゃんとまたこうして笑う
事ができとるんやし。

そんなこんなしとったら、他の皆も集まってきた。もうた。どうやら宿題も終わったようやし、皆ウチとせっちゃんの髪飾りを羨ましがってアレンさんにねだったりと、最後まで賑やかな日やったわあ。

ーこんな日がずっと続きますようにー

少女達の気持ち（後書き）

ん、どうしてこうなった？何故夕映とまどかにフラグっぽいものが？本当は別のキャラにしたかったのに……。まあいっか！と言う訳でアレンと原作キャラ達の出会いでした。あまり絡んでないじゃないかって思うかもしれませんが、まだこれからあるので暖かく見守ってください。あと2〜3話くらい書いたら原作に突入する予定です。原作に入ったら、アレンの過去もいれていく予定です。楽しみにしていただけると嬉しいです。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

新学期最初の波乱(前書き)

波乱と言うか、厄介事と言うか、面倒事と言うか。そんな新学期の朝です。

新学期最初の波乱

アレン side

九月一日、麻帆良学園の夏休みが終わり今日から新学期が始まる。内心、上手くやっていけるか不安だけどワクワクしてたりもする。

「よしっ、忘れ物は無いな。少し早いけど、転校初日だし早めに向かった方が良いかな？」

「そうだね、先に職員室に行ったりしなきゃならないしその方が良いかもね」

リナリーもどうやら早めに向かった方が良いとの事なので、そろそろ向かう事にする。

「それにしても、毎朝朝食を作ってくれてありがとうございます。しかも、片付けまでしてもらって…」

「私が好きでやってる事だし、朝食も一人分も二人分もさして変わらないから気にしないで。それに片付けもすぐに終わるからどうって事ないよ」

いやはや、本当に良く出来た子だ。

「それでも、ありがとうございます。毎朝美味しい朝食を作ってくださって」

「ふふっ、どういたしまして。美味しいって言ってもらえるだけで嬉しいよ」

そう言いながら、エプロンを外し登校準備をすませるリナリー。

「じゃあ、行きましようか」

「うん、行こっか」

学園生活初日、どんな日になるのかな？

「ふう、早めの電車だったから割と空いてたな。次の電車が混む時間帯なのかな？」

あまり他の生徒も乗り合わせておらず、窮屈な思いをせずにすんだ。

「それにしても、やっぱり目立つかな？この格好？」

ふと目に入った鏡を見て、今の自分の服装を見直す。

今の服装は、学生服を着ているのではなく白の学校指定のワイシャツに、黒のズボンと何となく私服に近い格好だ。因みに長袖で白の手袋もはめている。他の人から見たら、かなり浮いているように見えるだろう。

「でもなあ……、学生服が似合わなかったんだししょうが無いよね……」

これがまた全然似合わなく、その場に居合わせてたりナリーと真名に笑われた。それくらい似合わない格好をするくらいなら、少し浮いても良いからと言う考えから今の格好となった。

「周りは学生服ばかりだし、……やっぱり不安だなあ」

「そうでしょうか？特に問題はないと思いますけど？」

「うわっ!？」

突然後ろから声をかけられてビックリしてしまった。こんなに近づくられるまで気づかなかったなんて……。それだけ考えこんでたのかな？

「ああ、これはすいません。何やら服装がどうのこうのと言ったので、つい。…先程も言いましたが、特に変でもなく自然な格好だと思えますよ？学校に行けば、他にも似たような格好をした人もいますし目立つ事もあまりないでしょう」

シスターの服を着た褐色の女性がそう話しかけてきた。

「はあ、そうなんですか…。それで、どちら様でしょうか？僕はアレン・ウォーカーと言います」

「これはご丁寧に。私はシャークティと言います。生徒達からはシスターシャークティと呼ばれています」

目の前の女性、シスターシャークティが頭を下げて挨拶してきた。麻帆良にも教会ってあるんだ。

「シスター、ですか。まだお若いのにご立派ですね」

「若干十五歳にして、白の教会の元帥に推薦された貴方に言われると少し気恥ずかしいですね…」

頬を少し赤く染めて言うシスターシャーケティ。と言うかこの人…。

「…僕の事、知ってたんですね？」

「ええ、お会いするのは初めてですが容姿は以前学園長の方から…歩きながら話しましょうか。折角早く来たのに、このままでは遅れてしまいますし」

確かにこのままでは、他の生徒達と同じ登校時間になってしまう。

「そうですね。…と言うより僕今から学校なんですけど？着いて来て大丈夫ですか？」

「すでに教会の掃除なども終わってるので、今の時間帯は暇なんです。それで暇潰しに歩いていたら貴方を見つけたんですよ」

歩きながら話す僕とシスターシャーケティ。まあ教会にずっといても、夏休みならいざ知らず今日から新学期のため生徒が来る事はま
ずないから、確かに暇そうだ。

「そうでしたか。なら、本格的な活動は放課後からですか？」

「大体はそうですね。とは言っても、シスターも私と見習いを含めて人数は少なく、自然と活動も小規模になってしまっ
うんですけどね」

「人数が少ない、ですか。ここには結構な数の生徒がいるのにですか？」

「お恥ずかしながら、あまり皆さん興味がないらしくて…。それで今では人数が少なくなり、教会自体も規模が小さくなり影が薄い状況なんです」

なるほど。元々教会に属する人は、何か宗教や神を崇拝している人達くらいしかない。ここは学校だから、あまりそういった宗教やら崇拜なんかが広まるとは思えない。

「…そうでしたか。…あの、僕で良ければ何かお手伝いしましょうか？」

属する教会が違って、やはり廃れているのを見過ごす事はできない。…と言うか凄い期待の籠った目で此方を見ていたから、つい答えてしまった。

「本当ですか！？あ、あの白の教会の貴方が！？えっ！？本当に良いんですか！？」

もの凄い驚きようだ。まさか手伝うだけでこんなに驚かれるなんて…。

「あ、あの、少し大袈裟じゃないですか？何もそこまで驚かなくて。僕自身、どのくらい役に立つかわかりませんし」

「何を言うんですか！？貴方はあの白の教会の人間なんですよ！？しかも若いながらも、元帥に認められる程の人が手伝ってくれる！一緒に仕事を出来るだけでも名誉な事なのに、わざわざ自分から手

伝うだなんて殊勝な心掛け！是非、貴方が体験してきた事を私の弟子である見習いシスター達に聞かせてやってはくれませんか！？」

「え、ええ。それは構いませんが……。僕の話なんかで、本当に大丈夫でしょうか？」

一応、話せる体験談をするつもりだけど、聞いてもらえるのかな？

「貴方は本当に、何と素晴らしい少年なんでしょう。貴方くらいの歳で、しかも立場的には将来も約束されてるも当然なのに慢心しておらず、それどころか相手を思いやるその心意気。元帥に認められる訳ですね。……ウチの見習い達もこのくらい出来たら良かったのに……」

「あの、その見習いシスター達も一生懸命だと思います。……僕はただ長く教会にいただけで、当たり前前的事をしているだけです。見習いシスター達は少なからず、努力をしているはずです。それを僕と比べて、あたかも努力不足みたいに言うのは彼女達の努力を否定していると同じです。なので僕と比べず、しっかりと彼女達を見てあげてください。師である貴方が見てあげなくてどうするんですか？」

少しカチンときた。僕と比べる。これはあまりにも無意味だ。何故比べる必要があるのだろうか。比べられた方に見れば、裏切られたも同然だ。今までの自分達の努力を否定されたのだから。それでは彼女達が報われない。しっかりと、彼女達本人を見てあげないと。努力している彼女達を。

「……すみません。確かにその通りです。今の私は、あの子達を否定してしまいましたね……。数少ない私の弟子なのに、私が彼女達を見

てあげないといけないのに……」

「いえ、此方こそ少しでしゃばってしまいすみませんでした」

やはり少し言い過ぎた感がある。頭を下げて謝罪する。

「そんなことはありません！貴方が言ってくれなければ、私は自分の間違いに気づく事なくあの子達を叱っていたでしょう。……本当にありがとうございます。私もまだまだ聖職者としては未熟ですね」

自分の過ちに気づいて反省するシスターシャークティ。何だか説教してしまったみたいだ。

「……それでは今日の放課後、教会の方にお邪魔させていただきますね？」

そろそろ学校が近づいてきた為、話を切り上げる。

「分かりました。朝の忙しい時間に話に付き合ってもらったばかりか、いろいろと教えてくださりありがとうございます。……それでは放課後にまた」

そう言って頭を下げて離れていくシスターシャークティ。周りの生徒は幸いにも少ない為、あまり注目もされていない。

……こんな調子で大丈夫かな？

新学期最初の波乱（後書き）

……ちょっと強引でご都合すぎたかな？という訳でシスターシャー
クティでした。：口調が大変だね。どなたかアドバイスの程を：。
口調に自信がありません：。次は一気に放課後です。授業風景はカ
ットします。特に書くことありませんので。……教会の場所って本
編にありましたっけ？知ってる方がいましたらぜひ教えてください。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

もう一つの波乱（前書き）

すみません、放課後に行く前に原作キャラ達の方を書きました。ちよつと短めで無理矢理すぎかもしれませんが、どうしても書きたかったもんで…。

もう一つの波乱

刹那 side

長い夏休みも昨日で終わり、先程始業式も終わり今は教室でタカミチ先生の話の最中だ。周りはこの夏休みでの話でかなり盛り上がっている為、中々話も進まない。タカミチ先生自身も、あまりうるさく注意する人じゃない為なし崩し的にこうなってしまう。

「はいはい、そろそろ良いかな？まだ連絡事項が残ってるから、手短にすませたいんだけど？君達も早く終わらせたいだろ？」

手を叩きながら呼びかけるタカミチ先生。まだ多少ざわついてはいるが、一応静かにはなった。

「さて、それじゃあ連絡事項なんだけど……。その前に美空君、どうしたんだい？項垂れたりして。夏休み気分がまだ抜けないのかな？」

そう注意を受けた生徒は、春日美空だった。学校内では制服を着ているが、登下校時は修道服を着用している。確か、シスターシャークティの教えを受けていた筈だ。：あまり詳しくは知らないが。何せ本人が目立たないよう行動してるため、彼女の事を知っているのは極一部だ。たまに鳴滝姉妹とろくでもないことをしているが…。

「ああ、すいません。別に話が怠いとかそういうんじゃないんで…」

「珍しいね、君にしては齒切れが悪いじゃないか」

春日はマイペースな性格で、かなりの面倒臭がりだがそれでも言いたい事はハッキリと言う人物だ。

「いや、実は放課後かなり面倒な事があるんですよ。シスターシヤークティからは必ず参加するよう言われてて…。はぁ…。」

ため息を付きながら話す春日。強制参加なら致し方あるまい。しかし、何をそんなに面倒臭がるんだろうか？

「なにになに？美空が面倒臭がりなのは知ってるけど、今日はまた一段と面倒臭そうだね？一体何をするの？」

麻帆良のパパラッチこと、朝倉和美が手帳片手にインタビューしている。他の人も気になるのか、何時の間にかまた騒ぎ始めた。

「そんな面白い事じゃないよ。何でも、教会のお偉いさんが話をするって言うからそれを聞けって言われたんだよ」

「なあんだ、本当につまらなさそうね。スクープになるネタじゃないね」

聞いていた他の人達も同じようで、つまらなさそうにしていた。しかし、教会のお偉いさん？何か引つかかるな…。見れば真名も何か考えていた。

「それは災難だったね。でもおかしいな、そんな人が来るなんて連絡は受けていないんだけどね」

どうやら外からの来客があれば、先生達に連絡がいくみたいだ。…タカミチ先生も知らない教会のお偉い方。しかも今日の朝に、春日

に連絡があつたらしい。

「…すまないが、どういう人物か聞いているかい？一応確認を取りたいんだけど…」

確認とはやはり侵入者かどうか調べる為だろう。……一人だけ心当たりがあるけど。

「聞いてますよ。確か……………アレン・ウォーカーだったっけかな？あれっ？どっかで聞いた名前だな？」

「なっ!？」

「「「えっ!？」」「」」

様々な反応が帰ってきた。と言うより、やはり貴方でしたか……。昨日アレンさんと会ったクラスメイトや、このちゃんも驚きの反応をする。タカミチ先生に至っては、かなり驚愕していた。後春日、どこかで聞いた名前って夏休み前に学園長が話してたじゃないか。

「ほ、本当なのかい!？本当に、アレン・ウォーカーが話すのかい!？」

「え、ええ。本当です…」

「驚きやなあ、せつちゃん。お偉いさんがアレンさんなんてなあ？」

「そんなに偉い人でござるか…。いやはや、人は見かけによらないでござるよ」

「大飯食らいの神父だったアルか。…神父として大丈夫アルか？」

「あらあら、それを知らずに私達ったらあんな失礼な事を…」

「神父、ですか…。迷子になる神父…。本当に人を導けるのですか？」

「ゆえー、上手い事言ってる場合じゃないよー」

「アレンさんが、神父…。…カッコ良いな」

「おお、アキラが顔赤くしてる！やっぱり惚れてるんだ！」

かなり教室中がうるさくなってきた。注意する筈のタカミチ先生も何か考える素振りをしてる為、皆騒ぎ放題だ。

「刹那、これはかなりマズイ事になってきたぞ？」

真名が近づいてきてコソツと私に言ってきた。

「ああ、これはかなりマズイな。このちゃんや他の昨日アレンさんと会ったクラスメイトの連中はもちろんの事、魔法関係者であるタカミチ先生に知られたのもマズかったな…」

どういう経緯でそんな話をする事になったかは分からないが、この話が広まると他の魔法関係者の耳にも入ってしまう。その前に何とかしなければ！

「ちょっと！何で麻帆良のパパラッチであるこの私でも知らない人の事を、あんた達が知ってるのよ！？詳しく教えなさい！？」

ヤバイ、朝倉に知られると学園全体に広まってしまう！止めようにもすでに朝倉の周りにはアレンさんの事を知ってる人で固まってるし、一体どうすればっ！？」

「はっ！と、とりあえず皆！席に着いて！少し騒がしくなっちゃったから、静かにするように！」

「ええ！？まだ全然聞けてないんですけど！？」

何と以外にも騒ぎを止めたのはタカミチ先生だった。うるさくなってきたのに気付いたのか、はたまたアレンさんの事を隠そうとしたのか…。多分前者かな…。

「残念ながら和美君、今の話の人物の事は取り上げないでもらおうかな。…他にも知ってる子がいるみたいだけど、あまり言いふらすのもやめてほしい」

これまた以外、どうやらアレンさんの事を隠すみたいだ。真名も驚いているみたいだ。

「…ふう。…つともうこんな時間か。少し遅くなってしまったかな。…もう大事な連絡事項も無いことだし、今日はこれで終わろうか。…くどいように言うけど、今の話の人物に着いてはこれ以上広めたりしないこと。良いね？…それじゃ、また明日」

「起立、きょーつけ、れいっ！」

さようなら！と帰りの挨拶をすませる。タカミチ先生は早足で教室から出て行く。…学園長の所に行くのだろうか？

「タカミチ先生のおかげで、何とかなったかな？」

「どうだろうな。相手はあの朝倉だ。アレだけでは恐らく止まりはしないだろう」

真名に聞いて見たが、安心はできないとのこと。見ればクラス中に聞き回っていた。

「ねねっ！それで一体どんな人なの！？」

「あかんてえ、先生にも言われたやろ？これ以上教える事はできひんのや」

「そうね、今回ばかりはちょっとね…。悪いけど教える事はできないわ」

このちゃんと明日菜さん（お互い名前で呼ぶようになった）に聞いてみるも、二人は朝倉に教える事はしなかった。負けじと他にも聞き回る朝倉だが、結果は惨敗。誰も教えようとはしなかった。

「これは驚いたな。あのパルですら教えないなんて…」

「やはり皆、アレンさんの事を思ってた事なのか？」

アレンさんの生い立ち、そして左腕。…他の人が知ればどんな反応になるのか…。あまり想像したくはないな。

「もう分かった！なら自分で調べてやる！！場所は分かってるんだから！！」

そう言って走って教室から出て行く朝倉。クラス中が啞然としてる中、このちゃんが。

「もしかして、教会に向かったんちゃう!？」

「っ!?!しまった!」

「そういうことか!?!」

朝倉の後を追う私と真名。後ろからはこのちゃんや明日菜さん達が追って来る。くそっ!間に合うか!？

「あっ!私も行かなきゃ。……面倒だなあ……」

春日も後ろから歩いてきた。

もう一つの波乱（後書き）

朝倉が暴走しました。まあ、21Aの生徒は基本優しいですからね。そうそう秘密を話したりはしません。：多分。作者が書く21Aの生徒達は皆そんな子達ばかりです。：一部を除いては。では次回、アレンの体験談で原作前の話を終わらせたいと思っています。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

少年の物語（前書き）

最後の部分がかなりグダグダになってしまいました…orz

少年の物語

アレンside

……何でこんな状態になってるんだろう？

「おおー！あの人が噂のお偉いさんだね！？って言うかアレ、夏休みに麻帆良をうろついてた白髪の少年じゃない！？えっ！？？どういう事！？」

「…間に合わなかったか……」

「まさか私達より早く辿り着くとは……。パパラッチの名は伊達じゃないな…」

「せつ、せつちゃん、速すぎ、やわぁ…」

「あいや、中々の速さだたアルよ」

「拙者も追いつくのに必死でござるよ」

教会の前でシスターシャークティを待っていた僕とリナリー。リナリーには朝の事を話して着いて来てもらった。話した際、若干小言を言われたけど。そんな僕達の前に息を切らせながら走って来た刹那や真名、それに木乃香達まで集まりだしてきた。そして僕の事を噂の人物だとか言ってる女生徒も一体何の用なんだろうか？

「ア、アレン君。あっちも凄い事になってるよ？」

リナリーが指差す方を見れば、……シスターシャークティを先頭に、後ろには学校の先生と思われる人達がいた。

「シスターシャークティが連れて来た人達は皆、麻帆良の魔法関係者の先生達だよ。：アレン君の話を聞きに来たのかな？」

リナリーが小声で教えてくれた。：何でそんなに僕の話が聞きたいのかな？

「これはアレン君、それと隣にいるのはリナリーさんじゃないですか。お待たせしてすみません。：此方にいる人達は、是非アレン君の話を聞きたいと言ってきた先生達です。それより……、そちらの生徒達は友達ですか？」

やはり気になるらしい。とは言われても、僕自身何で彼女達が来たのかが今だに分からない。

「あつ、私達も話を聞きに来ました！後他にも、個人的に聞いた事があるのでつい来ちゃいました！」

「えっと、私達も……話を聞きに？：来ました。（すみませんアレンさん、私達はそのパパラッチを止めに来たんですが失敗してしまいました……）」

なるほど、刹那達はこのパパラッチと呼ばれてる女生徒を追って来たのか。まあ、ここで無下にするのも失礼かな？

「そうでしたか、わざわざ来ていただきありがとうございます。僕はアレン・ウォーカーと言います。麻帆良男子中等部の三年生で、先月ここに来たばかりです。よろしく願います」

「うっわ!？すごい丁寧な喋り方!？…私は朝倉和美!麻帆良のパパラッチとは私の事!だからアレンさんの事もいろいろ知りたいんだけど、後で話し聞かせてもらえますか!？」

自分でパパラッチって言ってるよ。

「ふう、…和美君。悪いけどそこまでだよ。彼の事は調べてはいけないって話したじゃないか。…すまないね、僕の生徒が迷惑をかけて。僕は彼女達の担任をしてるタカミチ・T・高畑。それと此方は僕と同僚達だよ」

「初めまして、葛葉刀子です。お会いできて光栄です」

「神多羅木だ。よろしく頼むよ」

「瀬流彦です。いやー、まさか会えるなんて思ってもなかったよ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

シスターシャークティが連れて来た先生達と一通り挨拶をする。タカミチ先生に注意されたパパラッチはかなりご立腹のようだ。

「さて、では中に入りましょうか。いつまでも外にいてもしょうがありませんから。…美空、いるのは分かってます。ココネも出てきなさい」

「…バレてたか。あいあい、大人しく聞けば良いんでしょ…。…私は春日美空で、こっちの子がココネ。シスターシャークティに師事してるのは私達二人だけ。よろしく」

教会の影から出てきて、あきらかに怠そうに話す春日。隣にはスカート裾を握っているココネと呼ばれた少女がいた。

「貴方達は全く……。ではアレン君にリナリーさん、中へどうぞ。他の皆さんもお入りください」

そう言って教会に入る僕とリナリー。続いて先生達に刹那達が入って来た。

中は至って普通の造りだった。とは言っても、本当に必要最低限の物しか置いてなかった。シスターシャークティに前へと案内され、リナリーや他の人達は横長の席に腰を降ろしていた。前に出る事で、ちょうど全体を見渡せて話す事ができる。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。本日は白の教会から麻帆良へと留学なさって来たアレン・ウォーカーさんから、自らが体験してきた事をお話していただけるとの事により、皆様にはお集まりいただきました。：それではアレンさん、よろしく願います」

前口上が終わり、席に戻るシスターシャークティ。一度全体を見回し、話を始める。：僕が体験してきた事を…。

リナリーside

静寂。アレン君が話すまで物音が一切しないかのように思えてしまう。

「：今日は僕がいろんな体験をしてきた中での話を一つさせていただきます。：その前に、まずは話す事があります。：白の教会に所属する前は、僕は孤児でした。生まれてから五年、僕は孤児院で生活をしてました。その後、白の教会のクロス・クロフォード神父に引き取られ三年程世界を旅しました。旅を終えてからは、クロス神父の紹介で僕は白の教会へと身元を移しました。：白の教会とは戦争孤児や財政難の孤児院、住む場所がない難民の人々を支援、保護する機関です。世界には生きる事すらままならない人達が大勢います。そんな人達を僕やリナリー、白の教会の人達が力を合わせて人々を救います。」

それが僕達の役目です」

アレン君が孤児だった事を知らない先生達は驚きの声をあげる。白の教会を知らなかった利那達は、感心の声をあげる。：正確にはアレン君は黒の教会なんだけどね。でもクレア元帥から聞いたけど、アレン君はエクソシストの仕事の傍、戦争孤児達の孤児院に支援しに行ったりしてるとの事。

「僕が今日話すのは、ある時に行った孤児院の話です。この孤児院には戦争で親を亡くした子供達が多数引き取られていました。子供は全員で二十人、子供達を亡くなった両親の代わりに育てていて、子供達からはお母さんと呼ばれてる女性がいました。この方は本当に子供達を愛し、大切にしていました」

二十人の子供を一人で育てるなんて……。きっと本当に子供達を思っていた事だったんだろうな。

「ですが、この孤児院の維持も国からの支援金が頼りだったんですが、国が戦争を始めたばかりに支援金は打ち切れ財政難に陥りま

した」

「ひどい……」

「あんまりや……」

本当に酷すぎる……。それではあまりにもその女性も、子供達も報われないじゃない……。

「それを知った白の教会は、その孤児院を支援する事に決めました。それでその孤児院に僕が先行で派遣され、物資や援助金などを持ち孤児院を訪れました。突然の事に女性は大変混乱していましたが、事情を説明する事で納得してもらい大変喜んでくれました。子供達も沢山の食糧や衣服に喜んでくれて、笑顔でお礼を言ってきました。……ああ、喜んでもらえて本当に良かった。そう心から思う事が出来ました」

ふうっと一息つくアレン君。周りにいた先生達は流石白の教会だと絶賛している。刹那達も子供達が幸せになって良かったと喜んでいて。話が終わったと思い、シスターシャークティが立ち上がろうとした時。

「ちょっと良いかな？アレンさんに聞きたい事があるんだけど」

突然、真名がアレン君に質問を شدした。

「?どうしました?」

「なに、ちょっと気になってね。……孤児院のその後の事を知りたいんだけど、……教えてもらえるかな?」

「あ、それ私も気になる」

「せやなあ、ウチも少し知りたいわあ」

「ふむ、興味深いでござるな」

真名の質問に周りも知りたそうにしている。

「ああ、もちろん幸せになりましたよ」

「嘘だね」

周りが一気にざわめく。アレン君は幸せになったって言ったのに、真名はそれが嘘だと即答する。

「…うん、アレン君。それは嘘だよね…?」

「アレンさん…。今のは私でも嘘だと分かりました…」

私と刹那も同じく、今のは嘘だと確信してる。

「ちょっとちょっと! いきなりどうしたの!?! 何で今のが嘘だって言い切れるの!?!」

朝倉が大声を上げて聞いてくる。

「そうだね、僕も今のが嘘だとは思えないんだけど…」

タカミチ先生や他の先生達も聞いてくる。

「眼だよ」

「眼？」

分からないとばかりに皆首を捻る。アレン君を見れば、苦笑いをしていた。

「ああ、アレンさんは根がかなりのお人よしだね。私達に気をつかって嘘をつくとき、眼が冷たく感じるんだ」

そう、アレン君はまず嘘をつくような事はない。あるとすれば、それは私達を思ってる事。

「ねえ、アレン君。…本当の事を話して…」

「アレンさん…。…お願いします」

「アレンさん…。…っ！？アレンさん！？血が！？」

いきなりアレン君の左眼の傷から血が！？

「……。知らなくてもいい事ですょ？」

「それよりも血がでてるよ！？」

「早く手当をっ！」

慌ててシスターシャークティが近づいて手当をしようとするが、アレン君がそれを拒む。

「…大丈夫です。すぐに止まります…」

「……ではせめてこれで拭いてください」

そう言ってハンカチを渡す。アレン君も渡されたハンカチで垂れてきた血を拭き取る。

「たとえ内容がどうであれ、私達は本当の事を知りたいんだ」

「ウチらも知りたい。聞かせて、アレンさん…」

皆本当の事を知りたいとアレン君に言う。

「……分かりました。……僕が孤児院を訪れた次の日、僕は今後の事を話に再び孤児院に行きました。しかし……」

一旦言葉を切るアレン君。じっと私達を見つめている。

「…そこにはあるはずの孤児院がありませんでした」

…えっ？

「それはどういう事ですか!？」

シスターシャークティが驚きの声をあげる。

「…孤児院があるべき場所には、…瓦礫の山しかありませんでした」

それって……。

「破壊、されてたのかい？」

タカミチ先生の言葉に周りが驚く。

「その通りです。恐らく国の軍隊に破壊されてしまった孤児院は、もはや見る影もありませんでした」

「子供達や女性はどうなったんですか？」

刹那が安否を確かめる。

「…必死に瓦礫を退けて呼びかけましたが、返事はなくただそこには無残にも変わり果てた子供達がいました…」

「そんな…」

「許せないです…」

「酷すぎるよ！」

確か、宮崎さんと綾瀬さんそれと和泉さんが声を荒げる。

「そして幾つかの瓦礫を退けた時、一人の子供を守るように覆いかぶさる女性がいました。僕は生きていてほしいと言う願いを込めて呼びかけました。すると、微かですが女性はまだ生きていました」

「奇跡だな」

「助かったんでしょうか…」

神多羅木先生、那波さんがそうつぶやく。

「残念ながら、子供の方は手遅れでしたが女性はすぐに病院で手当すれば助かる可能性がありました。…女性は僕を見て言いました。

……呪ってやる、と」

……なん、で？

「どうして！？何でアレン君がそんな事を言われなきゃならないの！？」

「…女性は息も途切れ途切れに話しました。どうやら国は、白の教会が孤児院に支援したのが気に食わなかったらしく、支援した物資や援助金を強奪し孤児院にいた全員を反逆者として扱い、その場で殺され、挙句には建物も破壊。…白の教会さえ来なければ、僕が来なければ良かったと、女性は僕を恨みながら息を引き取りました。僕はそれをただ黙って聞いてました。聞いている間、左眼には激痛が走ってました。まるでその呪いを受け止めるかのように」

聞いている最中から泣き出してしまった。私だけじゃなく、ほぼ全員が泣いていた。そんなの…あんまりだよ…！

「…辛く、なかったの？」

「…僕より、あの孤児院にいた子供達の方が辛かったはずですよ…。国に殺されたんですから…」

…どうしても自分が辛いとは言わないアレン君。

「…すみません、やはり話すべきではありませんでしたね…。本当にすみませんでした」

頭を下げて謝罪するアレン君。…違う！アレン君が謝る必要はないのに！

「…：貴方が謝る事はありません。私達が聞きたいと無理を言ったのですから。むしろ謝るのは、辛い事を思い出させてしまった私達です。…本当にごめんなさい」

シスターシャークティが立ち上がり、アレン君に謝る。私も同じように頭を下げると、他の人達も下げ始める。

「皆さんが謝ることはないですよ！それに、元々は僕がもう少し話を選べば良かっただけですし…」

「それでもです。…貴方は本当に優しくすぎます。自分よりも他者を優先する、いえ優先しすぎています。…もう少し自分を大事になさってください…」

シスターシャークティの言葉に周りが頷く。

「…：僕は…」

「何も今答えを出す必要はありません。…自分の納得できる答えを出せることを願ってます…」

静かに祈るシスターシャークティ。私も祈る。刹那も真名も、他の皆も同じように祈り始める。

ーどうかアレ^ン君が幸せになれますようにー

少年の物語（後書き）

これで、原作前の話は終わりです。次回からはいよいよ原作へと突入します。ところどころ原作とは違う場面がでてくるかもしれません。んが、それでも良いと言う方は今後もよろしくお願いします。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

英雄の子（前書き）

ようやく原作に突入しますが、ところどころ違うところがあります。
ご了承ください。

英雄の子

今日もあの場所にいるのかな？

〇〇〇はいつもあの場所で本を読んでは。

また面白い話を聞かせてくれるのかな？

「やあ、アレン。またお話を聞きに来たんですか？」

やっぱりいた。〇〇〇はまた本の話の話を聞かせてくれるみたいだ。

「今日はどんなお話にしましょうかね」

〇〇〇はそう言って今日も話を聞かせてくれる。

アレン side

「…はっ!? ……夢？」

…どうやら夢を見ていたようだ。ひどく懐かしい夢だった…。

「何で今頃……。もういないって言うのに……」

そう言いながら寝室を出る。…全く、朝から勘弁してほしいよ…。

「……ふう、この時期の水は冷たいな。おかげで眼が覚めたよ……」

僕がこの麻帆良に来て大分経つ。すでに年は明けて、残る中等部の生活も三学期で最後だ。学生生活も今ではすっかり慣れてきた。リナリーや刹那に真名、木乃香達といった面々ともかなり仲良くなれた。他にもシスターシャークティやタカミチ達といった一部の教師陣ともそれなりの関係を築けている。

リナリーに渡した核鉄の修行もほぼ終わりに近づいている。今のリナリーなら余程の使い手が現れない限り、まず遅れを取る事はないだろう。僕もリナリーの修行の最中に、自分の鍛錬をしていたがいかんせん、鍛錬にすぎなかった。ならばリナリーとの組み手とも考えたけど、目立ちそうなので却下した。…流石に刹那や真名に相手をさせる訳にもいかず、仕方なく鍛錬を励んでいる。

「…っと、そろそろリナリーが来る頃かな？」

顔を洗って歯を磨き、服装も学校に来て行く服装へと着替えて身だしなみを整えていると、そろそろリナリーが来て朝食と一緒に食べる時間へと近づいていた。

ピンポン

どうやら時間ピッタリだったようだ。玄関に行き鍵を開ける。

「おはようございます、リナリー」

「おはよう、アレン君。早速だけど、朝ご飯作るね。アレン君も手伝ってくれる？」

「もちろんです。じゃあ、台所に行きましょうか」

リナリーが二人分の朝食を作り、僕が盛り付ける皿やらを用意する。
…流石に全部リナリーに任せられないし……。

「そう言えばアレン君。例のあの子、今日麻帆良に来るけどどうする？まだ接触するつもりはないんだよね？」

例のあの子。僕が麻帆良に来る理由となった人物、ネギ・スプリングフィールド。ゴゴ元帥は日常生活までは監視しなくて良いとは言ってたけど…。

「そう、ですね…。流石にまだ早すぎますね。それにまだネギ・スプリングフィールドが、この麻帆良で何をするのかが分かりません。なのでどうしようか、少し迷っています…」

そもそもネギ・スプリングフィールドは何故麻帆良に来るのだろうか？先日、学園長が魔法関係者全員にはネギ・スプリングフィールドが来る事を通達してはいたが、何をしに来たかまでは話さなかった。ましてや、ネギ・スプリングフィールドには自分達が魔法関係者だとは、極力教えるなどの事だった。

「そうだよね…。確か資料によれば数えで十歳でイギリスにあるメルディアナ魔法学校を主席で卒業したって書かれてるし、わざわざ麻帆良に来てまで何をするんだろうね？」

「……これは今考えても仕方ないですね。当面は向こうの出方を見る事にしましょう。…後手に回ってしまいましたが、焦っても仕方ありません。……一応、保険は掛けておきます」

「保険？どういう事？」

首を傾げて聞いてくるリナリ。

「ええ、とりあえず彼女に連絡して頼んでみます。：受けてもらえるか分かりませんが：」

そう言って携帯で連絡を取る。：何気に依頼するのは初めてだ。

真名side

朝、刹那と部屋でご飯を食べていると携帯が鳴る。どうやら私のが鳴っているようだ。

「もしもし、どうしたんだいアレンさん？朝早くから電話だなんて。：まさか今から私に会いたいと言っても言うのかい？私ならいつでもOKだよ。：：：冗談だよ、そんなに怒るなよ刹那。っとすまない、それで本当の要件は？：：：：ふむ、なるほどね。そこで私に頼ってくれるのは非常に嬉しいね。：了解した。その依頼受けようじゃないか。報酬はそうだな：：：、アレンさんと一日デートでどうだい？：：ん？ああ、もちろん私の方は逐一怪しい動きがあったら連絡するよ。うにするよ。：それじゃあ、今日また放課後にでも調べて連絡するよ。それじゃ、また」

「：：：：アレンさんと一日デートだと？真名、今の電話の要件は何だったんだ？」

刹那が電話の最中から殺気を放ってくる。：全く、嫉妬は醜いぞ？

「なに、ネギ・スプリングフィールドについてだよ。麻帆良でどう動くか少し調べて欲しいとの事でね。放課後を使って調べてみる事にするよ」

「……私も手伝いたいが、このちゃんの護衛もあるし……。くそつ、私も……一日デート……」

最近の刹那は欲望がだだ漏れだな。……しかしアレンさんとのデートは譲らない！……おそらく今頃アレンさんは、リナリーさんのご機嫌取りに必死だろう。……やれやれ、モテる男は大変だろうね。流石アレンさんだ。

「さてと、そろそろ時間だな。……おい刹那、いつまで落ち込んでるんだ？置いてくぞ？」

「あ、ああ、今行く……」

まだ落ち込んでる刹那と共に学校へと向かう。……ふふっ、デート楽しみだな。

「どう思う？刹那」

「私に分かる訳ないだろ？」

朝のSHL前、クラスではある噂で持ちきりとなっている。

何でも新しい先生がウチのクラスの担任となるらしく、その先生が外国の大学を飛び級で卒業した子供だとの事。……まさか麻帆良で教師をするとは……完全に予想外だ。アレンさんからは、魔法学校を主席で卒業したとは聞いていたが、教員免許を持っているとは聞いていない。つまり、教員免許を持っていないにも関わらず教師をやらせる。立派な違法だ。だがこの麻帆良ではそれがまかり通ってしまう。……一応、アレンさんとリナリーさんにはメールで報告しておこう。

「マジで意味が分からないわよ、あのガキ！何であんなガキが教師なんてできるのよ！しかも高畑先生の代わりだなんて！！絶対に認めないわよ！」

先程から怒り爆発状態のアスナ。何でも朝偶然出会ったらしく、しかも出会い頭でいきなり失恋の相が出てるとか言われたり、ネギ・スプリングフィールドがくしゃみをしたら自分の着てた服が何故か脱げたりと散々な目にあったらしい。……正直頭が痛い。見ると刹那も頭を抱えている。当然だ、魔法学校を主席で卒業したにも関わらず、くしゃみをするくらいで武装解除を自然としてしまう。どんなエロガキだ。魔力制御が出来ないのだから？それともただの馬鹿なのだろうか？

「しかももう少しで、あのガキと同じ部屋で過ごす事になるところだったし！木乃香が学園長に嫌だってハッキリと断り続けたから何とか回避出来たけど、……ホント朝から最悪だったわ……」

「ほんまやなあ、おじいちゃんもいきなり部屋に泊めてやってくれやなんて。確かにまだ子供やけど、流石に……なあ。ウチらも女の子

やし、何より好きでもない男の子と一緒に住むのは勘弁やわあ」

……学園長も馬鹿だった。一般人である生徒の部屋に、しかも自分の孫娘が住んでる部屋に何故魔法使いを住まわせようとするのだろうか？バレたら大騒ぎではすまないのに。……と言うか、女子寮に住まわせる事がすでにおかしい。刹那も夕風片手に怒りで震えている。

「……このちゃんに危害を与えるようならば……」

そりやそうだ。くしゃみで武装解除するくらいだ。今にくしゃみをしたら、攻撃魔法が発動しても不思議じゃない。

「つと、噂をすれば影ね。来たみたい」

アスナが教室の前のドアの人影を見て呟いた。他のクラスメイト達も気付いて自分の席へと戻っていく。……私も戻るか。

見ると教室に入るドアが不自然に少し空いている。上を見てみれば、そこには定番の罫である黒板消しが挟まっていた。更には床にはロープまで仕掛けられている。……どうやら新しい先生が子供だとは全員知っている訳ではないらしい。……アレだけアスナが騒いでいたのに聞いていたのは私と刹那と木乃香だけだった。……流石はウチのクラスだ。人の話を聞かない。そうこうしているといよいよ入ってくるみたいだ。

「し、失礼しま……」

すが言えなかった。ドアを開けた瞬間、黒板消しが落ちてくるが頭に当たる前に、黒板消しが空中で不自然に止まった。まるで一時停止するかのように。……魔法障壁を常時展開しているようだ。普通

の人の眼では分からないだろうが、私の魔眼でなら見える。…黒板
消しは障壁により空中で止められている。

……結論、ネギ・スプリングフィールドは超大馬鹿者だ。

英雄の子（後書き）

早速フラグブレイクでしたね。アスナと木乃香の部屋に住む事は出来なかった薬味。そりゃそうだ、普通に考えれば初対面の相手を泊めたりはしませんよ。しかも超常識人であるアレンとの交流もありますし、この二人も考えが普通になってきたりもします。：若干アンチの臭いが……。

アンチが嫌な方は感想にてご意見を受け付けています。嫌な方が多ければ薬味に対する原作キャラ達をもう少し丸くしますのです。

では次回は後編です。どうぞお楽しみに。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

魔法使い（前書き）

今回は原作の台詞を多用している場面がありますが、ご了承ください。

またアンチに対する意見を多数ご応募していただきありがとうございます。考えた結果、ネギに対するアンチではなく、多少厳し目の態度をネギにとるようにしようかと思っています。簡単に言えば、ネギを調教……のような事をして育てていく感じにしたいなあって思ったり。……どうか生暖かい目で見守ってください。

魔法使い

真名side

「あの、えっと、今日からこの学校で、まほ……英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。三学期だけの間でですけど、よろしく願います」

頭を白い粉だらけにし、肩は水で少々濡れながら緊張した様子で自己紹介するネギ・スプリングフィールド。……あの後、障壁を解いて黒板消しを頭に落とし、足元に仕掛けられていたロープに引っかかり頭上から水の入ったバケツが落ちてきて水浸しに。クラスメイト達は新しい先生が大人だと勘違いしていて、引かなかった事を面白がっていたが実際は子供だった為慌てて近づき謝罪、その後は皆で質問攻めをしていたが一緒にいてきていた源しずな先生に注意され、大人しく席に皆戻る。…そして今に至る。

「「「かわいいー!!」」」

大歓声が教室中に響き渡る。…正直耳が痛い。

「はいはーい!何歳なのー!」

「えっと、十歳です…」

「どこから来たの!?!」

「イ、イギリスのウェールズの山奥から…」

再び質問攻めが始まる。特に報道部の朝倉がマイクを片手に突撃している。

「今どこに住んでるの!？」

「いや、まだどこに住むか決まってないんです…」

そりゃあ朝に断られているから当然だ。

「みなさんお静かに!!!…ネギ先生、まだ住む場所が決まっていな
いなら私達の部屋に来ませんか? 歓迎いたしますわ」

騒がしいクラスメイトを一喝するのは、クラス委員長である雪広あ
やか。あだ名はいいんちよ、…まんまだ。そんないいんちよが一緒
に住まないかと誘ってきた。…流石シヨタコン。

「えっ!? 本当ですか!？」

食いつくネギ・スプリングフィールド。

「ああー! いいんちよずるゝい! 私も一緒に住みたいのゝい!」

反論するのはバカピンク、佐々木まき絵。バカピンクよ、お前もか。

「いいんちよ達の部屋はもう三人で住んでるんだし、私達の部屋な
ら私と亜子だけだから余裕あるし! ねえネギ君、私達の部屋におい
でよ!」

「何を言っているんですか、まき絵さん! 私達の部屋は他の三人部
屋とは違い、私が自費で部屋を改築し広くしているんですよ!？」そ

れに比べたらそちらの部屋は普通の広さの二人部屋なんですから、三人で生活すると窮屈になってしまいますわ！だ・か・ら！ネギ先生は私達の部屋で引き取ります！…良いですわよね、千鶴さん、夏美さん！」

かなり強引な意見だが、まあ理解はできる。確かに二人部屋で三人暮らすとなると、かなり部屋が狭くなってしまう。いいんちよ達の部屋がどのくらいの広さか分からないが、アレだけ自信を持って言うのなら本当に広いんだろう。

「んゝ、私は別に……。ちづ姉は？」

「そうね、……。いろいろ決め事とかあるけど、それを守れるのなら私も構わないわ」

「ええゝ！……亜子ゝ」

「諦めなよ、まき絵。どう考えてもいいんちよの言うとおり、私達の部屋じゃ三人は厳しいよ」

どうやらいいいんちよと同室の二人の許可も取れ、和泉も流石に厳しいと思ひ同室を拒否。これにより、後はネギ・スプリングフィールドが行くかどうかだ。

「あの、えっと、本当に良いんですか？」

「もちろんです、ネギ先生！これからよろしくお願いいたしますわ！」

どうやら決まったようだ。いいんちよは有頂天となり、かなりテン

ションが高くなっている。

「はいはい、ネギ先生の住む場所が決まったところで、そろそろ授業しますよ。…それではネギ先生、お願いします」

「は、はい」

話もひと段落し、ようやく一時間目を始めるようだ。……前途多難だな。

キーンコーンカーンコーン…

授業も全て終わり放課後となった。あ後はアスナがネギ・スプリングフィールドを睨みつけているだけで、他は比較的静かだった。アレンさんの依頼を遂行する為今は、近くには気づかれるかもしれないし、他の魔法関係者と鉢会う可能性もある為少し離れた場所から監視をしている。今は広場の少し離れた場所で宮崎が大量の本を書き込んでいる。すると広場の少し離れた場所で宮崎が大量の本を抱えながら歩いている。階段の端を歩いている為、少しでもバランスを崩すと階段から落ちてしまう。…どうやらネギ・スプリングフィールドも気付いたらしく少し心配そうに見ている。…すると段を踏み外してしまい、階段から落ちてしまう。くそっ、今から走って間に合うか!?

「きゃああああ!」

叫び声をあげながら落ちて行く宮崎。このままではっ！：視界の端ではネギ・スプリングフィールドが杖を構えている。魔法で落下速度を緩めるのだろうか？：それでも間に合うか微妙だ。魔法をかけて走り出すネギ・スプリングフィールド。いや、走り出そうとしたがその必要は無くなった。私も走るのをやめ、再びネギ・スプリングフィールドから離れる。

「ふう、大丈夫、のどか？危ないところだったわね」

「えっ？……リナリー、さん……？」

リナリーさんが落下地点で待ち構えていた。どうやらリナリーさんも宮崎が落ちるのを見ていたらしく、急いで駆けつけてくれた。：瞬動を使えるとは、流石にアレンさんと修行をしていることはあるみたいだ。

「あの、危ないことを助けていただき、本当にありがとうございます」

「間に合って良かったよ。でも危ないでしょ？一人でこんなに本を抱えてたら。どこに持って行くの？手伝うよ？」

「あの、大丈夫です。一人で持って……、いえやっぱりお願いできますか？図書館島なんですけど……」

「よし、なら半分持つね。行きましょ、のどか」

宮崎は大丈夫だと言おうとしたが、やはり好意を無下に出来ないと思ったのか手伝いを頼んだ。二人はそのまま図書館島の方へと本を

持って行った。

ネギ・スプリングフィールドはというと、……アスナが魔法を使うところを見ていたらしくネギ・スプリングフィールドの襟首を掴みそのまま人気のない場所へ。…私もある程度距離を取りながら着いて行く。

「あ、あんたやっぱり超能力者だったのね!!」

どうやらアスナは先程の魔法を見て、それを超能力だと勘違いしているみたいだ。

「ち、違いますっ! さっきのは超能力じゃなくて魔法です!!」

自分から魔法だとバラすネギ・スプリングフィールド。本当に魔法学校を卒業できたのだろうか?

「どっちでも同じよ! ……って事は、朝のあの服が脱げたのもあなたの仕業ね!」

「あう、ゴメンなさい…。あ、あの、他の人には内緒にしてください。バレると大変な事になるんです…」

「んなの知らないわよ!」

ごもつとも。……と言うかももう少し誤魔化す努力をすれば良いのに…。相手はアスナなんだから、口先だけで丸見込めれる事もできなくはない。……バカレツだし。

「だったら仕方ありません。秘密を知られたからには記憶を消させ

てもらいます。……もしかしたら少しパーになるかもですけど、許してください」

「ちょっ！？ちよつと待ちなさいよ！？記憶を消すって何なのよ！しかもこれ以上バカになりたくないわよー！！」

どれだけ大雑把な記憶処理をするつもりだ。せめて眠らせてから記憶処理すれば良いのに。……アスナ、もう、手遅れだ…。

「記憶よ、消えろ！」

杖を掲げて魔法を唱える。果たして頭は更に悪くなるのか。はたまた賢くなってしまうのか。

「キャー！？」

……服が破けた。……おかしい、何故記憶処理の魔法で服が破ける？失敗したのだろうか？それにしておかしい気もする。……と言うか上着だけ残って後は破けるだなんて、かなりマニアックな格好だ。……ふむ、生えていないな。その歳で生えていないのは、少し恥ずかしい気もする。

「おーい、そこの二人。何をしているんだい？」

！？どうやら騒ぎを聞きつけ、近くを見回りしていたタカミチ先生が様子を見にきたみたいだ。……これ以上の監視は厳しいかな。アスナの記憶処理も失敗してしまったし、この先どうなることやら。……とりあえず、この事をアレンさんとリナリーさんに報告しよう。後は刹那だな。木乃香はアスナと同室で親友だし、下手をしたらバレル可能性がある。その辺りを注意するよう言っておこう。……や

れやれ、ネギ・スプリングフィールドの監視は骨が折れるね。これは一日デートの時に埋め合わせをしてもらわなければ。……ふふっ♪

監視報告書

監視対象、ネギ・スプリングフィールド。

件の人物は魔法に対する認識が薄く、日常から使う恐れあり。これに学園側がどう対処していくのか、要注意。当面の住まいは、受け持ち担当である生徒の部屋に住む事に。生徒名は雪広あやか、那波千鶴、村上夏美、以上三名である。この三名にも魔法がバレル可能性があるので要注意。またすでに被害を受けた人物が一名、名は神楽坂明日菜。この人物もネギ・スプリングフィールドの受け持ち担当の生徒である。神楽坂明日菜は、ネギ・スプリングフィールドが魔法を使う場面を目撃、追求したことにより魔法の存在を知る。ネギ・スプリングフィールドは神楽坂明日菜に対し魔法で記憶処理を行うが、記憶は消えずに何故か服が破けるという異例が起こる。何故このような事が起こったかは不明。今後機会があればそちらの方も調べる事にする。以上でネギ・スプリングフィールドの初日の監視報告を終了します。

龍宮真名。

追伸、神楽坂明日菜はパイパンだったよ。……アレンさんもパイパンの方が好みかい？言ってくれれば私もパイパンに……

「最後の最後でなんて事書いてるんですかー!!」

真っ赤な顔で叫ぶアレ。頑張れアレ。真名のセクハラに負けるな!

魔法使い（後書き）

ネギの貞操の危機wという訳でいいんちよ達の部屋に住む事になりました。まあ千鶴や夏美は小太郎を拾って一緒に住むくらいですからね。あまり抵抗とかないでしょう。いいんちよはもう暴走しまくりでしょうけどw

本編は真名視点であっさりと終わりましたが、変に長引かせても仕方ないかなと思います。……特にアンチする場面でもないです。

次回はアレンと真名の一日デートです。それなりに甘くするつもりなのですが、あまり過度な期待はしないでください。普段通りのクオリティでしょうから。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

一日占領（前書き）

……甘い、かな？

一日占領

真名 side

……ついに、ついにこの時がきた。

アレンさんとの初デート！

今までは私が麻帆良を案内したりとか、アレンさんが迷子にならないように一緒に歩いたりとかだったけど、今日は違う！ 真正正銘二人つきりでのデートだ！……まあ欲を言えばアレンさんから誘って欲しかったけど、今回は少しずるい方法だが私への報酬という形での一日デートだ。……次からは誘ってもらいたいな……。

「……真名、下着姿でうろつくのは止めてくれないか？ さっさと服を着るなりしたらどうだ？」

下着姿で部屋をうろうろしていたら、刹那に怒られた。……やれやれ、分かってないな刹那は。

「……大方今日着ていく服を何にしようか迷っているんだろ？」

「……ナンノコトヤラ」

「いや、バレバレだからな。さっきから服を着ては脱いでを繰り返してれば普通に分かるから」

……そりゃそうさ。デートともなれば、着ていく服に気をつかうの

は当たり前だ。

「それに、言っちゃ悪いが……流石にその下着はないだろ？ 少しばかり……、大胆すぎじゃないか？」

真っ赤な顔で下着を指摘する刹那。

「…普通だろ？」

「どこがだ！？ 明らかに布地の面積が少なすぎだろ！？」

まあ確かに布地の面積は少ないな。でもな、多少大胆じゃないとアレンさんは意識してくれないし。……少し恥ずかしいが我慢だ。

「あまり怒鳴るなよ。良いじゃないか、下着くらい少し大胆でも。…しかしそうになると、服は大人しめの方が良いのだろうか…？」

「……好きにしたら良いだろ？」

「酷いな刹那。親友が困っているっていうのに、何のアドバイスもしてくれないのか？」

全く、これだから嫉妬ガールは。

「……アドバイスしたくても、私もあまりファッションは詳しくないから何て言えば良いか分からないんだ」

ああ、確かに。刹那は特に服にこだわりを持っていないしな。

「ん？ だけどいろいろ服を持ってるじゃないか？」

「…あれはこのちゃんが選んでくれたんだ。私のセンスじゃない」
なるほど、ならば納得。

「だが、しいて言うなら真名の言うとおり大人しめの服装の方が良いんじゃないか？まあデートな訳だし、たまには女の子をしてくれば良いさ」

「…そうするとするかな」

約束の時間も迫ってることだし、少し急ごうかな。

「もう少しで待ち合わせ場所だな」

待ち合わせ場所である駅前へと向かう。約束の時間まではまだ十分はあるかはまだ余裕だな。

程なくして待ち合わせ場所に到着。少し辺りを見回しアレンさんが来ているか探してみる。

「…私の方が遅かったか…」

すぐに見つけた。アレンさんはすでに来ていて、私を待っていてくれた。

「やあ、アレンさん。待たせてしまったかな？」

「あっ、真名。僕も今来た……ここで、す………」

待たせてしまった事を謝ろうとしたが、アレンさんは気にしたそぶりを見せなかった。……と言うか。

「どうしたんだい？私に何かついてるかい？」

アレンさんがじっと私を見ているので、身だしなみがおかしくなっているのかと思った。

「い、いえ！そうじゃないんです。ただ、………」

「？どうしたんだい？……なるほど、私に見惚れたんだな？」

自分で言って少し恥ずかしくなった。まさか、アレンさんがなあ。

「……恥ずかしながら、真名の言うとおりです」

「……………きちんと聞きたいな」

まさか、……本当に？

「…可愛いですよ、真名。つい見惚れてしまいました…」

「……………ありがとう」

ヤバイ、絶対今の私の顔は真っ赤だ。見るとアレンさんも少し赤くなっている。

「そんなに、……似合ってるかい？…私は普通より背もデカイから似合うかどうか分からなかったが…」

結局悩んだ末、白のワンピースでデザインも控えめな感じの服装にした。…刹那も似合ってるとは言ってくれたが、それでも少し不安だった。

「そんな事ないですよ。…僕もあまり服とかは分からないんですが、それでも今の真名は可愛いつて思います」

「……嬉しいよ」

もうダメ。半分理性が飛んでる。

「…そろそろ行きましようか。いつまでもここにいる訳にはいきませんし」

「…うん、…今日はアレンさんに任せるよ」

「ええ、任せてください」

そう言って私達は移動する為電車に乗った。……どんなデートになるのか、楽しみだ。

最初に来た店は、麻帆良の生徒達に人気のある服屋だ。

「アレンさんがこんな店を知ってるだなんて意外だね」

「ははっ、これでも学生ですからね。それなりに店は知ってますよ」
「どうやら他の生徒達とも上手くやれてるみたいだ。」

「それで、アレンさんは新しい服でも買うのかな？」

「いえ？ 僕じゃありませんよ？」

アレンさんのじゃない？ …なら誰のだろうか？

「日本の孤児院への贈り物なんです。 ……本当は僕が選びたいんですけど、どういふのが喜ばれるか分からないので真名に教えていた
だきたいんです…」

やれやれ、アレンさんは相変わらずだ。

「それはリナリーさんとじゃダメだったのかい？」

少し意地悪してみる。

「真名ならしつかりとした服を選んでくれると思ってますので。 …
…やっぱり迷惑でしたか？」

「いや、それだけ頼りにされているなら悪い気はしないよ。 …なら
二人で選ぼうか」

私なら…か。 中々嬉しい事を言ってくれるじゃないか。

「すまないね、私の服まで買ってもらって…」

「気にしないでください。ほんのお礼ですから」

孤児院への服はまとめて配送した。私の手には服を選んでいる最中、気に入った服がありそれをアレンさんが私に買ってくれた服がある。孤児院への服も私の服も全てアレンさんが自腹で買った物だ。

「それでも買ってくれて、ありがとう。大切に着させてもらうよ」

ぎゅっと袋を抱きしめる。近いうちに着たところをみせてあげないと。

「喜んでもらえて良かったです。…もうお昼時ですね。そろそろご飯にしますか？」

もうそんな時間か。早いなあ…。

「そうだね、どこで食べようか？」

「確か近くに美味しいご飯処があるって話を聞きましたよ。しかもその餡蜜がまた絶品らしいです。…そこにしますか？」

ほう、それは中々良さそうな店だな。

「そうだね、ならそこにしようか。……私が餡蜜好きなの覚えてたんだね…」

「もちろんですよ。…真名の事ですから…」

…その言い方はずるいよ…。

「いやあ、美味しかったですね。また行きましょうね」

「ふふっ、ならその時を楽しみにしておくよ」

噂になるのが頷ける程の店だった。どれも美味しい料理ばかりで、餡蜜もかなりの味だった。……例によってアレンさんの食べる量が凄かったけど…。それでも楽しい食事だった。

「さて、食後の運動がてら街を散歩しませんか？」

「散歩か。のんびりとできて良いかも知れないね」

と言う訳で昼は街を歩く事に。たまに気になる店に入っているいろいろと見て回ったりと、かなり充実した散歩を楽しめた。

「…真名、少し良いですか？」

「ん？何かな？」

「あの子なんですけど、…迷子でしょうか？」

見ると小さな子供が泣きながら立ち尽くしていた。どうやらアレンさんの言うとおり、迷子のようなだ。アレンさんとその迷子まで近づいていく。

「坊や、迷子ですか？」

「ひっく、ぐず……、お兄ちゃん達、だれ？……お母さんはどこ……？……うう」

どうやら長い間迷子になってるみたいだ。

「初めまして、僕はアレン、お姉ちゃんの方は真名って言います。坊やの名前は何ですか？」

「……田山勇太……です」

迷子の子供、勇太は少し怯えながらも名前を覚えてくれた。

「勇太、ですか。勇太はお母さんとお出かけしていたんですか？それとも誰かと遊んでいましたか？」

「……お母さんと街をお出かけしてたら、何時の間にかお母さん、いなく……なってて、それで歩いて探してて……」

泣くのを必死に我慢しながら話す勇太。そんな勇太を私は優しく撫でてあげる。

「大丈夫、お姉ちゃん達と一緒にお母さんを探してあげるよ。泣いてたらお母さん、心配するぞ？」

勇太と同じ目線で話しかけてあげる。勇太もお母さんに心配かけたくないのか、泣くのをぐっと我慢した。

「良い子だ。なら勇太、最後にお母さんと一緒にいた場所を覚えるかな？」

「うん、覚えてるよ」

どうやら覚えてるようだ。なら一度戻ってみよう。

「なら行きましようか。ほら勇太、手を握って」

勇太の右手をアレンさんが握り、私が左手を握る。……親子みたいだ。…アレンさんと、家族…。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「えっ？…あ、ああ、大丈夫だよ」

いかにいかに、つい顔に出してしまった。

「この辺でお母さんとはぐれたの…」

勇太に連れられ、勇太がお母さんと最後に一緒にいた場所まで戻って来た。

「ならこの辺を探してみましよう。もしかしたらお母さんも、いるかもしれませんし」

そう言って周りを歩きながら探していく。

「勇太!？」

「お母さん!！」

少し離れた場所で勇太のお母さんを見つけた。向こうもこの辺を探してたみたいだ。

「どこいったの!？心配したんだから！」

「ゴメンなさい…。あのね、僕が迷子になってたらアレン兄ちゃんと真名お姉ちゃんが助けてくれたの。一緒にお母さんを探してくれただよ」

勇太のお母さんが此方を見てくる。私とアレンさんは軽く会釈する。

「勇太のお母さんですね？アレンと言います。此方は真名です。たまたま歩いてたら泣いている勇太を見つけまして、話を聞いたら迷子だと言うので一緒に探してまして…」

「そうでしたか……。本当に何とお礼を言って良いか。…勇太を助けていただき、本当にありがとうございました」

アレンさんが事情を説明すると、お母さんは感謝の気持ちを言ってきました。

「アレン兄ちゃん、真名お姉ちゃん。お母さんを探してくれて、ありがとう！」

「良かったな、勇太。もう迷子になるなよ？」

そう言うとともに、お母さんの手を握る勇太。

「それじゃあ、僕達はこれで。バイバイ、勇太」

「またな、勇太」

「バイバイ！アレン兄ちゃんと真名お姉ちゃんも離れちゃダメだよ！」

最後にとんでもない事を言われた。アレンさんは苦笑いで返し、私は赤くなってしまう。俯いてしまう。

「良かったですね、勇太のお母さん見つかった」

「そうだね、あの笑顔を見て良かったと思うよ」

勇太が笑顔で此方に手を振ってきた時は、本当に良かったって気持ちでいっぱいだった。

「……真名、少し歩きませんか？」

「ああ、構わないよ」

歩いて少し離れた高台まで来た。

「…すいません、今日は真名とのデートだったのに僕の都合に合わせてしまっ…」

都合とは孤児院に送る服や、さっきの勇太の事だろう。

「なに、気にする事はないよ。私も楽しめたしね。それに、その優しさもアレンさんの魅力だ。私がとやかく言える筋合いはないよ」

「…そう言ってもらえて、幸いです」

中々生真面目なところがあるアレンさん。

「…アレンさんは今日、私とのデートは楽しかったかい？」

「…ええ、今日は本当に楽しめました。こんなに楽しい思いをしたのは初めてです…」

まあデート自体が初めてだしね。でもアレンさんも楽しんでいたら良かった。

「……僕は元々戦う人間です。人々の為に戦場へ行き、戦場で多くの人々を救う為に多くの人々を殺してきました。…そんな僕がこんなに幸せで良いのでしょうか？」

自らに問い掛けるように話すアレンさん。…そんなの決まってる。

「幸せになって良いに決まってる。人を幸せにするには、まず自分が幸せじゃないと人を幸せにすることなんて、出来はしないんだ。じゃないと、どんなのが幸せか分からないじゃないか。…幸せが分

からないと、本当に人を幸せにできたかどうかなんて分かりっこないよ」

説教じみたことをアレンさんに言う。似合わないのは分かってるが、どうしても言わなければならなかった。

「……今日、真名と話していると楽しくなりました。真名のお話を聞くと嬉しくなりました。真名の笑顔を見ると、……何だか幸せな気持ちになりました。……平和で争いもなく、皆が笑って過ごしている。真名やリナリーに刹那、明日菜や木乃香達と過ごした日々。どれもがこの麻帆良に来てから得たモノです。……掛け替えのない毎日でした」

アレンさんの言葉を、気持ちを一つ一つ受け止める。それと同時に大きくなる、アレンさんへの気持ち。

「皆にはいくら感謝しても足りません。こんな僕と一緒にいてくれる真名やリナリーと刹那。……今だけは素直に言わせてください」
私の目を真っ直ぐ見てくるアレンさん。

「ありがとう、真名。僕と一緒にいてくれて」

満面の笑顔で言うアレンさん。……分かってる、アレンさんは感謝の気持ちで言っただけで事は。でも……。

「どう、いたしまして……」

真っ赤な顔でアレンさんを見つめかえす。

ああ、どうやら私は

アレンさんとはもう離れられないだろう

この日から私は恋をした

一日占領（後書き）

はい、とうとう真名が落ちました。まあ当たり前ですね、あれだけ行為を抱けばこうなるのは分かり切ってましたしね。とは言ってもアレンに告白された訳でもなく、告白した訳でもありません。ただ恋をしただけです。これからどうなっていくことやら。まだまだアレンが無自覚で女を落とします。…次は誰でしょうね、楽しみにしてもらえると嬉しいです。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

2-1-A 図書館島探索部発足（前書き）

今回はつなぎのため、いつもよりかなり短めです。

2-1A 図書館島探索部発足

アレン side

ネギ・スプリングフィールドが麻帆良に来て一週間が過ぎた。

真名の報告では、初日を除けば比較的普通に教師をしているとの事。明日菜には魔法がバレているらしいが、どうやら上手く口止めできているらしく騒ぎにはなっていない。後、寮での生活も特に問題はないらしい。…まあ流石に寮での生活はプライバシーの問題もあるし、詳しくなくても良いだろう。

「それでアレン君、ゴゴ元帥達には報告するの？一般人である明日菜に魔法がバレた事や、記憶処理の魔法が明日菜には効かなかった事とか。…何で効かなかったんだろう？不思議だね…」

真名の報告書を一緒に読んでいたリナリーがそう言ってきた。…確かに気になる点は多々あるけど…。

「…いえ、今はまだ報告はしません。少なくとも、ネギ・スプリングフィールド自身が何か行動を起こすまでは報告するつもりはありません」

「明日菜の事は様子見？」

やはり一般人である明日菜が気になる様子のリナリー。

「今は下手に事を荒げるのはマズイでしょう。…これから先、明日

菜が魔法に関わってくるかどうか見極めなければなりません。出来る限りのフォローはするつもりではありますが…」

「…そうだね、今は見守るしかないね」

何とか納得してもらえたようだ。…でも今明日菜に僕達が、魔法関係者だと明かす訳にはいかない。

「……一番厄介なのは、学園側ですね。何故ネギ・スプリングフィールドはこの麻帆良に来たんでしょうか？」

「?…教師をする為じゃないの？」

「…多分違うでしょう。…まだ憶測の域なのでなんとも言えませんが、学園側には少し注意する必要があるでしょう…」

この任務、少し雲行きが怪しくなってきたかな…。

明日菜 side

「ええー!! 次の期末試験で最下位になったクラスは解散〜!?!」

夜、大浴場で一緒に入ってた木乃香が噂話をしてきた。何でも学園長がかなりお怒りのようで、本気で最下位のクラスは解散させるとの事。……流石に万年最下位が響いたかな?

「しかも、特に成績の悪い生徒は留年どころか小学生からやり直し

とか……！」

本乃香に続き、別の噂を聞いたパルがそう言ってきた。……にわかには信じられないけど、もし本当だったら……。……

「ランドセル背負って皆仲良く集団登校です」

「ゆえー、流石にマズインじゃないの……？」

「そんなの嫌ー！」

夕映ちゅんの想像した未来予想図。まき絵も流石に嫌らしい。……私だって嫌だ。ここに揃ってるバカレンジャーの中で一番足引っ張ってるのは私だし……。どうしよう……。

「んー、これは由々しき事態でござるな……」

「アイヤー、今から死ぬ気で勉強しても月曜に間に合わないアル……」

長瀬さんとかーふえも危機感をあらわにしている。もう今日は終わりに近い為、残るは土日で猛勉強しなきゃならない……。でも土日で勉強しても成果がでるかどうか……。

「……仕方ないですね、ここはアレを探すしかないです……」

「夕映！？アレってまさか……！？」

パルが夕映ちゃんのアレに反応する。……アレってなんだろう？

「実は図書館島の深部に、読めば頭が良くなるという魔法の本があ

るらしいです。……まあ魔法の本って言われてますが、大方出来の良い参考書の類だと思うのですがそれを手に入れば成績アップも夢じゃないです」

…魔法の本！？……まあ夕映ちゃんは参考書の類って言ってるし、そんな美味しい話が………あるかも！？

「夕映ってば、アレは単なる都市伝説だよ」

「流石にそんな魔法だなんて存在しないよ」

「アスナはそう言った話、信じへんのやったなあ」

「えっ！？……ええ、そうね……」

いきなり木乃香に呼ばれてビックリしてしまった。でも、魔法使いのネギがいるくらいだしもしかしたら……。

「あ、あのさ、物は試しで探しに行かない？……もしかしたら有るかも知れないし……」

「おや、明日菜さんにしては珍しい……。……良いでしょう、私も一緒に行きますです」

「面白そうでござるな、拙者もご一緒するでござる」

「冒険あるか！？ワタシも行くアルね！」

「行くんやったら、せっちゃんも誘おっと」

「私も行くー！」

「あちゃー、バカレンジャー全員か…。なら私も行こうかな！のどかはどうする？」

「わ、私も行くよ」

どうやらここにいるメンバーは全員参加のようだ。

「なら早速今晚、図書館島に忍び込むです。皆さん、部屋に戻って準備をお願いします」

夕映ちゃんに言われ皆お風呂から出る。魔法の本、…必ず見つけてやるんだから！

2-1-A 図書館島探索部発足（後書き）

次回から図書館島探索に入ります。……アレンドうしよう……。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

図書館島潜入（前書き）

結構アツサリ進んでいきます。……キャラが多くて喋らせるのが大変……orz

図書館島潜入

アレンside

事態は刹那からの電話で動き始めた。

「……………と言う訳でして、アレンさんとリナリーさんも私達と一緒に来て欲しいんですけど……………、ダメ、ですか？」

どうも刹那のクラスメイト達が夜の図書館島に忍び込むらしい。しかも忍び込む理由が、図書館島の深部にあると言われている魔法の本を手に入れる為だとか…。それだけならまだしも、何とネギ・スプリングフィールドまで連れて行くらしい。……………これはかなりヤバイ事態だ。

「……………分かりました。僕とリナリーも一緒に行きます」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！……………正直、私一人では不安でしたので…。真名にも行くか尋ねたんですが、今回は行かないとの事だったので…」

確かに真名はあまりネギ・スプリングフィールドと接触するのは、控えた方が良さだろう。

「図書館島で私もネギ先生を監視出来れば良いんですが、このちゃんもいるのでどうしてもこのちゃんを優先しなければなりませんので…」

「…分かりました。刹那は木乃香の方をお願いします。僕とリナリ

ーでネギ・スプリングフィールドを見ておきますので」

「ありがとうございます。…ではまた後ほど、図書館島で合流しましょう」

そう言って電話を切る。……リナリーにも話して準備しなきゃ。

「あつ、せっちゃん、アレンさん達来たえ？」

「アレ？何でアレンさんとリナリーさんが？」

図書館島に着くと、僕とリナリーに木乃香が気づいて明日菜も何故僕達が来たか不思議に思っている。

「あんなあ、ウチらだけじゃ心もとない思ったから助っ人として呼んだんよお」

「そうだったんだ。…すみません、私達のワガママに付き合ってもらっちゃって…」

「いえ、気にしないでください」

「そうだよ、逆に私達こそ突然来ちゃってゴメンね」

リナリーの言うとおり、僕達は飛び込みで来たようなものだから謝るのはこっちの方だ。

「アスナさん！まだ行きませんか！？…全く、こんな夜に図書館島

に忍び込むだなんて……！……本来はクラス委員長として注意しなければなりません、ネギ先生がお許しになっている以上私が怒る訳にもいきませんし……！早くすませて帰りますわよ！ネギ先生も眠い中来てくださったんです！……ネギ先生、眠くなりましたらどうぞ気軽に私を頼ってくださいね。私がネギ先生を背中に背負いますので……」

「えっと、ば、僕なら大丈夫です。頑張ります」

「ネギくん、今日は一緒に頑張ろうね！」

……眠たそうに目をこするネギ・スプリングフィールド。子供だから仕方ないだろう……。明日菜に文句を言いつつネギ・スプリングフィールドに近づくのは、真名の報告にあったクラス委員長の雪広あやかだろう。……報告通りかなりネギ・スプリングフィールドを溺愛してるな……。まき絵もネギ・スプリングフィールドと一緒にるのが嬉しいのか、先程からはしゃぎまくりだ。……確かこの二人でネギ・スプリングフィールドの争奪戦をしたんだっとな。

「分かってるわよ！……アレンさん、今のがウチのクラスのクラス委員長です……。皆はいいんちよって呼んでます。……いいんちよ！ネギ！ちよっと来て！紹介したい人達がいるから！」

二人を呼ぶ明日菜。いいんちよの方は文句を言いつつも近づいて来た。

「いいんちよ、ネギ。あんた達は初めてだろうから紹介するわよ。……アレン・ウォーカー先輩とリナリー・クロイツェフ先輩。私達の一つ上で、今夜の本探しに協力してくれるの」

「初めまして、アレン・ウォーカーです。……よろしくお願いします、

ネギ先生、いいんちよ」

「初めまして、リナリー・クロイツェフです。よろしく、ネギ先生、いいんちよ」

とりあえず、いいんちよと呼んでみる。

「は、初めまして、ネギ・スプリングフィールドです！えっと、いいんちよさん達のクラスで英語を教えます。…こちらこそよろしくお願いします」

「初めまして、21Aのクラス委員長を務めています雪広あやかです。よろしくお願いしますわ、先輩方」

どうやら気にしないようだ。流石いいんちよ。

「挨拶も終わったならそろそろ行こか？あまり遅おなるのも勘弁やし…」

「このちゃんの言うとおり、あまり遅くなるのもマズイかと…」

「そうですね、往復で約四時間近くは掛かるですからもう出発した方が良いでしょう」

「いやー、なんだか遠足気分アルね」

「そうでござるな。ニンニン」

「ネギ君と一緒になら怖くない、怖くない…」

…個性豊かなメンバーだな…

「ここが図書館島地下三階です。私達中学生が入れるのはここまでは」

抹茶ハチミツを飲みながら案内する夕映。流石図書館島探検部に所属している事もあって、ここまでの案内も手馴れていた。……それにしても、この地下三階から本棚の数がかなり異常な数となっている。…と言うか本棚が道になっている。落ちたら死ぬかな？

「すごい、こんなに本があるだなんて…」

リナリーも呆氣に取られている。

「本当に本だらけなんですね…」

「せっちゃんも初めてやもんな。驚くのも無理はないわなあ」

「見てください、いいinchよさん！珍しい本がたくさんありますよ！？」

「ああ、ネギ先生があんなにはしゃいで……。幸せですわ…」

希少な本を見つけてハイテンションのネギ。本棚から取り出そうと手を伸ばす。

ビュンッ!

「うわっ!？」

何と本の影から矢が飛んできた。：ギリギリで楓が掴んでくれたから良かったが、これではおちおちそこら辺に触る事さえできない。

「言い忘れてましたが、ここから先は罨がたくさん仕掛けられているので気を付けてくださいね？」

「そっ、それを早く言ってくださいな!？危うくネギ先生が怪我をするところでしたわよ!？」

「怖いよー!」

「流石に危な過ぎでしょ…」

夕映の遅い忠告に怒るいいんちよ。まき絵は怖がり明日菜は呆れ果てている。

「ゲームのダンジョンみたいアルね。ワクワクするアルよ」

「しかし、これは子供であるネギ坊主にはキツイのではござらんか？」

楓が最もな事を言う。魔力強化していれば余裕だろうけど…。

「ネギ先生、私がネギ先生を守ってみせますわ!」

「あ、ありがとうございます…。…。ところで皆さんは何で図書館島に？僕、内容聞いていないんですよ…」

まさかの発言。…。なら何で夜の外出を許可したんだろうか。

「あんなあ、ここに読むだけで頭の良くなる魔法の本があるって話なんよお。…それを探しに来た訳なんやわ」

「……ええー！？頭が良くなる魔法の本ー！？」

かなり驚愕しているネギ。…そりゃそうだ。探しているのが魔法の本だと言われれば驚くのも無理はない。

「今度のテストでは最下位を取る訳にはいかないのよ。このまま成績が悪いままだと、大変なことになっちゃうし…」

刹那から聞いていたけど、どうやら本当に成績が悪かったら小学生に逆戻りすると思込んでいるらしい。…。そんな訳ないのに…。

「では再び出発するです。…とどこどころ休憩する場所があるのでそこまで辛くはないかと…。ハルナやのどこかも地上で待機してますし、皆さん頑張りましょう」

「「「「おおー！」「」」」」

本当に元気なクラスだなあ…。

「…やりました。…この先が魔法の本の保管場所です…」

薄汚れた格好で言う夕映。夕映だけじゃなく、皆かなり汚れてしまっている。……ここは本当に図書館なのだろうか？来る途中、明らかに図書館だとは思えない場所を通って来たんだけど……。

「ネギ先生、本当に大丈夫ですか？…なんだかいつもより元気がありませんが…」

「す、すいません…。少し疲れてきちゃって…」

ネギを心配するいいんちよ。…先程ネギの右手首を見た時に黒い線が三本見えた。あれは確か制約の効果のある線だった筈だ。……つまり今ネギは、魔力で身体強化ができずただの十歳の子供と同じ身体能力だ。

「ねえ、アレン君。…どうして魔法を封じてるんだろ？特に問題行動してる訳でも無いのに…」

リナリーが近づいて来て聞いてきた。

「…真名の報告には特に何もありませんでしたし…。これに関しては正直よく分かりません」

「お二人に任せてしまって、申し訳ありません…。何分にも私もこのちゃんに着いてるのが精一杯で、他をフォローするのが難しくて…」

「大丈夫だよ、刹那。ネギや他の皆は私達がフォローするから、刹那は木乃香をお願いね」

「そうですよ、刹那は木乃香の側にいてください。…その方が木乃香も喜びますよ」

落ち込み気味の刹那を励ます。刹那も慣れない状況での護衛だから、かなり神経を使っているだろうし疲れも僕達より溜まってる筈だ。

「着きましたよ、皆さん。…ここが魔法の本の安置室です」

そう言って辿り着いた場所は、周りが本棚で囲まれていて部屋の奥には石像が二体何かを護るかのように立っている。

「す、すっごーい!!」

「あいやー、これは驚きアルね!」

「これ程の物とは、いやはや何とも言葉が見つからないでござるな」

「やりましたわ、ネギ先生! ついにたどり着きましたわ!」

皆さまざまな反応だ。

「あっ!? アレは伝説のメルキセデクの書ですよ!? …すごい! 僕も見るのは初めてです!」

「ネギ君ホント!?」

「はいっ! アレさえあれば頭が良くなるなんて簡単ですよ!」

「物知りやなあ」

ネギの言葉に僕とリナリーと刹那は少し頭が痛くなる……。……まあ今は仕方ないか。

「一番のりアルー！」

「あっ！くーふえずるいー！？」

「ほらせっちゃん、ウチらも行こ？」

「あっ、今行きます」

「…行こっか」

「…行きましょうか」

皆でメルキセデクの書に近づいて行く。…この両脇にいる石像が気になるな…。そう思っていると突然、足場が開き出した。

「キャー！」

「いたっ！」

「わぁ！」

すぐ下にあった床に落ちてしまう。床には何やら文字が書かれている…。……ツイスターゲーム？しかも英単語の？

「コレって、……ツイスターゲーム、だよね…？」

「フオフオフオ…」

はて？ 上の方から声が聞こえた気が…？

「この本が欲しくば、わしの問題に答えるのじゃー！ フオフオフオ」

書の両脇にいた石像が動き出した。…まさか動く石像ゴーレムだったとは。
…それに今の声は…。

「ねえ、アレン君。今の声ってさ、……………学園長？」

「……………だと思いますよ」

一体何をしてるんだろうか、学園長は…？

「第一問、D I F F I C U L Tの日本語訳は？」

「何ソレー！？」

「いきなり訳わかんないよー！？」

悲鳴にも似た声を出す明日菜達。

「皆落ち着いてください！ 取り敢えず今の英単語を訳して、足元にある文字を踏んでください！ …ちなみにD I F F I C U L TはE A S Yの反対の意味です。つまり簡単な反対です」

流石にそのまま教えるのはダメだろうから、遠回しに教えてみる。

「む」

「ず」

「い」

「これでどう!?!」

…難しいじゃなく、難い……。大丈夫かな?

「難い……。まあ正解じゃ…」

どうやら大丈夫のようだ。…でも一問だけとは思えないな…。

「では第二問、CUT」

「えー!? 一問だけじゃないのー!?!」

「くっ、こうなったらひたすら答えるわよ!」

「皆頑張る!」

「が、頑張ってください」

「アスナさん! ネギ先生の為にも頑張るんですよ!」

「皆さん、頑張ってください!」

「……どうする、アレン君?」

「今は様子見ですね…。流石に学園長も危害を加えるとは思いません」

「なので…」

「取り敢えずは静観してみる。」

「あつ、アレン君は見ちゃダメだよ。…スカートとかめくれちゃうしね…」

「……アレンさんのエッチ」

「アレンさん……」

「…見ませんから…」

ツイスターゲームをしている方とは逆の方を向く。

「……ウチらの見せたるか？」

「このちゃん!？」

「ちょっ! 木乃香!？」

「……遠慮しときます」

いきなりの爆弾発言に真っ赤な顔で驚く刹那とリナリ…。……この場に真名がいなくて良かった…。

「では最後の問題じゃ。DISHの日本語訳は？」

「ディッシュって何アル…?」

「アレですよ！ほら、食べるやつです！食器の……」

「料理は何に盛られています！？」

ネギが頑張って教えている。それをいいんちよもフォローしている。

「分かった！おさらね！」

「おさらね！任せて！」

「お」

「さ」

「る」

……おさる？明日菜とまき絵が、るを同時に踏んだ。

「…それは違うでござるよ…」

「アスナさん！！何をしているんですか！？」

「フオフオフオ、ハズレじゃー」

学園長ゴーレム二体が持つてゐる武器を振り下ろしてくる。…しかし狙ってきたのは足場だった為、僕やリナリーも反応が少し遅れてしまった。見れば木乃香を抱きしめながら落下に備える刹那が。あれなら木乃香は大丈夫だろう。

「うわぁーん！アスナのおさるー！」

「ごめーん！！」

「いやぁぁぁぁー！」

落下しながら嘆く明日菜達。……まぁ学園長がらみならこのまま落下しても平気だろう。……ネギはいいんちょに抱きしめられているし、……リナリーがものすごくこちらをチラチラ見ている。……やれと？

「……リナリー」

「……ありがと、アレン君」

ギュッとリナリーを抱きしめる。……お互い顔が真っ赤だ。……役得かな？

こうして僕達は、更に地下へと落ちて行く。

図書館島潜入（後書き）

と言う訳で次回は地底図書室からの脱出です。まあまたアツサリ終わらせると思いますので、そのつもりでお願いします。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

幻の地底図書館くそして脱出へく(前書き)

少し遅くなりました。今回で図書館島での探検は終わりです。

幻の地底図書室へそして脱出へ

アレンside

チャプチャプと波の音が聞こえる…。近くに滝もあるのか、激しい水音も聞こえてくる。

「ん……、ここは…?」

「……ここ、……どこ?」

どうやら皆落下中に、気を失ってしまったようだ。

「……えっと、確かあの石像に足場を壊されて落ちたんだよね? 私達…」

皆が目を覚ます中、明日菜が何故落ちたかを思い出していた。……学園長も何を考えていたのか…。

「………なにこころ!!」

明日菜が叫ぶのも仕方ない。ここは図書館の地下の筈だ。…なのにここは天井からは光が漏れていたり、辺りの壁は光っていたり周りは水に囲まれていて本棚も浸水している。遠くには古びた館も見える。

「……ここはまさか、幻の地底図書室!?!」

なにやら思い当たる節のある夕映。

「それって何なん？」

「…私も聞いた話ですが、図書館島のどこかに存在すると言われている図書室の事です。そこには数々の貴重な本に溢れていて、本好きにとってはまさに楽園と言われている図書室……」

「……図書室にしては広いですわね……」

広いですむ話じゃないとは思うけど……。…水に浸かっている本を手にとってみると、不思議な事に本は濡れてもいなければ痛んでもない。……確かにこれは本好きには堪らない環境だ。

「まあここがどこかは大体分かったアルけど、……どうやって帰るアルか？」

「……どこかに出口があるでござるのか？」

古菲と楓が最もな事を言う。…あの学園長の事だ。また何かしでかしそうだ。

「地上にはパルとのどかがありますから、二人が救援を呼んでくれるとは思いますが……」

「…取り敢えず皆さん、今はあれこれ考えても仕方ありません。でするので、これよりいくつかの班に別れて行動するようにしましょう。……その前に明日菜、こっちへ」

先程から左の二の腕を抑えている明日菜を呼ぶ。

「…軽い打撲ですね。手当はできますけど、あまり無茶しないでくださいね?」

「あ、ありがとうございます…」

夕映が持っていた救急箱から包帯をもらい、手当する。あまり無茶しないかぎり、悪化はしないだろう。

「…では班決めます。まずは出口を探す班は僕とリナリーと木乃香と刹那。次に救援が来るまでの間の食料探しを、古菲と楓とまき絵と明日菜でお願いします。最後はここに残って野営の準備をする班を、ネギ先生といいんちよと夕映で。三人だけですから、後から戻ってきた班も手伝うようにしましょう。…では皆さん、くれぐれも一人での行動をしないようにして下さいね。…解散!」

そう言うのと皆行動する。…僕達も近くを搜索してみる事に。

「ほんまアレンさんは頼りになるなあ。アレンさんの落ち着き具合見とると、ウチらも落ち着いとれるわあ」

「そうですね。流石アレンさんです」

「ふふっ、頼りにされてるね」

…まあこの程度なら普通に対処出来るようにされたからな…。

「…そこまで対した事をしたつもりはありませんよ…。…それよりも今は出口を探しましょう」

「そやなあ、流石にずっとここにおる訳にはいかんしなあ」

「そもそも私達は、テスト勉強の為に図書館島に来たんですから…」

「…結局は手に入らなかったけどね…」

もし手に入れていたら、学園長はどうするつもりだったんだろう？

「……探し始めてから大分時間が経ちましたね…。一度皆の所に戻りましょうか」

「そうですね…。やはり、すぐには見つかりませんでしたね…」

刹那の言う通り、近くを歩き回ったが出口らしきものを見つける事はできなかった。

「また休んでから探そうよ。焦っても余計に疲れるだけだしね」

「リナリーさんの言う通りや。それに明日は学校休みやし、一日くらいここにいても構わへんやろお」

確かに焦っても仕方がない。なら今は休んで次に備えよう。

「なら戻りましょうか。多分、食料を探しに行った楓達も戻って来てるかもしれませんし」

「「はい！」」

元気の良い事で…。

「ただいま戻りました」

「あっ、お帰りなさい」

「お帰りアルよ」

「どうやら皆さん、戻ってきたようですわね」

いいんちよの言葉通り、僕達の班が最後だったようだ。

「ならアレンさん達が帰ってきたところで、食事にするでござる」

「森の中にいろんな木の実があっただよ〜！」

「他にも食べれそうなキノコとかも、長瀬さんが見つけてくれたし」

「早く食べるアルね。もう腹ペコアル」

「ご苦労様でした。…じゃあ皆で頂きましょう」

「」「」「いただきます！」「」「」

皆思い思いに食べていく。…しかし、本当にここは何なんだろうか？何故食べれる木の実が普通に実っているんだろうか？…それに僅かだけど、魔力の気配も感じられる…。少し警戒しておくか。

「…アレン君、今は休もう？…いくらアレン君でも、疲れちゃうよ？」

「……バレてましたか……」

どうやらリナリーにはバレてたようだ。……そんなに分かりやすくてたかな？

「うん……。何だか思いつめた顔してたから……」

どうやら顔に出てたようだ。……次からは気をつけよう。

「……敵いませんね」

「「「「「ごちそうさまでした!!」」」」」

流石に取ってきた食料を全部食べる訳にはいかないので、ある程度は残して食事を終えた。

「では今から少しばかり自由時間にしましょうか。……皆さんも疲れてるでしょうから、どうぞ息抜きをしてきてください。……ただし！絶対に一人での行動はしないでください！最低でも二人一組で行動してくださいね！」

皆を労う形での休みだが、それでも一人での行動はしないように呼びかける。こんな場所で迷子になったら、最悪死に繋がるかもしれない……。

「アレンさんって、本当に素晴らしい人ですね！……それに引き換え先生である僕は……」

何やらネギが落ち込んでしまった。…でもそう自虐的になる必要もないだろうに。

「何を言ってるんですか。先生だからと言って、全部完璧にする必要は無いんですよ？ましてやネギ先生はまだ子供なんですから、今はまだ焦る事はありません。これから少しずつ、覚えていきましよう」

「……アレンさん……。…はいっ！頑張ります！」

「その調子ですわ、ネギ先生！私も微力ながらお手伝いさせていただきますわ！」

僕の言った事の意味を理解したネギは、先程の落ち込みから一変してやる気に満ち溢れるようになった。

「それでは僕は、他の人達を見えますので二人はここにいてください。ある程度見て回ってきたら、戻ってきますので」

「分かりました！任せてください！」

「ネギ先生は私に任せてくださいな！」

いいんちよの若干不安な言葉を受け流しながらその場を離れる。…
……いいんちよ…。

「本に囲まれてあったかくて、ほんま楽園やなあ」

「ずっとここにいたいですね」

木乃香と夕映は本に夢中みたいだ。：流石にずっとはいたくないな…。

「あ、アレンさん。見回りですか？」

「ええ。皆の様子を少し…。刹那はなにを？」

「私は座禅でもしようかと。このちゃんみたいに、本ばかり読むのは私にはちよつと…」

刹那らしいと言えbraしいが…。

「そうですか。でもたまには本も読みましょうね」

「うっ…、ぜ、善処します…」

そこまで嫌なのか…。

さて他の人達は…。

「アレンさくん！こっちアル！」

おや？古菲の声が？茂みの先から聞こえたけど…。

「わわっ！ちよつ、ちよつとくーふえ！今アレンさん呼んじゃダメでしょ！？…すみません、アレンさん！今は来ちゃダメです！」

「…えっ？」

何やら慌てた様子で叫ぶ明日菜。何故か待てと言われたけど、時すでに遅し。茂みを掻き分け、古菲達のいる場所へと来てしまった。

「……………」

「……………。ゴメンなさい！」

「……アレン君のエッチ!!」

「おおー！ホントに覗きに来たアルよ！ワタシの裸見たいアルか！？」

「おやおや、これは恥ずかしいでござるな」

「そう言いながら堂々と見せないの…！」

「ありゃー、ネギ君にも見せたかったな」

心臓がバクバク激しく脈打っている。……古菲にしてやられた…。まさか、水浴びをしているだなんて…。

「……見たの？」

背中からリナリーが声をかけてくる。…正直に答えなければ、……殺されそうだ。

「……………少しだけ」

「……………バカ」

返す言葉ありません。

「いやー、これはアレンさんに責任取ってもらうアルよ」

「こらくーふえ！元はと言えば、あんたが悪いんでしょうが！」

「拙者は別に構わないでござるよ。ニンニン」

「私も別に構わないよう。気にしない、気にしない」

そう言いながら皆着替えを終わらせる。まき絵は普段通りだが、後の人達は皆顔が若干赤い。……そりゃそうだね。裸見られた訳だし。

「えっと、本当に申し訳ありませんでした」

「……………別に見たいならまた……見せて……………」

「アイヤー、こっちこそすまないアルよ。つい出来心だたあるね」

「私も見られたのは恥ずかしかったけど、……嫌じゃなかったの……」

「拙者も気にしないでござるよ」

「そうそう、そんなに謝らなくても良いよー」

リナリーの声が小さかった為、よく聞こえなかったけどどうやら皆

許してくれるようだ。

「…ありがとうございます」

頭を下げてお礼を言う。しかし次の瞬間。

「キャー!!」

「!?!この声は、いいんちょ!?!」

いいんちょの叫び声が辺りに響く。一体何が!

「た、大変です!あの石像がまた現れました!その石像にいいんちょが捕まってしまいました!」

「くそっ!」

「あっ!アレン君!」

「ワタシ達も行くアルよ!」

「「「おおー!」」」

「いいんちょさんを離せ!!」

「いいんちょ!」

「くそっ!まさかこんなところにまで現れるなんて…!」

野営の場所まで来ると、いいんちよを片手で掴んでいるゴーレムが。少し離れたところで、ネギと刹那と木乃香がいいんちよを助けようとしていた。

「リナリー！」

「任せて！」

そう言っただけはゴーレムに飛び蹴りをする。飛び蹴りに怯んで、ゴーレムはいいんちよを手放す。落下する前にリナリーがいいんちよをキャッチして皆のどこまで下がる。僕も飛び蹴りの反動を差は利用して後ろへと間合いを取る。

「フオフオフオ、ここから出す訳にはいかんのじゃ。観念するのじゃな。それに歩いて帰るには。迷宮を三日は歩かなければならんのじゃ」

高笑いしながら話す学園長。……かなりイラつときた。

「三日もかかったら、テストに間に合わないアル！」

「……とにかく今は逃げましょう！もしかしたら他にも出口があるかもしれません！」

流星にここで戦う訳にもいかない。皆に被害が及んでしまう。

「フオフオフオ、無駄じゃ。出口はない」

「……………！皆さん、石像の首のところを見てください！」

逃げながら指差す夕映。言われてゴーレムの首のところを見ると、あの魔法の書があった。……おそらくゴーレムと一緒に落ちたんだろう。

「ならその本、いただいちゃうよー！」

まき絵がリボンを巧みに操り、見事魔法の書を手に入れる。……かなりの技術だな。

「流石です、まき絵さん！……では逃げるです！」

「ま、待つじゃー！本を返すじゃー！」

本を取られたのに焦る学園長。…学園長のあの慌てよう…。

「あのゴーレムの慌てぶりから、おそらく出口は近くにある筈です！皆、頑張ってください！」

「それはなんのじゃ！諦めて捕まるのじゃー！」

先程よりもスピードを上げて追ってくるゴーレム。このまま進むと滝で行き止まりになってしまう。

「……見つけました！滝の裏側に人工で作られた扉が！しかもご丁寧に非常口とまで…」

先を進んでいた夕映が出口を見つける。滝の裏側とは盲点だったな。

「早く中へ！」

「ま、待つんじゃない！」

しつこく追ってくるゴーレム。ここまで追ってくるとは…。

「な、何これ！？何で扉に問題が！？」

何と扉には問題が書かれている。どうやら正解しないと先に進めないみたいだ。ならば…！

「ここは僕が足止めます！皆は先に進んでください！すぐに後を追いますから！」

ゴーレムを足止めして、皆を先に進ませる。

「私も残る！アレン君一人にはさせない！」

「リナリー！？」

リナリーまでもが残ると言い始めた。説得したいけど、今はそんな余裕がない。

「……リナリーは援護を！」

「分かった！」

リナリーと二人でゴーレムと向き合う。後ろの方では皆が必死に問題を解いていた。

「そこを退くのじゃー！」

「退く訳には、いきません！」

降り下ろせれたゴーレムの右腕を避けながら、ゴーレムの足元へと近づく。

「はあああっ！」

素の身体能力だけで、ゴーレムの足を蹴る。ゴーレムも突然の衝撃で膝をつく。

「次はこっちょよ！」

反対側の足をリナリーが蹴り飛ばす。リナリーはこっそりと武装錬金をし、シルバーブーツを装備している。これにより、ゴーレムは完全にバランスを崩し仰向けに倒れる。

「な、何じゃとー！？」

これには学園長も驚いているようだ。……そりゃそうだろう。まさか僕達が、ここまで戦えるとは思っていなかったんだろう。

「アレン君、今の内に！」

ゴーレムが起き上がる前に、大分先に進んだ皆と合流するべく走り出す。どうやらかなり上まで登っているようだ。

「急ぎましょう！そろそろ起き上がる頃です！」

上へと続く螺旋階段を登る。ゴーレムも起き上がり、僕達を追って

きた。

「逃がす訳にはいかんのじゃー！」

「アレンさん！リナリーさん！早くこちらへ！」

刹那が呼びかける。どうやら階段の一番上まで登ったようだ。

「このエレベーターで地上まで行けるらしいんよ！」

木乃香達がすでにエレベーターに乗って待機している。僕とリナリーもようやく辿り着き、エレベーターに乗り込む。

ブー！

……重量オーバー？

「「「いやあああ！」」「」」」

女性陣が悲鳴をあげる。……体重を気にする年頃なんだな。

「アスナさん！一体何キロなんですの！？」

「なによ！私はまだ大丈夫よ！そういういいんちよこそ、重いんじゃないの！？」

「なんや、まだスペースが空いとるのに根性のないエレベーターやなあ」

明日菜といいんちよが言い争っている。確かにまだ余裕があるのに

動かないなんて……。

「フオフオフオ、追い詰めたぞー！」

そうこうしていると、ゴーレムがすぐ近くまで来ていた。…一か八かだ！

「…これなら、どうだー！」

まき絵が持っていた魔法の書を、ゴーレムに投げつける。

「フオー!?」

見事命中。それと同時に。

ピンポーン。

その音とともに、エレベーターが動き出す。やはりあの書は持ち出し禁止だったか。

「あゝ、魔法の本が」

「でもああするしか、他になかったです」

「そうアル、以外とあの本重かったアルし」

まき絵が本を惜しんでいたが、他の皆は無事逃げれた事を喜んでい

チーン！

どうやら地上に着いたようだ。

「地上だー！」

「外に出れたー！」

「のどかとパルに連絡するです」

「無事で良かったなあ、せっちゃん」

「そうですね、このちゃん」

「大丈夫ですか、ネギ先生？」

「ええ、僕は大丈夫ですよ」

皆地上に帰って来れて、喜んでいるようだ。

「でもテスト勉強どうするアル？」

「そうでござるな…。今日を入れて後二日しか勉強する時間はないでござるよ」

「うわあーん！どうしよー！」

今度はテスト勉強をどうするか迷う面々。

「あの、良かったら一緒に勉強しますか？」

「そうだね。私達が勉強見てあげようか？」

「でもそうすると、アレンさんとリナリーさんが…」

明日菜の言葉に頷く一同。……そう言えば言ってなかったかな。

「大丈夫ですよ。僕とリナリーは学年トップですから、さほど困りませんし」

瞬間、世界が止まる。リナリーは苦笑いをしているけど。……あれ？どうしたんだろ？

「……こんな身近に天才が……」

「始めから頼ってれば良かたアル…」

「学年トップクラスって……」

なにやら落ち込みを見せる一同。

「えっと、じゃあとりあえずは皆帰ってからまた後で集まりましよう」

「場所はまた連絡するからね」

「」「」「はい…」「」「」

こうして図書館島での波乱の一夜が幕を降ろした。

おまけ

テストは無事終わり、明日菜達も平均点を取ることができた。どうやら、このテストの結果でネギが正式な教師になるかどうかが決まるようだった。テストの結果は良かった為、来年度からネギは正式な教師として麻帆良にいることとなった。ネギもその事を喜んでいたので、まあ良しとしよう。

「それはそうとアレンさん、リナリーさん達の裸を見たそうじゃないか？……私も見せてあげるよ」

「誰から聞いたんですかー！？って本当に脱がないでください！何で下から脱ぐんですか！？…スカートもめくらないで良いですから、早く下着を履いてください！！」

ゴゴ元帥、真名のセクハラに負けそうです…。

幻の地底図書館へそして脱出へ（後書き）

真名はやはり真名でしたねwという訳で図書館島も終わりましたので、次回から2〜3話くらい春休みの話を書きたいと思いますので、よろしくお願いします。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

木乃香と刹那とお見合いと（前書き）

すいません、また遅くなりました。ちょっとリアルがドタバタしてしまっ

て。今回から春休みです。まあ2〜3話で終わらせようかなって考えます。

木乃香と刹那とお見合いと

木乃香 side

期末試験も終わり、学校も春休みに入っとる。そんな春休みを麻帆良で過ごしとるウチに、おじいちゃんから連絡があった。何や学園長室まで来てほしいとの事やったけど、……またアレやろなあ。

「どうしました？このちゃん」

「せっちゃん……。…実はな、おじいちゃんからまた見合いを進められたんよ。何度も嫌や言うとのに……」

せっちゃんと外を散歩しとるっていうのに、気分は沈んだまま。せっちゃんにもいらん心配させてまった……。

「見合い……ですか。正直、まだ早いと思うんですけどね……」

「せやろー！せっちゃんもそう思うよな！ウチもまだ子供やし、結婚なんてまだ考えれへんわあ。好きな人も自分で探したいし、……おじいちゃんは強引すぎや」

ついついせっちゃんに愚痴ってしまう。でもせっちゃんも真剣に聞いてくれとって、それがウチは嬉しく思う。

「学園長にも本当に困ったものですね……」

「ほんまになあ……」

二人揃って溜息を吐く。何とかならんかな…。

「…そういやそろそろ、おじいちゃんのところかなあかんのやった」

「そうですか…。…でしたら、私もご一緒しても良いですか？」

ウチと一緒に、おじいちゃんのとこに行きたい言い出すせつちゃん。…：せつちゃんにまで見合いを進めてきたら、トンカチで頭の形を変わるまで殴り続けてやる…。

「もちろん良えよ。なら一緒に行こか？」

「はいっ！」

元気よお返事するせつちゃん。…ウチもせつちゃんと一緒におれて嬉しいわあ。

「フオフオフオ、わざわざすまんのお。今日は刹那君も一緒かな」

「別に構わへんやろ？」

「もちろんじゃ。わしも前から刹那君には一言、お礼が言いたかったのな。…いつも孫の木乃香と仲良くしてくれて、ありがとう。これからも木乃香と仲良くしてやってはくれんかの？」

「勿体無い御言葉。このちゃんは私の大事な友達です。お礼を言われるような事はしてません。…私はこれからも、このちゃんとずっ

と一緒にいます」

せっちゃんが力強くそう言ってくれた。……何やプロポーズみたいで、恥ずかしいなあ。

「フオフオフオ、頼もしい言葉じゃ。…さて、では本題に入ろうかの。木乃香、見合いをしてみんか？」

「嫌や」

バツサリと即答する。…これで何度目や、もういい加減にしてえなあ。

「もう少し悩んでくれてもいいじゃろうに…。しかしの、木乃香。今回の相手は今までのとは一味違っておるんじゃよ」

「見合い相手に、一味も二味も関係ないやろ」

「…学園長、あまり無理にお見合いを進めるのもどうかと思います
が…」

せっちゃんも援護してくれとる。一体全体、どう違うと言うんやるか？

「とりあえず写真を見してみるのじゃ。きっと、氣にいる筈じゃよ。
…刹那君も氣にいるかもしれんの。フオフオフオ」

せっちゃんも氣にいる？…一体誰やろ？

「……………これほんまか？」

「……………」

ついつい写真の人物を疑ってしまう。まさかこの人やなんて…。…
せっちゃんも顔赤うして黙ってまうし。てか何を想像しとるんやろ？

「もちろん本当じゃとも。その写真の人物が、今回の木乃香の見合
い相手じゃ。…良かったら刹那君も、木乃香と一緒に嫁ぐかね？」

「「えっ!？」」

せっちゃんもウチと一緒に嫁ぐかやと!?!重婚になってまうやない
か!?!

「が、学園長!流石にそれは無理なんじゃ…」

「フオフオフオ、孫とその親友の頼みなら何とでもしてみせようじ
ゃないか」

無駄にカッコいい事を言うおじいちゃん。何とかしてみるって言わ
れてもなあ…。……………少し期待してまうやんか。

「ちなみに本人はこの事をどう思っとるんや？」

「それなんじゃが……。実は本人には知らされていないんじゃよ」

はっ?知らされてない?

「ど、どう言う事ですか!?!」

「せや、本人が知らんのに勝手に見合いを進めたら大問題やて」

お見合いなんやから、本人の同意がなけりや意味がないやろ。

「うむ。それはそうなんじゃが、何分にも向こうの代理が本人にはこちらから説得すると言っておってな。何とも言えんのじゃ…」

「なんやそら…。それに代理の人って誰なん？本当に説得とかできるんか？」

「見合い相手とその代理の人物は、昔からの仲らしく必ず説得してみせるとの事じゃ」

「はあ、昔からの仲ですか…」

またその人も、えらい自信やなあ。もし本人に断られたら、どないするつもりなんやろ？

「それでどうじゃ？見合い、してみんか？」

「……………考えとく」

「このちゃん!？」

ウチの返事にせっちゃんが驚いとる。…まあ考えるだけはタダやろ。

「フオフオフオ、そうかそうか。…刹那君はどうじゃ？木乃香と一緒に見合いをしてみんか？」

「わ、私は……………」

「せっちゃん…」

流石にこればかりはせっちゃんが自分で考えなあかん事や。

「……………前向きに考えておきます」

「フオフオフオ、分かったぞ。なら先方にも、そのように伝えておくわい」

「分かったえ。…なら用も終わった事やし、ウチらは帰るで」

「すまんがもう一つだけ、…先方に二人の見合い用の写真を送りたいんじやが、着替えてもう一度来てくれんかの？」

まあそのくらいなら…。

「なら着替えてくるわ。せっちゃんの格好はどうする？ウチの貸せば良え？」

「そうしてもらえるかの」

なら一旦ウチの部屋に行けば良えな。

「ならせっちゃん、行こか」

「はい」

「……本当に大丈夫でしょうか？」

「だいじょくぶや！ウチが保証したる！」

着物姿に自信が持てへんせつちゃん。えらい似合っとなるのに、部屋をでてからずっとこんな調子や。これじゃ写真撮る時に、思いっきり緊張してまいそうやな……。どないしようか……。

「……あれっ？…なあせつちゃん、アレってもしかしてアレンさんちゃう？」

「えっ!？」

遠くからでも分かる、あの後ろ姿。間違いなくアレンさんや。

「!…なあせつちゃん、折角やでアレンさんにウチらの格好見てもらわへん？」

「こ、このちゃん!？ほんまにか!？ウチ恥ずかしいんやけど…」

そんな弱気じゃあかんえ？てか喋り方が元に戻っとるえ？

「良えから良えから。おーい！アレンさーん！」

振り向くアレンさんに近づくウチとせつちゃん。せつちゃんは未だに恥ずかしがって、俯いたままだ。

「……?……木乃香と刹那？」

「何で今悩んだん!？」

即答してくれるもんやと思ったのに…。

「す、すいません…。その、いつもの二人とは全然違う服装でしたので」

「そんなもなあ…。まあそれは良えとして、アレンさん今暇ですか？暇ならちよつとウチらに付き合ってくれへん？」

「ええ、散歩してただけですので良いですよ。……刹那？先程からどうしました？俯いたりして？」

「えっ!？あの、その、……変、じゃないですか？」

「?ええ。とても良く似合ってますよ」

まだ自分の着物姿に不安を感じていたせつちゃんはアレンさんに笑顔で似合っとなるって言うてもろうた。それを聞いたせつちゃんもようやく顔を上げて、笑顔になった。

「ならウチはどうです?似合ってます?」

「木乃香も似合ってますよ。木乃香も刹那もとても綺麗ですし、可愛いですよ」

アレンさんが嬉しい事を言ってくれる。…照れるなあ。

「ありがとなあ」

「あ、ありがとう、ございます」

せっちゃんも褒められて赤うなっとなる。…ウチも赤うなっとなるけど。

「それでどうして、そんな格好を？何かあるんですか？」

ウチらが何で着物姿か気になるアレンさん。……まあバレンように言うか。

「実はな、これからお見合い用の写真を撮りに行くんや。もちろん、せっちゃんも一緒にや」

「お見合い、ですか。……二人とも結婚するんですか？」

気が早いアレンさん。…嫌やわあ、そんなにウチらの事を…。……ふふっ。

「まだ写真だけです。お見合いについては考えとる最中です」

「そうなんですか。でもまだ中学生でお見合いだなんて、少し早い気がしますけど…」

「まあそうなんやけどな、実はウチのおじいちゃんがこのお見合いを進めてきたんよ。んで、ウチとせっちゃんにお見合いしんかってウチも最初は乗り気じゃなかったけど、まああんまりワガママ言うのもおじいちゃんに悪いから今回だけ考えようかなって」

嘘は言ってへん。…ぼかしてはおるけど。

「なるほど、学園長が…。でも刹那もお見合いだなんて、正直以外ですね」

やっぱりそう思うわなあ。

「……私も本当はするつもりはありませんでしたが、………相手を見て少し気が変わりました、考えてみようかなって」

まさかせっちゃんにもお見合いさせると思ってへんかったし、せっちゃんもそのつもりはあらへんかったし。

「ちなみに、ウチの相手もせっちゃんと同じ人やで」

「一人に対して二人ですか。でも結婚できるのは、どちらか一人ですけど…」

「まあそうなんやけどな。でもまだ考えとるだけやし、先の事は分かりまへんわあ」

なんせ、相手はこの事を知らんのやから。……だからこんなに余裕にしとるんやろうけど。

「ですね。そう簡単に決めれる事じゃありませんからね。お互いの為にも、焦らず考えた方が良いでしょう」

「……ならアレンさんはどうします？もし自分にお見合いの話がきたら」

たまらず聞いてまった。……だって知りたいやん。

「僕ですか？………分かりません。今はまだ考えません」

「今はって事は、今じゃなければ良いんですか？」

「……どうでしょう？」

首を傾げて悩むアレンさん。まあアレンさんもいつかはするつもりなのがあったただけでも良えかな。

「そう言えば、時間大丈夫ですか？結構話し込んでしまいましたけど…」

言われて時計を見る。やばっ、もうこんな時間や！早よ行かな！

「ほんまや、もう行かなあかん！…話に付き合ってもらってありがとうございました。…またウチらの写真撮ったら、アレンさんに見せてあげますわ」

「ははっ、楽しみにしておきますね」

なら楽しみにしといてもらおうかな。なんせ、……なあ？

「ならアレンさん、また」

「ではアレンさん。ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。二人の着物姿見れて、嬉しかったです」

さりげなく嬉しい事を言うてくれるアレンさん。もう、ほんま罪な人やわあ…。

写真、楽しみにしといてな。……旦那様。

木乃香と刹那とお見合いと（後書き）

最初は木乃香と刹那でした。まあお見合いネタはやりたかったのでやりました。ついでに刹那もお見合いさせました。アレンさんには終始内緒でしたが、果たしてアレンさんが知ったらどうなることやらw

要望があれば続きの話も書こうと考えております。なので、希望する方は感想にてお願いします。

次回は……誰にしようかな？

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

教師達との交流（前書き）

最近更新が遅くて申し訳ないです。真面目にリアルが忙しく、なかなか書く事ができません。しかも、書いてもクオリティが低いというこのダメさ加減。……どうか皆様の広い心で許してもらえないでしょうか？

教師達との交流

シャークテイ side

「ではこれより、第一回交流会を始めたいと思います」

パチパチパチパチ。

あまり捻りのないネーミングだが、あまり凝る必要もないだろう。

「いやあ、嬉しいな。前からいろんな話をしたいとは思ってたんだけど、なかなか時間が取れなくて…」

「高畑先生は忙しいですからね」

何とか今日の交流会に参加する事ができた高畑先生。余程楽しみにしていたのだろう。

「今日は存分に話しましょうよ。私も聞きたい事がありますし」

葛葉先生も楽しみだったようだ。：目が怪しく光っているのは、気のせいだろうか？

「二人共、あまり迷惑かけるなよ？」

神多羅木先生が二人に釘を刺す。相変わらず落ち着いてる人だな。

「僕の話で良ければ、いくらでもしますけど…」

今日の主役でもあるアレンさんが、興奮気味の高畑先生と葛葉先生にそう言う。

「ははっ、ごめんね。つい、はしゃいでしまっただけ…」

「恥ずかしいところを見せてしまい、すみませんでした…」

それでも笑顔の高畑先生に対して、顔を赤くしている葛葉先生。

「いえ、気にしないで良いですよ。…でもどんな話が聞きたいんですか？」

「そうだね、…白の教会は、新旧どちらの世界でも有名だけど何故か誰一人として、立派な魔法使いになろうとはしないけど、これは何故なのかな？」

魔法使いなら誰もが目指す立派な魔法使い。しかし、白の教会の人達は立派な魔法使いになる為に人助けをしている訳ではないらしい。確かに気になる。

「そうですね、…自己満足ですかね。立派な魔法使いになりたいからじゃなくて、自分達が人々を助けたいと考えている人達ばかりですのだから」

「それは立派な魔法使いになっても、できる事じゃないのかな？」

「…誰もが立派な魔法使いを目指している訳じゃないんです。中には魔法の詠唱ができない人もいます。…そういう人も、白の教会で人々を救ったりしています」

呪文の詠唱ができない。それは魔法使いにとっては致命的な事だ。

「…なるほど、呪文の詠唱が……。ちなみに、アレン君は魔法が使えるのかい？」

「すいません、僕は詠唱どころか、魔法が使えないんです…。ですが、魔力を物に込めたりする事はできるので、僕は符を扱ったりしています」

「符かい？他の魔法具は使ったりは？」

「扱える事はできるんですが、クロス神父から徹底して教えてもらったのが符なんです。なので使い慣れてる符を多用しています」

以外と符を多用する魔法使いも存在している。特に転移符などが人気で、性能も良いほど符の値段も高くなっている。

「ならアレン君は、後衛としてなら戦闘もできるんですか？」

「一応、前衛後衛どちらでも戦えます。符での近接戦闘も身につけているので、時と場合によっては前衛でも戦います」

葛葉先生の疑問に平然と答えるアレンさん。…符での近接戦闘なんて、かなり器用な戦い方をするんですね。

「符での近接戦闘！？本当ですか！？」

「え、ええ。符での戦い方も、ある程度はクロス神父から教わったので…」

葛葉先生が符での近接戦闘に驚いている。…器用とかそういう問題じゃなかったんですね…。

「ですが、符は大抵後衛用が多くて、あまり近接戦闘用の符は作られてはいない筈です」

「えっと、使う符は全部自作なんです。なので近接戦闘用の符は、ほとんどオリジナルなんです」

符を自作しているだなんて…。符は作るのが難しいと言われている為、数も限られてしまいが自分で作っているなら数は問題じゃない。

「……貴方は本当に、人を驚かせるのが得意ですね…。オリジナルの符だなんて、かなりの技術が必要ですょ？それを平然とやってのけるとは……」

「最初は失敗ばかりでしたが、とにかく数をこなしましたね。……その度に苦労しましたが……」

何かを思い出したのか、いきなり沈み出すアレンさん。…最初の頃に何があったんだろう？

「まあ若い内に失敗を恐れていては、先には進めんな。ある意味、良かったんじゃないか？」

「……そう、ですね。今はそう思えます」

神多羅木先生の言葉に頷くアレンさん。

「……もし良かったら、アレン君の作った符を少し譲ってもらえないかな？ 実は僕も詠唱ができなくてね……。無詠唱でなら魔法も使えるんだけど、いかんせん防御の方はあまり得意じゃなくてね。だから防御の符をいくつかもらいたいんだけど……。あ、もちろんお金も払うから」

「……できれば私ももらえませんか？ 補助用の符をいくつか売ってもらえたら嬉しいんですが……」

「俺も入り用になったら買わせてもらいたいな」

「私は後衛ですので、後衛用の符を一式いただけないでしょうか？」

「それは良いですけど、作るのに少し時間をいただけないでしょうか？ 今はあまり数も無いので……」

まあいきなり欲しいと言われたから、数も足りないだろう。他の先生方もそれで納得している。

「でふからー、わらひも寂しいわけふよ。結婚ひても上手いかず、まらこうして一人に逆もどりなんれすから」

時間が進むに連れて、先生方のお酒を飲むペースも早くなってきた。：ファミレスならあまりお酒も飲まないと思ったけど、あれば飲む人達ばかりだった。既に葛葉先生が酔っ払って、アレンさんに絡んでいる。

「あの、飲み過ぎじゃないですか？」

「れんれんそんなことありませ〜ん。まだまだらいじょうぶでふ」

ダメでしょ？

「ああー葛葉、ちょっと落ち着いたらどうだ？アレンも困ってるぞ？」

「いいじゃないですかー！私らって若い男がいいんれすー。アレンく〜ん」

そう言いながら、アレンさんに近寄る葛葉先生。…って！

「ちょっと葛葉先生！？流石にマズイですよ！？？」

「少し飲み過ぎだね。……時間も遅い事だし、今日はこの辺にしておこうか」

確かにもう結構な時間だ。今日はお開きにしましょうか。

「なら今日の交流会はここまでですね。…アレンさん、今日は本当にありがとうございました」

「僕の方こそ、今日はありがとうございました。また呼んでいただければ来ますので、いつでもどうぞ」

「それは嬉しいな。ならまた次の機会で話そうか」

「またいろいろ話そうじゃないか」

酔っ払った葛葉先生に手を貸し皆で店を出る。高畑先生と神多羅木先生は同じ帰り道で、アレンさんが一人、私と葛葉先生が途中まで一緒だけどこの状態では満足に歩けない為、私が付き合わなければならぬ。

「では、おやすみなさい」

「おやすみ」

「風邪引くなよ」

「おやすみなさい」

「おやふみ」

こうして、第一回交流会は無事に終わりを迎えた。

教師達との交流（後書き）

本編ではあまり出番のなかった教師達の話でした。……クオリティ低いですね。本当申し訳ないです。……まあ教師達はただ単に出したかっただけなんですけどね。

お見合いの後日談的なのはもう少し応募が来たら書こうかと。なので、ご希望の方は感想にてお願いします。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

桜通りの吸血鬼の噂（前書き）

という訳で、今回から吸血鬼です。お見合いの話は吸血鬼編が終わったから書きます。

桜通りの吸血鬼の噂

一つの噂がある

満月の夜の桜通りには気をつけろ。

ソイツは血を狙って襲ってくる。

一人になると襲ってくる。

気をつけろ。

ソイツはソコにいる。

人に紛れてソコにいる。

吸血鬼はソコにいる。

アレンside

「って噂が今女子寮中に流れているんだよ」

夜、真名が家を訪ねてきてある噂話を教えてくれた。

吸血鬼がいる。

噂を面白おかしくごちゃ混ぜにしたのか、はたまた本当にそういう

噂なのか、少し突拍子も無い噂話だ。

「その噂なら私も聞いたよ。真名のとは少し違ったけど、吸血鬼の噂話にそっくりだし多分アレも吸血鬼の噂かな」

どうやらリナリーも耳にしていたようだ。：内容は統一されてないようだ。

「しかし、吸血鬼ですか…。どうしてまた新学期早々、そんな厄介な噂が広まるんでしょうか？」

春休みも今日で終わり、明日から新学期となる。真名達は学年が上がるけど、僕とリナリーは高校へと通う事になる。

「そうだね、誰かが意図して流しているとみて間違いはないだろうけど…」

「その噂を誰が流したかが問題だね…」

この春休みの間に広まった吸血鬼の噂。生徒の誰かがイタズラで流したのか、はたまた犠牲者が出たから流れ始めたのか…。

「今のところ被害にあった人はいるんですか？」

「…それが誰もいないんだ」

犠牲者がおらず、ただ噂だけが一人歩きしている現状。……本当に厄介だ。

「……ちなみに学園側の動きは？」

「…動くつもりはないみたい。所詮噂話だし、せいぜい生徒達が夜遅くまで出歩かないよう呼びかけるくらいしか…」

まあそのくらいが妥当か。

「……と言うか、本当にいるんですか？吸血鬼が」

「さあ？」

「ちょっと、分かんないかな？」

だよね。……となると先ずはその吸血鬼を探す事からか。……本当に存在するのなら。

「はあ…。なら、吸血鬼の方は僕がそれとなく探して見ます。真名はいつも通りネギを監視、リナリーは学園側の動きを調べてください」

「分かったよ」

「私も良いけど、アレン君気をつけてね？もし吸血鬼に噛まれたら、噛まれた人も吸血鬼になっちゃうみたいだから、絶対に噛まれないでね？…私アレン君が吸血鬼になるの、イヤだよ？」

噛まれないか心配してくれるリナリー。……エクソシストが死徒になったらお笑い種だ。

「アレンさんが噛まれるようなヘマはしないさ。……何だったら私が先に襲ってあげようか？」

「……真名、女の子がそんな事を言うんじゃないやありません」

最近の真名は、だんだんと容赦のないセクハラをしてくるからかなり参っている。

「……………吸血鬼になったら、私を襲うの？」

「襲いません。って言うかりナリーまで…………」

頬を赤くして、上目遣いで聞いてくるリナリー。真名に感化されて、リナリーまで少しおかしくなってきたな…。

「少しくらいいいじゃないか」

「……………魅力ないのかな…」

本気で落ち込む二人。……………僕にどうしろと？

「…あゝ、二人にもちゃんと魅力はありますよ。でも流石に、襲う襲われたはデリカシーに欠けると言うか…」

「…ならまた次の機会だな」

「……………次こそは」

次がない事を祈ろう。

「では明日から行動しましょう。くれぐれも無茶な行動はしないでくださいね」

「「はい」」

ホント、最近仲がよろしい事で。

「真名、女子寮まで送りますよ」

「……そんな、野外でだなんて…。以外と大胆なんだな、アレンさんは…」

「アレン君……」

身体をくねらせながら恥ずかしがる真名。顔を赤くして睨んでくるリナリー。……何でこうなった。

「冗談さ。野外も捨てがたいけど、初めては落ち着いた場所が良いしね」

「もう勘弁してください……」

胃が……。

「まあ心配してくれたのは嬉しかったよ。でも女子寮までなら一人で帰れるし、いざとなったら朝までココに居させてもらうから」

「……わ、私も朝まで一緒にいる!」

「……………はあ」

吸血鬼よりも厄介な二人。……どう対処しようか。

一つの噂がある。

夜の桜通りには気をつけろ。

ソイツは人を狙って襲ってくる。

一人になると襲ってくる。

気をつけろ。

ソイツはソコにいる。

人になってソコにいる。

アクマはソコにいる？

桜通りの吸血鬼の噂（後書き）

真名はもう止められませんwwホント、書きやすいキャラになって…w
次回から幼女吸血鬼も出てきます。またネギまに出るのかよ！って
キャラも出てきますが、あくまでもネギまでの役割をもったキャラ
です。で、ご容赦の程を。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

吸血鬼とエクソシスト（前書き）

遅くなりました。ごたごたの間に書いたので少し短く、また低クオリティです。本当に申し訳ありません。

吸血鬼とエクソシスト

真名 side

「「三年！A組！！」」

「「「ネギせんせー！！！！」」」

……………うるさい。

「改めまして、三年A組の担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから一年、よろしくお願いします」

「もちろんです！ネギ先生！」

「よろしくー！」

正式にウチのクラスの担任になったネギ先生。クラスの賑やか組は、バカみたいに喜んでいる。

「失礼します。ネギ先生、今日はA組の身体測定ですのですぐ準備してくださいね」

源先生が、身体測定の事を教えに来てくれた。ふむ、どのくらい成長してるかな？

「あ、分かりました。……では皆さん！これから身体測定ですので、速やかに着替えてください！」

「「はい！」」

ネギ先生が廊下に出て行くのを確認してから着替え始める。…とは言っても、制服を脱ぐだけだが。

「…そう言えば、今日まき絵は？」

「ズル休みじゃないアルか？」

「どうしたんだろ…？」

早乙女達が佐々木がいない事に気づく。……ズル休みの可能性も確かにあるな。

「春休みの間に太ったから、来たくないんじゃない？」

「あゝ、かもね」

椎名の言葉に、明石が頷く。……誰も欠席の理由を知らないのか？

「ところでさ、最近女子寮で流行ってるあのウワサ。…どう思う？」

すると柿崎が、今問題になっている噂を皆に聞いている。

「？どんなウワサよ、柿崎？」

「…ああ、あの桜通りの吸血鬼ね？」

アスナはあまりそういう噂には疎いのか、隣にいた春日が代わりに

答える。

「えー！何ソレ！？」

「何の話や？」

周りで話を聞いていた、椎名や木乃香が興味を示している。

「しばらく前からある噂なんだけど、満月の夜になると出るんだって…。桜通りに真っ黒なボロ布につつまれた、血まみれの吸血鬼が…」

「「キャー！」」

柿崎の話に怖がる鳴滝姉妹。相変わらずの怖がり屋だ。

「もしかして、まきちゃんもその吸血生物にやられちゃったのかな…」

「まきちゃん美味しそうやしなあ」

あまりよろしくないボケをする、椎名と木乃香。吸血生物じゃなく、吸血鬼なんだが…。

「はあ、そんなンデタラメに決まってんじゃん。アホな事言っただけで、さっさと終わらせるわよ」

妙に現実主義のアスナ。まあそれが、普通の反応なんだが。

「たいへーん！まき絵が保健室に運ばれてる！」

「何で!？」

「まき絵がどうしたの!？」

和泉が息を切らせて、佐々木が保健室に運ばれた事を知らせに来た。
……何があったんだ？

「軽い貧血みたいです。：何でも、桜通りで倒れているのを見つけたらしくて…」

クラス全員で保健室に来てみたら、佐々木は何事も無いかのように寝ている。貧血で運び込まれたらしいが、実際はそうじゃない。生まれつき魔眼である私には見える。佐々木は血を吸われている。しかもご丁寧に、噛み口には微量の魔力が残されている。……吸血鬼か。

「貧血か。無理なダイエットしたんじゃない？」

「かもね。まき絵ったら無理しすぎだよ」

クラスからはダイエットのしすぎで倒れたと思われる。唯一、ネギ先生は微量の魔力を感じ取ったようだ。：アレンさんに報告しておくか。

「：おい、真名。一体何が起きてるんだ？」

ハッキリとは分かってないが、どうやら刹那も異常だと感じてるよ

うだ。

「……吸血鬼だよ」

「……あの噂のか？…にわかには信じられんが…」

まあ、いきなり言われてもそう簡単には信じれないな。

「だが残念ながら事実だ。アレンさん達も動いているし、少しばかり厄介な事になるみたいだ」

「そうか…。なら私にも手伝える事があれば、いつでも言ってくれ」
「頼りにしとくよ」

エヴァ side

満月の夜。桜通りで獲物を待つ。私にかけられた呪いを解くべく、今は血を吸い続け来るべき時に備えなくては…。

「フンフン♪」

どうやら来たようだ。同じクラスの生徒だが、今はそんな事は関係ない。

「あつ、桜通り……。こ、こわくない。こわくないです。こわくない、かも…」

怖いなら怖いって言えば良いのに、何故意地を張るんだろうか？

「二十七番、宮崎のどこだな？悪いけど少しばかり、血を分けてもらうよ」

宮崎のどかの目の前に降り、少々威嚇する。気が弱い者ならすぐに気絶するだろう。

「キャアアアッ!？」

宮崎のどかの悲鳴が木霊する。なに、痛くはない。すぐに血を吸って気絶してもらうだけだ。死にはせんよ。

「……悪いけど、それ以上はやらせません」

「!？」

突然の声に驚き、宮崎のどこから離れる。宮崎のどかはすでに気絶しているが、問題は宮崎のどこを抱えている奴だ。

「貴様……」

「こんばんは、吸血鬼」

去年の夏に、この麻帆良に來た教会の人間。

「アレン・ウォーカー……」

ちっ、余計な邪魔が入ったか。

「さて、どうして吸血鬼である貴方が麻帆良にいるのか。…少しばかり話をしたいんですが？」

「ふん、何故貴様にそんな事を話さなければならんのだ。どうしても知りたいと言うのなら……」

言いながらマントに隠している魔法薬を手取る。

「私を倒してみるんだな！魔法の射手、氷の11矢！」

「くっ！守羽！」

私が放った魔法の射手に当たる瞬間、奴は何かを使ったようだ。…
…障壁を使わない？もしくは使えない？確か奴は白の教会の人間の
筈だが…？

「……ふう、僕としてはあまり事を荒げたくないんですけど……？」

煙が晴れて姿を見せるが、奴と宮崎のどかは無傷。…面倒な。

「ならばすぐに消えろ。私は貴様に用はない。私とて、今はあまり目立つ訳にはいかんのでな」

「…そう言う訳にもいきません。貴方程の吸血鬼が、理由も無く人を襲う筈がないんですなら。…そうでしょ？エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル？」

……本当に面倒な…！？

「貴様、何故私の名を…!!?」

「有名ですからね。闇の福音、不死の魔法使いとして。一応、教会の方にも貴方に関する資料がありましたし」

資料だと? 白の教会にそんな物があると言うのか?

「……貴様、何者だ? 白の教会の人間にしては、裏を知りすぎているようだが…」

何とか会話で時間を稼ぐ。その間に従者である茶々丸を念話で呼ばなければ…。

「エクソシストです」

「!? くそっ!!」

ヤバイ、今は逃げなければ! 呪いさえ無ければ簡単に殺せるが、今の状態では勝つ事はできても此方も怪我程度ではすまん! そんな事になれば、計画に支障をきたしてしまう!

「悪いが今夜は逃げさせてもらう! だが忘れるな! 私が力を取り戻したら、その時はすぐに貴様を殺しにくるからな! 覚悟しておくんだな!」

奴も私を追おうとしていたが、宮崎のどかがまだ気絶している為後を追う事ができなかった。

「覚えていろよ、……エクソシストめ!!」

「マスターがあんなにも楽しそうに…。これは永久保存ですね」

……………茶々丸は帰ったら覚えていろよ？

吸血鬼とエクソシスト（後書き）

幼女可愛いよ幼女。と言うわけで、幼女吸血鬼ことエヴァでした。本当は原作通り、薬味を出したかったんですけどあえてアレンにしました。……どこで薬味を出そう？

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

吸血鬼の憂鬱（前書き）

あまりタイトル通りではありません。ただずっと少女のターンなだけ
です。

吸血鬼の憂鬱

エヴァ side

「全く、何なんだあのエクソシストは！ 奴が邪魔などして来るから、宮崎のどかの血を吸い損ねたではないか！ しかもあの様子だと、これからも邪魔をしてくるだろうし！ 私の計画が台無しになってしまいうじゃないか！」

「マスターがこんなにも興味を示すなんて……。機会があれば、アレ様を夕食に御招待いたしましょう」

「するな！！」

エクソシストといい、茶々丸といい、私をバカにしすぎだ！

あの後、何とか奴から逃げ切る事はできて家へと戻った。奴には私の住んでいる場所までは分からないようで、家では比較的確のんびり過ごす事ができている。

：だがこの家の場所が奴にバレるのも時間の問題だ。流石に奴も家を問答無用で破壊するような真似は、………しないよな？ でも相手はエクソシストだし、何をしてくるか予想がしにくい。

昔は正義の魔法使い共と同じように、多人数で攻撃してくる戦法ばかりだった。だが今のエクソシストの事は分からない。

かの忌々しいサウザンドマスターの呪いによって、この麻帆良に十五年も縛り付けられている。その間に何かしらの変化があったら、

対処に遅れてしまう。そうすると嫌でも後手に回ってしまう。今は戦うのは避けなければ…。

ようやくこの呪いを解くことができるというのに……！

「くそっ！あと少し、あと少しだと言うのに……！サウザンドマスターの息子である、あのネギのぼーやの血を吸いつくせばこの呪いも解けると言うのに……！本当に忌々しいエクソシストだっ……！」

「マスター、落ち着いてください。まだ計画までは時間があります。今からでも計画を多少見直しても、まだ十分に間に合うかと」

「………何か具体案があるのか？」

計画を見直すにしても、あのエクソシストがことごとく邪魔をしてきそうな気がするが…。

「はい。アレン様にマスターの計画をお話ししてはどうでしょうか？」

………こ、この！

「ポケロボがー！！」

スパーンッ！！

転がっていたハリセンで、茶々丸の頭を叩く。家中に軽快な音が鳴り響く。

「マスター、痛いです」

「痛いですが、じゃない！何をバカな事を言っているんだ！？そんな事をしたら、確実に邪魔してくるに決まっているだろうが！」

「……本当にそうでしょうか？」

「……なに？」

「本当に問答無用でマスターを殺しにくるのなら、すでにあの桜通りでやっていた筈です。ですがしなかった。逆にアレン様は、マスターとの対話を望んでいました。これらの事から考えられるのは、アレン様は本当にマスターとお話がしたいのではないのでしょうか？」

「……一理ある。確かに奴は、私が宮崎のどこを襲っていたにも関わらず攻撃をしてこなかった。

だがそれは、奴が宮崎のどこを抱きかかえていたから攻撃できなかったとも取れる。

何故私が夜な夜な吸血行為をしているのか、奴はそれを聞き出そうとしていた。ならばその場でもし私が話していたら、奴はどういう行動にでたのだろうか？

「……………茶々丸」

「はい」

「もし、もしだ。…私があの場合で奴に私の計画を話していたら、奴は私を殺そうとするだろうか？」

真祖の吸血鬼である私は不死だ。不死である私を殺すには、それ相応の装備が必要になる。だが奴はエクソシストだ。それくらいはの装備なら揃えられるだろう。

だから、私が話したら奴は私を悪の吸血鬼として殺しにくるのだろうか？

「……申し訳ありません。アレン様に対するデータが不足している為、何とも答えられません」

「……データとかじゃなくていい。お前が見たままの印象で十分だ」

「……………マスターと敵対するようには思えません」

「……………そうか」

茶々丸は超とハカセが造ったロボの為、あまり自分の見たままの感想が伝えにくいらしい。

そんな茶々丸が、初めて出会ったあのエクソシストは私と敵対するような人間ではないと言った。

「……すまんが、しばらく一人にさせてくれ」

「かしこまりました」

…ボタンッ

茶々丸がドアを閉めて出て行った。

一人になった私は、夜空に浮かぶ月を見ながら考える。

アレン・ウォーカー。

私の事を知っていて、なお私との対話を望むエクソシスト。

対話は罾かも知れん。話している最中に攻撃してくるやもしれん。

だが一方で、奴は本当に私と話がしたいのではないかと思ってしまう。

ここでふと疑問が出てきた。

「……何故エクソシストである奴が、この麻帆良に？ 確か奴は、白の教会の元帥が留学目的で送り込んできた筈……。なのに実際奴はエクソシストだった。白の教会とエクソシスト……。一体どういう事なんだ……？ 奴は何の目的でこの麻帆良に？」

考えても答えは出てこない。判断材料が足りん。ならば……。

「茶々丸！」

「……………何でしょう？」

「大至急白の教会の裏側について調べろ！ 白の教会とエクソシストの繋がりを探し出すんだ！」

「了解しました」

そう言って部屋を出て行く茶々丸。茶々丸の情報収集能力ならば、時間さえかければすぐに調べられるだろう。

「…待っているよ、エクソシスト。必ず貴様の目論見を暴いてやる…！そして私に害なす存在ならば、その時は……！」

私がこの手で八つ裂きにしてくれる…！

「ああ、マスターがあんなにもはしゃぐなんて…。見事なツンデレぶりです…」

早く行けと言うに！このボケロボが…！

吸血鬼の憂鬱（後書き）

今回はアレンの事を考える少女の話でした。いわゆる繋ぎの話です。少女はもうアレンの事が色んな意味で気になるようです。少女可愛
いよ少女。

茶々丸もすでに色んな意味で壊れてきました。茶々丸の書きやすい
事書きやすい事w

次回は少女とアレンが再び合間見える………のか？

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

吸血鬼の自信（前書き）

残念ながらまだアレンとの再開はできません。再開は次回あたりで
すかね？

吸血鬼の自信

場面は麻帆良より遠く離れた地、ヴェネツィアへ。

ヴェネツィアには巨大な教会がそびえたっている。その教会こそが、世界中に支部を構えている白の教会本部であると同時に、エクソシストの本部の黒の教会である。

その黒の教会本部にある一室で、とある問題が起きていた。

「……博士、少しよろしいでしょうか？」

「どうした？ エレナ」

エレナと呼ばれた銀髪の少女。雰囲気は大人びた感じだが、まだ顔には幼さが残っている。背丈も年頃の女の子と同じくらいで、スタイルの方は服の上からでも分かるくらいに育っている。眼福眼福。

そんな少女が博士と呼んだ人物、博士と呼ばれるには程遠い身体をしている。博士と言われる人物は総じてひょろつとしている身体で、何とも弱々しいイメージを連想してしまう。

しかし、そのイメージとは全くの正反対な身体をしている人物がここにいる。髪色は薄い緑で、顔もイケメンとまではいかないがそこそこ整った顔をしている。ならば身体はと言うと、これまたボディビルダーも顔負けの筋肉だ。

そう。この博士と呼ばれた人物は、無駄な肉が無くそこら辺にある

スポーツジムにいても違和感の無い身体となっている。夏場は正直暑苦しく思えるくらいだ。

「……二日くらい前に、本部のメインコンピューターにハッキングされた件に着いてなんですけど」

「ああ、そう言えばそんな事もあったな。……それがどうかしたか？確かにメインには侵入を許してしまったが、これと言った被害は無かった筈だが」

メインコンピューターにハッキングされた事を、そんな事程度で済ませるのはある意味スゴイ。しっかりと仕事をしているのだろうか？

「……あの時のハッキングは、そこら中のデータベースとにかくアクセスしていましたので、今の今まで後処理をしていたんですが……」

「……データベースと言っても対した物も無かった筈だが？」

どうにも歯切れの悪い少女。何時もなら単刀直入に話す彼女が、ここまで躊躇うなんて始めての事で博士も首を傾げるばかり。

「……………してやられました。相手の目的は核鉄と予想していたので、核鉄のデータベースばかり気にしてましたが、実際は人物のプロフィールデータだったようです」

「……特に問題は無いのでは？」

別に本部の人間のプロフィールなんて盗まれても、盗まれた本人の情報しか無いのだから特に困るような事では無いのでは？と考えている博士。

だが少女の言葉で事態は大きく変わる。

「……………アレンです」

「……………なに？」

「……………アレンのプロファイルデータ及び、アレンに関するあらゆるデータが盗まれました」

室内の時間が止まったかの様に静かになる。

ここはエクソシストの本部。…つまりはここにいる全てのエクソシストのデータも、このメインコンピュータにある。当然、今は極秘と言わんばかりの任務に着いているアレンのデータも存在している。

「…どこの誰だ？」

「…流石に人物までは特定できませんけど、場所なら特定できました」

少女は博士の威圧感に耐えながらも説明する。これが別の人物ならばここまでにはならない。簡単な事後処理程度で済ませれるからだ。

だが今回はそうもいかない。

本部のデータベースでも、下手をしたら核鉄以上の機密情報が盗まれたのだから。

「場所は？」

「…日本です。日本の麻帆良という学園都市からのハッキングでした」

何故日本から、何故麻帆良からハッキングされたのか。疑問は尽きないが今はそれどころではない。

博士は白衣を脱ぎ、椅子に掛けていた教会服コートに着替える。少女は元々教会服コートなので、着替える必要はない。

「着いてこい、エレナ」

「…了解しました、ファウスト元帥」

そう言って二人は部屋を出て行った。

エヴァ side

茶々丸にあのエクソシストの事を調べる様に命じてから二日。ついに茶々丸からの報告が。

「マスター。アレン様に関するデータを入手いたしました」

「おお！良くやったな、茶々丸！」

茶々丸が奴のあらゆるデータを手に入れたと知らせてきた。流石は私の従者だ。

「まずはこちらを。アレン様のプロフィールをプリントアウトした物です」

「…どれどれ？」

奴のプロフィールに目を通す。かなり細かく書かれていて、読むにも一苦勞の為仕方なく必要な部分だけを読む事にした。

「……なるほど、元は孤児だったのか。孤児だったのをエクソシストに拾われ、以後自分もエクソシストとなる、か……。だが妙だな。何故エクソシストが拾って面倒まで見たんだ？この白の教会というのにでも預ければ良かったんじゃないのか？」

「……どうやらアレン様が、白の教会に保護されるのを拒否したようです。……理由までは分かりませんが」

どうやら茶々丸が読んでいる紙には、詳しい事が書かれているようだ。

「ふんっ、まあそんな事はどうでも良い。問題は、奴が本当に話し合いをする価値があるかどうかだ。それ以外は今はどうでもいい」

そう言ってプロフィールが書かれている紙を茶々丸に渡す。どうせ茶々丸が覚えている事だろうし、また知りたい時は茶々丸にでも聞こう。

「：どうやらアレン様は、此方に敵意などが無ければ問答無用で攻撃してくるようなお方では無いみたいです」

「なるほど、ならば一先ずは少しばかり信用ができるんだな？」

そう言ってニヤリと笑う。まあ奴の寿命がわずかに延びたみたいなものだ。

結局はその話し合いで決裂する様な事になれば、私と奴は敵同士。戦うのが自然となる。

「くっくくく、私としては是非話し合いが無意味になる事を願うんだがな…」

「今のマスターは、ツン度が高すぎですね。もう少しデレが無いとアレン様に嫌われますよ？」

「元々好きでも何でも無いわー！！このポケロボが！！」

何がツン度だ！何がデレだ！私は悪の魔法使いなんだぞ？！何故エクスリストなんかを好きにならないければならないんだ？

「もう少しご自分に正直になされば…：あるいは」

「ありえるわけないだろ！！此方から願い下げだ！」

全く！大体好きになってどうしろと言うんだ？

「…：しかしこれで、奴への対処が可能だ。：茶々丸、近い内に奴を招待してやれ。存分に歓迎してやろうじゃないか」

「かしこまりました。歓迎パーティーですね」

……超に一回見てもらうか。

「さあ、来てみるエクソシスト。この闇の福音が相手になってやる！」

近い未来、エクソシストが私に跪く光景が目に見えかぶ。

そしてその後に、あのサウザンドマスターの息子を襲ってこの忌々しい呪いを解いてくれるわ！

「……現時点ではマスターがアレン様に勝てる確率は極めて0に等しいのに、それに全く気づかないマスター……。ああ、何て可愛らしいんでしょう……」

茶々丸が何か言っているが、今の私には怖いものなど何も無い！

さあ、早く来い！エクソシスト！！

吸血鬼の自信（後書き）

ファウスト元帥とエレナが参戦するようです。ぶっちゃけこの二人のモデルですけど、某ニトロに出てくるあのコンビを連想してください。口調は全然違いますけど…。

エヴァはツンツンだから可愛い。でもそんなエヴァを愛でる茶々丸も可愛い。この主従は本当に書きやすいですねW

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

エクソシストとの再会（前書き）

短いですが、一応二部に分けました。

エクソシストとの再会

茶々丸 side

「……と言うわけで、明日の夜アレン様の歓迎をいたしたいので私と一緒に来てもらえませんか？」

「……えっと、いきなりでちょっと分からないんですけど」

「説明を省きすぎました。」

「申し訳ありません、ただいま説明いたします。……マスターが明日の夜、マスターの家にて話があるとの事ですので、アレン様には是非来ていただきたいとの事でして」

「……つまり、僕と話がしたいから明日の夜に家に来いって事です
か？」

「端的に申せばその通りです」

マスターは相変わらず小難しい事を言って自分の気持ちを誤魔化しています、本音はアレン様と仲良くなりたいと思っている筈です。

全く、照れ屋にも限度があると言うのに……。

「……確認しますが、マスターと言うのはエヴァンジェリンですよ
ね？」

「はい。エヴァりんです」

アレン様も律儀な方なだけあって、マスターの名前も略したりはせずに普通に呼んでいます。がそれではダメです。

照れ屋で恥ずかしがり屋で捻くれ者の分らず屋で、その上短気で天邪鬼でぐうたらでロリで幼女でちっさくて可愛いマスター相手に、そこまでかしこまる必要ありません。

もう少し、砕けて接してもらえればマスターもイチコロなんですよけど…。

「……エヴァ、りん？」

「可愛いじゃないですか、エヴァりん。何でしたらエヴァたんでも良いですよ」

まあ、マスターも金髪幼女ですしね。エヴァたんでも特に問題は無いでしょう。

「……普通にエヴァンジェリンで」

「…そうですか」

どうやらアレン様は起きに召さなかったようだ。……あまり強引に進めても仕方ないので、ここは私が我慢しましょう。

「……とりあえず話は分かりました。なら明日の夜に、エヴァンジェリンの家に行きますと伝えておいてください」

「了解しました」

とりあえずは要件が終わったので帰るとします。いつまでもアレンの部屋の玄関先を占領しているのも悪いので。

「それではお待ちしております」

そう言って私は、マスターの待つ家に。

……今夜の内に、マスターの身体を清めておかないと。

エヴァ side

エクソシストが今夜家に来る。そしてそこで私と奴とで話をする。

内容は私のかけられている呪いについてと、それを解呪する為にネギのボーヤの血が必要だと言う事を奴に話す。

エクソシストである奴は、当然阻止しようと動くだろう。なんせ吸血鬼が人を襲おうとしているのだから。

しかし私を襲ってくるが最後、その時は私と茶々丸で奴を完膚無きまでに叩き潰してやる。

「ふっふっふ、我ながら完璧な計画だな」

ついつい自画自賛してしまう。それくらい完璧に仕上がっているんだからな。

カランカランッ

そんな事を考えていると、ドアの鐘が鳴らされる。どうやら来たようだな。

「茶々丸」

そう言うのと茶々丸は玄関に行き、奴を出迎える。

「いらっしやいませ、アレン様」

「こんばんわ、茶々丸。お邪魔しますね」

どうやら奴と茶々丸はそこまで険悪な関係ではないようだな。

「こんばんわ、エヴァンジェリン。今夜はお誘い、ありがとうございます」

「ふん、よく逃げずに来たな。その根性は認めてやろう」

この私にも声をかけてきた奴に、多少皮肉を交えて返してやる。

……………よく見ると顔は悪くないな。

「すみません、アレン様。マスターはアレでもアレン様を歓迎しているつもりなんです」

茶々丸が余計な事を言う。と言うより、捉え方が間違っている。

「茶々丸！私は歓迎などしておらん！……貴様も誤解するなよ！私は、断じて貴様を歓迎なんかしておらんのだからな！！」

「はいはい、ツンデレ乙」

「茶々丸！！」

ホントにこのポンコツロボは……！！

「まあまあ、エヴァンジェリンも茶々丸も落ち着いてください」

「ほら、マスターがはしゃぐからアレン様が困ってるじゃないですか」

「誰のせいだ！！」

怒鳴りすぎて頭がくらくらしてきた。……ヤバイ、ふらついてしまう。

「あっ……」

「おっと……大丈夫ですか？」

立っているのも辛くなり、膝から崩れ落ちそうになるところを奴が支えてくれた。

………結構筋肉質なんだな。

「あ、ああ。……すまん」

くそ、少し顔が熱くなってきた。……恥ずかしい。

「流石ですね、マスター。そうやってさりげなく、アレン様といちやつくなんて…」

い、いちゃつく!?

「何を馬鹿な事を言っているんだ!?!どこをどう見れば、いちゃついて見えるんだ!?!」

また大声を出したから、再びふらついてしまうがまたしても奴に支えられた。……と言うかこの形は。

「ですがマスター。その様にアレン様に抱きついていても、説得力は皆無なんです…」

…茶々丸の言う通り、奴が私を支えて私が奴に抱きついている形になっている。

その事を理解した私は、途端に身体中が熱くなってきた。

「エヴァンジェリン?身体が熱くなってきましたが、本当に大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫だ!そ、それよりも、もう離しても大丈夫だ!一人で立てりゅ…!」

か、噛んでしまった…。ちょっと舌が痛い…。

「うう……ひたが痛ひ…」

「大丈夫ですか?…ちょっと見せてもらえますか?」

「んっ……」

舌を出して見てもらう。うう……まだヒリヒリする…。

「……ああ、少し切れてますね。……でもこれくらいならすぐに治るでしょ」

やはり少し切れてたのか……。……ガマンするか。

「マスター……大胆です……」

「ほこがだ!!」

舌が治ったら覚えてろよ!?

エクソシストとの再会（後書き）

エヴァりんがドジっ子になりました。

エヴァりんのツンデレ度が上がりました。

茶々丸がついに壊れましたw

次回もこんな感じですね。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

吸血鬼の涙（前書き）

タイトルで分かる貴方。貴方はよくモヤシの事を分かっている証です。

吸血鬼の涙

エヴァ side

あれから少しして、普通に喋れるようにはなった。まだ多少ヒリヒリするが、そこまで痛いわけではない。

「…すまん、退屈な思いをさせてしまっ」

私の舌が治るまでずっと待ってもらっていたから、流石に一言謝らなければ…。

「いえ、気にしないでください。…辛い時間はまだ余裕がありますし、そう慌てなくても良いですよ」

「そうですよ、マスター。マスターのドジっ子は今に始まった事ではありません」

「よし茶々丸、少し黙っている。…お前が気にしていないなら別に良いが…」

奴は本当に気にしてないのか、笑顔で返答してきた。

「……ならそろそろ本題に入ろうか。……茶々丸」

「はい。……アレン様、こちらへ」

茶々丸が奴を席へと案内する。

「ふう……まあ座るが良い」

奴の対面に私が座り、奴も私が座るように言うのと座りだす。

「紅茶です」

「ありがとう」

私達が座るのを見計らって、茶々丸が紅茶を出してきた。

「んっ……美味しいです」

「ありがとうございます」

どうやら口にあったようだ。茶々丸も美味しいと言われて嬉しそうだ。……茶々丸が微笑むのを初めて見た。

「…さて、あまりうだうだ腹の探り合いをするのは面倒だ。単刀直入に聞く、私を殺すつもりか？」

余計な問答は必要ない。知りたいのは、私の敵かどうかだ。

さあ、どう答える？エクソシスト。

「えっ？そんなつもりはありませんよ？…と言うか、貴方を殺す理由がありませんし…」

………予想外の返答だ。

「僕が知りたいのは、貴方が何故一般人相手に吸血行為をしている

かです。…血を必要としているなら、学園側に話せば良いだけなのにそれをしない。つまり、学園側には秘密で何かをしようとしている。違いますか？」

「……まさかここまで頭が回るとは。…どうやら甘く見過ぎていたようだ。」

「……その通りだ。私はとある計画の為、学園に通う生徒の血を吸って力を蓄えていた。本来ならこんな事をする必要はないんだが、今の私はほぼ一般人並の力しか出せないんだ」

「真祖の貴方が何故そんなにも弱っているんですか？」

「……十五年前、私はこの地である男と出会った。その男は私に登校地獄という呪いをかけ、私を麻帆良に封印したつきり行方不明になった…。奴は三年たったら呪いを解いてやると言ったのに、結局三年たっても現れず今に至る訳だ…」

いつ思い出しても腹が立つ。この私でさえ、約束事を違えるような事はしないと言うのにあの忌々しいサウザンドマスターときたら…！！

「……因みにその呪いをかけた男と言うのは？」

「……………サウザンドマスターだ」

どうせエクソシストであるこいつの事だ。サウザンドマスターが正しいと言うに決まっている…。悪の魔法使いであるこの私を封印したのだからな…。

「……………封印された理由は？」

……………一番答えにくい質問をされた。

「……………サウザンドマスターを私のモノにしたかったんだ。……奴は他の魔法使い共とは違い、私を恐れなかった。私を私として見てくれていたんだ……。……しかし奴は私には興味が無く、挙句には厄介者扱いだ」

「……………それで封印されたと」

頷いて返事をする。

サウザンドマスターを私のモノにする。

無理だとは分かっていた。でもどうしても奴と一緒にいたかった…。

こいつはどう思うだろうか？私の自業自得だと思うだろうか？正義のサウザンドマスターが正しいと思うのだろうか？

「……………なるほど。血を吸って力を蓄えていたのは、サウザンドマスターの血縁者であるネギを襲う為ですね？呪いを自力で解くには呪いをかけた人物の血か、血縁者の血が必要ですからね。しかし、ネギも一筋縄で勝てる相手じゃない。今の封印された状態では、魔法薬を媒体にしなければ魔法が使えないから少しでも力を取り戻す為に他者の血を必要としていたんですか…」

本当にこいつは……。

「それで？私をどうするつもりだ？……エクソシスト」

敵なのに何故ここまで話したのか、自分でも分からない。

こいつに私を知って欲しかったから？

それでもこいつはエクソシストだ。

エクソシストは魔を討つ存在だ。

私を他っておく筈がない…。

さあ、答えろ…。

「……………僕がその呪いを解きます」

……………はぁ！？

「貴様っ！何を言い出すんだ！？自分が何を言ってるか分かって
いるのか！！？」

「ええ、もちろん分かってますよ。要するに貴方にかけている
呪いが解呪できれば良いんですよ？なら解呪するのが僕でも構わ
ないんですよね？」

「…それはそうだが。だが！何故貴様が私の呪いを解くんだ！？貴
様はエクソシストだろ！？エクソシストが悪の魔法使いを助けてど
うするんだ？！」

全くもって、こいつの考えが分からん！

「……だって本来ならもう呪いは解けていても良い筈なんですよ？
なのにサウザンドマスターが呪いを解きに來ない為、貴方が十五年
もここに在る羽目になってしまっている。……ならもう良いでしょ
？貴方は十分に約束を果たしました。僕がサウザンドマスターに代
わり、貴方の呪いを解きます」

……何で。

「……………何でだ」

「人を助けるのに理由は必要ありません」

お前は……………お前は……………。

「……私は真祖だ。人が恐れる吸血鬼だ。惡の魔法使いで正義の魔
法使い共に敵視されている。………そんな私を助けてどうするつも
りだ？私に恩を売りつけて利用するつもりか？」

……止まらない。私はいつからこんなに弱くなったのだろうか？

「……僕は本当に貴方を助けたいだけです。見返りも何もいりませ
ん。……僕に貴方を助けさせてください」

「……………この学園の教師共が黙ってないぞ？奴等も正義の魔法使
いを目指している。……私はそんな奴等に目を付けられている。惡
の魔法使いとしてな」

もし私の呪いが解けたらじじい共がうるさいだろう。

こいつが呪いを解いたというのが周りにバレたら、それこそこいつ

の立場が危ない。

「…関係ないです。誰が何と言おうと僕は貴方の味方です。例え周りが敵だけになっても、僕は貴方を絶対に助けてみせます」

何故だろう。……こいつの言葉が胸に響くのは。

何故だろう。……目頭が熱くなってくるのは。

何故…だろう。……こんなにも嬉しいのは。

気がつくとい私は奴の側まで近づいていた。

奴も私の正面に立つ。

ポスッポスッ。

奴の胸を叩く。

「……馬鹿だ。……お前は大…馬鹿…者だ。私を…助ける……なんて……」

涙が頬を伝う。

声も上手くだせない。

「……………本当に…助けて……くれる…のか？」

「必ず助けます」

力強く答えてくれる…………アレン。

「…………アレン…………」

もう限界だった。私は奴にしがみつき泣き出す。

いつぶりだろう。こんなにも優しくされたのは。

いつぶりだろう。こんなにも涙を流すなんて。

この心の熱さが何なのか

今は分からないが

いつか分かる時がくるのだろうか？

なあ、アレン？

吸血鬼の涙（後書き）

モヤシ……。やっぱりお前は究極のフラグ体質だ。

エヴァを攻略？してもまだ吸血鬼編は終わりません。まだ続くので見捨てないでもらえるとありがたいです。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

オコジョとエクソシスト（前書き）

前半はエヴァとの会話で、後半はカモ視点です。……カモの口調あつてるかな？

オコジョとエクソシスト

エヴァ side

………ヤバイ、かなり恥ずかしい事をしてしまった。まさかあれ程泣いてしまうなんて、自分でも思ってた…。

「…気持ちは落ち着きましたか？」

「あ、ああ。もう…大丈夫だ。……恥ずかしいトコを見せてしまったな」

俯きながら謝る。…アレンの顔をまともに見る事ができない。

「恥ずかしいトコの騒ぎではありませんけどね。…ですがご安心ください。先程のやり取りは全て録画しております。これでいつでも、マスターの可愛い映像が見られます」

「嫌がらせか！？それがマスターである、この私にとる態度か！？」

「まあまあ、落ち着いてください」

茶々丸に掴みかかろうとしたが、アレンが止めに入ってきた。くそっ、茶々丸の奴めこうなると分かったの発言だな…！

「……まあ良い。……それでアレン、私の呪いを解くと言うがどうやって解くんだ？いくらふざけたような呪いでも、サウザンドマスターがかけた呪いだぞ？そう簡単には解けないんじゃないのか？」

呪いを解くには手段が限られている。

一つは私がやろうとしていた、血を使つての解呪だ。…まあこれは、私が吸血鬼だからできる事なんだが。

もう一つは呪いを解く為の専用道具を用いての解呪だ。だがこのやり方はかなりの規模となる為、周りにバレるのは確実だろう。

「それについては、僕の血を使おうと考えています。…血だけでは無く、もう一つ必要な物があるので今すぐに解呪はできないんですけどね」

「お前の血で解呪だと？…もう少し詳しく教えろ」

何故アレンの血で解呪ができるんだ？こいつにはそこまで魔力があるようには思えないんだが…。

「…………なるほど、そういう事ですか。…ですがそれでは、マスタ―にも影響がでるのでは？」

どうやら茶々丸は分かったようだが、何故か私にまで影響があるのではと言いだした。

「…………どうして分かったんですか？」

……しまった。アレンの事を調べたという事を、まだ話していなかった。

「申し訳ありません。こちらでアレン様の事を調べさせていただきます」

ました。調べるに当たり、エクソシスト本部のメインコンピュータにハッキングしアレン様の情報を盗まさせてもらいました。……調べたのは私の独断ですので、マスターは関係ありません。罰ならなんなりとお受けします」

「茶々丸！？ち、違うぞアレン！調べさせたのは私だ！だから茶々丸を責めないでくれ！勝手に調べた事も謝る！本当にすまなかった！」

頭を下げて謝罪する。おそらく茶々丸は私が調べさせたと言うと、アレンが私に不信感を抱くと考えたのだろう。

……だがそれでも、私は茶々丸に全てを押し付けるつもりはない。例えば私を小馬鹿にする従者でも、私にとって掛け替えのない従者なのだから…。

「頭を上げてください、エヴァ。調べた事については怒ってません。ただ……」

そう言って言葉を濁すアレン。……どうしたのだろうか？

「……………絶対に他の方にはお話ししません」

「……………分かりました。……茶々丸が心配に思うのも無理はありませんが、それを防ぐ為にもう一つの道具が必要になってきます。それを使えば、エヴァへの影響はありません」

アレンと茶々丸だけで話が進んで行く。……………私にはさっぱりだ。

「おい、一体どういう事だ？私には何が何だか分からないんだが……」

「あつ、すいません。なら今から説明しますね。…僕には、正確に言えば僕の左腕なんです、退魔の血が流れてるんです。…ですがそのまま僕の血を飲んだら、吸血鬼であるエヴァまで影響があるかもしれません。ですのでそれを防ぐ為の物を、本部から送ってもらわなければならぬんです。それを使えば呪いだけにしか、僕の血は働かない筈です」

「……お前には驚かされてばかりだな。…聞きたい事は山程あるが、無理には聞かん。…いつか話してくれるまで待っておく」

「……ありがとうございます」

流石に無理に聞いて、アレンに迷惑をかけたくない。かといって、茶々丸から聞くのも躊躇ってしまう。

ならばいつかアレンが、私に話してくれるまで待てば良い事だ。

「……もう今日は遅い。話はこの辺にしておこう」

少々強引ではあるが、話を終わらせる。これ以上は、アレンも話しづらいだろうからな。

「……そうですね、なら今夜はこれで。…また用があれば、いつでも呼んでくださいね」

「ああ、ならそうさせてもらおうよ」

「……アレン様、マスターの為に本当にありがとうございました」

…やはり優しいな、アレンは。

私と茶々丸は玄関まで行き、アレンを見送った。……今度は私の方から行ってみようかな？

カモside

夜の闇を疾走する。やはり忍び込むには夜に限るな。

俺っちはある人物を探しに、この麻帆良へとやってきた。信頼できる情報では、兄貴はここで教師をやっているとか。教師をやりながら正義の魔法使いを目指す兄貴、痺れるっすねー！

でもそれだけじゃダメだ。

魔法使いならば、まずはパートナーが必要になってくる。そのパートナーを選びを兄貴はまだしていないだろう。

当然と言えば当然か。兄貴はまだ子供だしな。そこまで重要だと考えてないんだろうな。

だが！俺っちが来たからにはもう大丈夫だ！兄貴にパートナーの重要性をしっかりと教え、それでもってすぐにでも仮契約をしてもらわねえとな。

もちろん、パートナーには兄貴にふさわしい可愛らしい子が良いな。

ああ見えて兄貴も、女の子にモテるタイプだ。そこら辺は不自由しないだろうよ。

そうこう考えてると、前方に人影が。……こんな時間に出歩くなんて、ちよつと危なっかしいんじゃないか？

「んっ？」

おつと危ねえ！いきなり止まるんじゃないか？ビククリするじゃないかよ！

「…………動物か？」

ドキッ！

まさか、こんなに暗いのにはバレたというのかよ！……でも大丈夫だ、俺っちは見た目はただのオコジョだ。そう簡単には見破れないだろう。

「…………やっぱり動物みたいだ」

…………ふう、何とかやり過ごしたぜ。…それにしても、何だあの兄ちゃん？俺っちが隠れてる草むらをじつと見てるだけで分かっちゃうなんて、一般人じゃねえな。

……そう。やはり俺っちの勘は正しかった。

じつとこっちを見ていた兄ちゃんだが、その時風が吹いて兄ちゃんの髪が上げられた。

そして俺っちは見た！髪に隠されていたが、あれは間違いない！悪魔の印だ！

やべえ！早く兄貴のトコに行かなければ！幸い奴は、既にこの場を離れているから俺っちは全速力で闇の中を走り抜けた。

待っていてくださいえ、兄貴！今このカモミールが行きますぜ！

オコジョとエクソシスト（後書き）

と言う訳で、誰かは分かりませんがカモに悪魔だと思われてしまいました。いやゝ、誰でしょうね？……………ツツコミは無しで願いますね？

次回はカモと薬味と……………です。……………原作はもう壊れてるからいいや。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

オコジョと魔法使い（前書き）

やや強引な所がありますが、何卒ご勘弁の程を。

オコジョと魔法使い

カモ side

はあ…はあ…はあ…。ここだ…。ここの建物に兄貴が…。

結構豪華な建物だな。こりゃあ忍び込むのも一苦労だぞ…。

「こうなりや正面突破しかないな。幸いな事に、周りに人はいねえ。やるなら今だな」

目指すは兄貴のいる部屋だ！……………しまった。

「こんなにデカイと、兄貴を探すのも難しいな…。部屋を一つ一つ探すにしても、途中で捕まっちゃったら意味がねえ…。どうすっかなあ」

玄関の横手の影に身を潜ませて考えていると、何やら声が聞こえてきた。…どうやらここに住んでる生徒達のようなだが。

「！これだ！」

生徒達が玄関に入る時に仕掛ける。生徒の一人にわざとぶつかりに行く。

「きゃ！？何かがぶつかった！？」

そして俺っちは、ぶつかった反動を利用してそのまま転がる。見た

目は弱ったオコジヨにしか見えないだろう。

「きゅ〜…」

そしてこの弱りきった鳴き声で、更にアピールする。これなら俺たちの事を、粗末には扱わないだろう。それに多少騒ぎになれば、ネギの兄貴も見にくる筈だ。

「……アレじゃないかしら？夏美ちゃん。…オコジヨ見たいだけど？」

「えっ？……ホントだ、オコジヨだ。…でもちづ姉、何だかあのオコジヨ、弱ってるみたいだよ？」

「あら本当ね。……なら寮に連れて行きましょ？流石にこのままにするのは可哀想だわ…」

よしっ！作戦成功！後はネギの兄貴を見つければ。

ふにゅ。

うはっ！この姉ちゃん、すげえ弾力だ！たまんねえなあ！

ふにゅふにゅ。

「こら、くすぐったいでしょ？」

「ちづ姉に甘えてるのかな？…ちづ姉ってお母さんみたいだし」

「あら夏美ちゃん？それはどういふことかしら？」

「な、なんでもありません！」

お、おっかねえ姉ちゃんだ…。笑顔で威圧するなんて…。

「あれ？那波さんと村上さんじゃないですか」

きたー！！兄貴ー！

「あつ、ネギ先生こんばんわ」

「こんばんわ、ネギ先生。…見回りですか？」

「ええ、まあそんなところです。…那波さんが抱えてるのって、オコジョですか？どこかで見たような…」

どうやらネギの兄貴も俺っちに気づいたようだ。弱ったフリをしつつ、姉ちゃんからネギの兄貴のトコまでジャンプする。

「わわわっ！？ど、どうしたの！？」

「あらあら、どうしたのかしら？」

「…………ちづ姉が怖かったんじゃない？」

「夏美」

「ひいひい！？」

や、やっぱりおっかねえなあ。

「兄貴、俺っちですよ。アルベール・カモミールですよ」

小声で兄貴に話しかける。後ろの二人は話してる最中だから、多少なら大丈夫だろう。

「カモ君！？久しぶりだね！」

「兄貴、もう少し声を小さく。……ここじゃ何ですから、どこか人気の無い場所へ」

ネギの兄貴も俺っちと分かってか、声を上げて再開を喜んでくれた。

「あ、ごめん。……人気の無い場所って言っても、僕自身居候だし。どうしようかな……」

「もしかしてそのオコジョ、ネギ先生のペットですか？」

「そうなの？ネギ先生」

どうやらこの二人は、俺っちが兄貴のペットだと思ってるようだ。

「ええっと、実は……そうなんです。……飼っても良いですか？」

「んー、弱ってるみたいだったから暫く部屋で面倒を見るつもりだったし、私は構わないわよ？夏美は？」

「私も良いけど、問題はいいんちよでしょ？とは言っても、断ったりはしないだろうしね」

どうやら俺っちを、ペットとしておいてくれるみたいだ。

「あ、ありがとうございます！なら早速、いいんちよさんにも聞いてきますね！」

「あやかになら私達の方から言っておくから、ネギ先生は先に部屋に戻ってて」

「そだね、そのオコジョも早く休ませてあげないとだし。いいんちよには私達が言っておくよ」

そう言って二人は俺っち達から離れて、いいんちよって人を探しに行った。

「じゃカモ君、部屋に行こっか」

「了解ですぜ」

「いやいやいや、兄貴も隅に置けねえなあ。あんなに可愛い子達と知り合いだなんて。舎弟である俺っちの鼻も高いってもんよ！」

部屋に戻る際に、兄貴が教えている生徒達に会ってちやほやされちゃったぜ。

「ははっ、皆カモ君の事受け入れてくれて良かったよ。……それでカモ君？どうしてまた日本なんか？」

「それなんですけどね、実は俺っち兄貴の助っ人に来たんスよ。例

えば兄貴のパートナー選びとかっスよ」

まずはパートナー選びに関心を持ってもらわねえと、話が進まねえからな。

「パートナー？……まだ必要無いんじゃないかな？」

「甘いっスよ！早いうちに良いパートナーを探さないと、立派な魔法使いになるにもカッコがつかないっスよ！？」

「うっ……そう言われると……」

やっぱり兄貴はまだパートナーの重要性を認識してなかったか。

「まあ、俺っちが来たからにはもう大丈夫。実はさっきの女の子達の中に、とびきりのパートナー候補がいたんスよ。是非その子達と仮契約を結びましょーよ！」

「ホントに！？……でも仮契約って？」

「そもそも魔法使いがパートナーを選ぶのは、戦闘なんかで魔法使いを守ったりする為に必要となるんスよ。んで魔法使いと契約を結んだ従者は、魔法使いから魔力をもらってパワーアップできるんス。……でも兄貴のような子供にはまだ本契約が出来ないし、そもそも従者を選ぶのも大変なんスよ。そこで出てくるのが、この仮契約システム！簡単に言えばお試し期間って奴っスよ。これなら何人でも契約できるし、戦力も大幅アップですぜ！」

ふう、まあざっとこの位説明すれば分かってもらえるだろう。

「なるほど……でもそうになると、一般の人を巻き込んだやうんだよね？あまり巻き込みたくないんだけどな？」

「兄貴の言い分も分かりやすが、今はそんな事を言ってる場合じゃないんスよ！」

「……どういう事？」

「……兄貴、最近この学園でおかしな事が起きてやせんか？」

「おかしな事？……まさか吸血鬼の事？」

ん？吸血鬼だって？……おかしいな。

「……兄貴、吸血鬼ってのはどういう事ですか？……悪魔じゃなくて、吸血鬼スか？」

「う、うん。ちょっと前なんだけど、僕の生徒が血を吸われる事件があつてね。表向きは貧血ってなってるけど微かに魔力の反応があったし、アレは今噂の吸血鬼の仕業だと思うんだ。……それで、何でカモ君は悪魔だと？」

「いえね、実はここに来る時に見たんスよ。……夜に出歩く人の姿をした悪魔を。ありゃあかなり強そうでしたぜ」

今思い出しても寒気がする程だ。……早めに何とかしねえと。

「ホ、ホントなの！？ホントに悪魔がいたの！？」

「この目でしっかりと見やした……。左眼の上の方に、悪魔の証であ

る逆さ五芒星が刻まれてやした…。逆さ五芒星は上位悪魔の証、かなり厄介スよ」

見たままの印象を伝える。兄貴も顔を真っ青にしている。

「ど、どうしようカモ君…。誰かに相談した方が良いかな…。？」

「……いや、ここは兄貴が何とかするっきゃ無いっスよ。下手に話が広まったら、それこそ相手の思うツボだ。…ここは慎重に行動しやしよう」

兄貴が不安になるのも仕方ない事だが、あまり簡単に人に言える話じゃねえ。

「うう、一体どうすれば…。もし悪魔だけじゃなく、吸血鬼もいたらお手上げだよ…」

「その為の仮契約っスよ兄貴！仮契約で従者を増やして、戦力を増やすんスよ！」

兄貴の従者ならかなりの戦力になるだろうし、策を使えば案外勝てる見込みがあるかも…！

「……でもパートナーになってくれる人なんていないよ」

「大丈夫スよ！兄貴の周りには良い素材の子達ばかりですし、すぐに見つかりやすよ！」

いまだに踏ん切りがつかない兄貴を励ます。兄貴さえその気になれば、従者の一人や二人簡単にできやすよ！

「お話は聞かせていただきました！」

「!? 誰だ!?」

突然の声に驚く俺っちと兄貴。

「ネギ先生のパートナーなら、この雪広あやかにお任せを！」

「いいんちよさん!?」

どうやら早速パートナーができるみたいだ。流石は兄貴! そこに痺れる憧れる〜!

オコジョと魔法使い（後書き）

何となく中途半端ですね。許してくださいえorz

次回からいいinchよも参加ですね。どう動かそう……迷うところで
す。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

魔法使いと仮契約（前書き）

いいんちよが暴走……！………するの？

魔法使いと仮契約

カモ side

突然部屋に乱入してきた、いいんちよこと雪広あやか。どうやら部屋の外から話を盗み聞きしていたらしい。これは少し迂闊だったな。だがこの姉ちゃん、ネギの兄貴への愛情が半端ない。と言うか溺愛に近い状態だ。……確かこういうのを、シヨタコンって言うんだっけな。

「あわわ、いいんちよさんにまでバレるなんて……。カモ君、どうすれば良いかな……？」

どうやら魔法使いだと言うのがバレた事にショックを受けている様子の兄貴。…この姉ちゃんなら、まず誰にも話さないだろうけど。

「大丈夫ですわ、ネギ先生！ネギ先生とそちらにいるオコジヨの事は、絶対に秘密にしますから！ですから、そんなに落ち込まないでください！」

「えっ！？本当ですか、いいんちよさん！？」

「もちろんですわ！…ただし、私もお仲間に加えていただけたらですけど」

抜け目ねえ姉ちゃんだな、本当に。

：しかしこれは願ったり叶ったりだ。今は一人でも多く、兄貴の従者が欲しいところだ。この姉ちゃんには是非協力してもらわねえとな。

「兄貴、良いじゃないっすか！協力してもらえる上に、兄貴の事も黙っていてももらえるんすよ？こんな美味しい話はそうあるもんじやないっすよ！」

「んー、そうなんだけど……。危ない事にいいんちよさんを巻き込みたくないし…」

「ネギ先生…。なんとお優しいのでしょ…。ですがご心配ご無用ですわ！私こう見えても、我流での合気道ができますの。ですので自分の身は自分で守れます！そしてネギ先生をお守りする事も十分にできますわ！」

ひゃー！こりやまた本当に掘り出し物な姉ちゃんだ！仮契約すればネギの兄貴から魔力が供給されて、ある程度の身体強化ができるっていうのにこの姉ちゃんは既に体術の心得があるっていうから驚きだ。

「なら決まりっすよ、兄貴！兄貴から魔力供給されれば、姉ちゃんの強さも今以上になるってことだ！これなら心配いらねえぜ！」

「う、うん…。……よし！いいんちよさん！…ば、僕と仮契約してください！」

「ネギ先生…。もちろんですわ！喜んでお受けいたします！」

よっしゃー！これでまずは一人目ゲットだ！この調子でバンバン従

者を増やしていくぜ！

「よし、なら早速仮契約の儀式を始めるぜ！……契約！」

「わっ！」

「何ですの！？」

よし、魔方阵は完璧だ！後は……。

「さあ、お二人さん！この魔方阵の中でブチューっとやっちゃまって
くませえ！」

「……ブチュー？」

「ま、まさか、き、キスをするんですの！？私とネギ先生が！？…
…喜んで！！」

この姉ちゃん、もはやノリノリだな。

「えっ！？いいんちよさん！？」

「大丈夫ですわ、ネギ先生！私も初めてですが、お相手がネギ先生
なら喜んで私の初めてを差し上げます。さあ……」

そう言って兄貴の顔に近づく姉ちゃん。兄貴も何やかんや良いなが
ら、割と嬉しそうにしている。

「「んっ」」

きたー！！これでバッチリだ！

「良くやったぜ、お二人さん！これで契約完了だ！…さあ兄貴、このカードを。仮契約が成功した証である仮契約カードだ！オリジナルの方を兄貴に、コピーを姉ちゃんに渡しておくっす。この仮契約カードなんすけど、実はいろいろ特典があるんすよ。…まあ今はそれは良いとして、これで姉ちゃんは兄貴の従者になりやした。今後は兄貴と姉ちゃん、二人で協力して学園に潜む悪魔を倒しやしょー！！もちろん俺っちも手伝いやスよ」

「よ、よろしくお願いします、いいんちよさん…」

「こちらこそ、ふつつか者ですがよろしくお願いいたします…。それとネギ先生、私の事はあやかとお呼びください。パートナーなんですから…」

「わ、わかりました。えっと…あやかさん」

「ネギ先生…！！」

早速いちゃついてるねえ。……このまま最後までやるなら、俺っちはお邪魔だな。……事が終わるまでどっか行っとくかな。

「……あっ！そうだ、忘れてた！…カモ君、悪魔ってどんな姿をしていたの？それが分からないと、どうしようも無いんだけど…」

おっと、子供な兄貴に期待した俺っちがバカだったぜ。

「姿っすか？…俺っちが見たのは人間状態の時だったから、見つけるのは簡単だと思いやスぜ？因みに姿の特徴なんすけど…」

口での説明だといまいち伝わりにくいと思うから、ここは俺たち自慢の絵で教えやしよう。

「…つと、こんな感じっスよ」

なかなかの再現ぶりだな。

「これって……！」

「？この人は……」

「…まさか、知ってるんスカ！？」

おいおい、こりゃ結構嬉しい誤算だぜ！

「…ねえ、カモ君？何かの間違いじゃないの……？」

「私もそう思いますわ…」

「何を言ってるんスカ！俺っちが間違える筈が無いじゃないっスカ！
！正真正銘、こいつが悪魔っスよ！」

二人して失礼しちゃうぜ、ホントに！

「で、でも……」

「……ネギ先生、とりあえず調べてみませんか？…まあ、あり得ないとは思いますが…」

「だーかーら！間違いないって言ってるでしょ！疑り深いんスから…！」

そう言うと二人はもう一度、俺っちの描いた絵を見る。

そこに描かれているのは、白髪頭でビジネススーツを着ていて、左眼には縦に傷がついている少年の姿だった。

魔法使いと仮契約（後書き）

はい、暴走しませんでした。危ない危ない。危うく18禁になる所だった…。薬味のKYに助けられました。

いいんちよのアーティファクトですが、当分出すつもりは多分ありません。……ネタがない訳じゃないんだからね！……すいません、キモかったですね。

次回は薬味パーティー捜査編です。……なかなかクライマックスまでが遠いです。もう少し待ってもらえるとありがたいです。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

魔法使いとエクソシスト（前書き）

遅くなりました。ではどうぞ。

魔法使いとエクソシスト

真名side

……妙だな。何かがおかしい。一体何なんだ……？

「どうした、真名？考え込んだりして」

「ん？刹那か……。いや、ちょっと妙な違和感というかなんというか……。今日一日中、何か引っかかってるんだ。……刹那は何か感じないかい？」

一人で考えるのにも限界を感じたから、ここは刹那にも聞いておこう。

「違和感？………ああ、もしかしてアレか？」

「アレ？」

刹那の指差す方を見してみる。そこにはネギ先生といいんちよが。………どういう事だ？

「私もこのちゃんから聞いて分かったんだが、ネギ先生がいいんちよの事をあやかさんって言ってるんだよ。今日も授業中に何回もそう言ってたし、多分それが違和感なんじゃないか？」

「………いいんちよを名前で？昨日までは普通にいいんちよと呼んでいたのに、今日はあやかさん……。どういう心境の変化だ？」

昨日あの二人に何があったんだ？

「…那波さんに聞いたらどうだ？同室なんだから、何か知ってるんじゃないか？」

「……そうするか」

暇なのか、刹那もついてきた。

「那波、ちょっと良いかい？聞きたい事があるんだけど…」

「あら、龍宮さんに桜咲さんもあの二人の事かしら？」

…どうやら皆考える事は同じみたいだ。

「やはり他の人達も聞きに來たんですね？」

「ええ、皆驚いてたわ。あやかがネギ先生を墮としたんじゃないかって言ってるし」

「実際はどうなんだい？」

「どうも何も、ただネギ先生があやかの事を名前で呼ぶ以外何もないわよ？それ以外は今まで通りよ。……オコジヨを抜いては」

……オコジヨ？何でオコジヨ？

「オコジヨって、…あのオコジヨですか？」

「想像通りのオコジヨよ。…昨日私と夏美が寮に帰ってくる時に、

寮の玄関で弱ってるのを私達が保護したの。その後にネギ先生に会ったら、そのオコジヨは自分が飼うって言い出したの。私と夏美は特に反対はしなかったわ。あやかにも聞こうとして私と夏美で探してたんだけど、見つける事が出来なくて部屋に戻ったら既にあやかが部屋に戻ってたの。……その時からかしら。ネギ先生があやかを名前で呼ぶようになったのは。最初はぎこちなかったけど、今ではすっかり慣れたみたいね」

「……いいんちよはオコジヨを飼う事に反対しなかったのかい？」

「…しなかったわね。私達が部屋に戻った時には、もうオコジヨを可愛がっていたし」

「………そうか、ありがとう」

「ありがとうございました」

「いえ、これくらいで良ければいつでも」

そう言って那波と別れる。私と刹那も、教室を後にする。

「……オコジヨ、か。どうやらそのオコジヨが怪しいな…」

「そうは言うが真名？所詮はオコジヨじゃないのか？理由は他にあるんじゃないのか？」

刹那はオコジヨは関係ないと言うが、私はそうは思えない。

「…刹那は知らないと思うが、魔法使いの使い魔としてオコジヨ妖精というのが存在するんだ。ネギ先生が飼っているそのオコジヨも

「…」

「オコジヨ妖精だと言うのか…?」

頷いて答える。…オコジヨ妖精はただの使い魔じゃない。アレには魔法使いをサポートする程の知恵を持つ。

「ネギ先生、いいinchよ、オコジヨ妖精。…なるほど、そういうことか」

「…あまり当たってほしくない予想だな」

どうやら刹那も同じ考えに、辿り着いたようだ。

「あの二人の後を追う。刹那はどうする?」

「私も行こう。このちゃんはアスナさんと買い物に出掛けたし、多少なら大丈夫だろう」

付きっ切りの護衛をしなくなったから、ある程度は放課後も自由になったらしい。

「なら行こうか」

「ああ」

「……………あのオコジヨか?」

「だろうな。やはりオコジヨ妖精のようだ。ネギ先生やいいんちよと話をしている」

ネギ先生といいんちよの後を追うと、途中でオコジヨが二人の下に近づいてきた。

オコジヨはネギ先生の肩に乗り、ネギ先生といいんちよに話しかけている。……何を話しているんだ？

「……どうやら人を探しているみたいだ。これから会いに行くらしいぞ」

「…聞こえるのか？」

「断片的だけどな。後は口の動きを読んだだけだ」

刹那に意外な能力が…。

「……とにかく今は目的を知るのが先だ。刹那、注意して会話を聞いてくれ」

「任せてくれ」

集中して会話を聞き始める刹那。……私は周りに注意しておくかな。

「……………よし、あのオコジヨを殺そう」

刹那が壊れてしまった。

「落ち着け、刹那。一体どんな会話だったんだ？」

「…どうやらネギ先生達は悪魔を探しているみたいなんだ。だがネギ先生といんちよはそれに消極的なんだが、オコジョが強引に探させているようだ」

「悪魔？何で悪魔なんだ？……噂か？だがあの噂は吸血鬼の筈だし…。それにだ刹那。それだけであのオコジョを殺そうとするのか？」

「…………あのオコジョ、アレンさんが悪魔だって言ってるんだぞ？」

……………ほう。

「さて、狩りの時間だ。獲物は前方のオコジョ、この世に生まれてきた事を後悔させてやろう」

カチャ

手持ちの銃でも、打ち損じる事はないさ。運悪くネギ先生に当たったとしても知った事じゃない。そのオコジョと一緒にいるのが悪いのだよ。

「…ふう、何を馬鹿な事をしているんですか？」

「「アレンさん!？」」

後ろから声をかけられて振り向くと、そこにはアレンさんがいた。

「二人がネギ達を尾行してたから、気になって後を追ってみれば…

…。まあ話は聞かせてもらいました。…ちょっと行ってきますね」

「えっ、ちょっと？アレンさん！？」

「…行ってしまった」

呆然としてみると、アレンさんはネギ先生達の方へ。…私達も近付いて会話を聞かなければ。

「？……！？あ、兄貴！アイツだ！俺っちが見たのはアイツっスよ！！」

「あ、アレンさん！こんにちわ！」

「こんにちわ、アレン先輩」

「こんにちわ、ネギ先生、いいんちょ。……そのオコジョ、今喋りませんでしたか？」

「あっ！？その…えっと…」

「アレン先輩、これはですね……」

オコジョが喋りだしたのを疑問に思い、二人に尋ねるアレンさん。まあ知っての事だろうけど。

「やいやいやい！今更とぼけた振りしてるんじゃないやねえ！俺っちがオコジョ妖精だって分かってるんだろ！テメエの正体はもうバレてるんだ！兄貴に姉ちゃん、やっちまいやしよう！」

「カ、カモくゝん…」

「流石に、それは……」

どうやらオコジョだけが息巻いているようだ。ネギ先生といいんちよは絶賛反対らしい。

「……えっと、分かりやすくお願いできますか？」

「あの、ですね……。実は僕、魔法使い……なんです。それであやかさんは僕の従者なんです……。こっちのカモ君は僕のペットと言うか、使い魔と言うか……。そんなカモ君なんですけど、何でも僕に会いに来る前にアレンさんに会ったみたいで、そしたら……」

「本当に申し訳ありません……。私達は信じてないのですが、このカモさんが言うにはアレンさんが……。その……。今学園で流行っている噂の悪魔だって言うんですの。何でも……。確かな証拠を見たとか」

自分が魔法使いだと話すネギ先生。それとやはり、いいんちよも関わってしまったか。……。まあ十中八九あのオコジョが原因だろうけど。

それにしてもあのオコジョ、何を見てアレンさんを悪魔だと言い張るんだ？

「……因みにその証拠とは？」

「しらばっくれるんじゃない！俺たちは確かに見たんだ！テメエの左眼の上に、逆さ五芒星があるのを！もし無いって言うんなら、その髪を上げて見せてみやがれ！！」

アレンさんの左眼?……確かアレは。

「……なあ、真名。逆さ五芒星があると、何故悪魔なんだ?」

「……さあ?あまり私も詳しくなくてね。ただ一つ言えるのは、あのオコジョは万死に値すると言う事だけさ」

そしてアレンさんの方を見れば、ゆつくりと前髪を上げようとしていた。

「!??そんな…」

「まさか……!?!?」

「やっぱりありやがったな!?!?」

アレンさんの左眼の上には、逆さ五芒星がくっきりと刻まれていた。

魔法使いとエクソシスト（後書き）

カモに死亡フラグが立ちました。

薬味といいinchよはどうするんでしょうかね？……どうしようかな？

吸血鬼編がかなり長いですが、そろそろ本当にクライマックスに……
……いけるかな？

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

魔法使いの反省（前書き）

多少強引ですが、話を進めました。

魔法使いの反省

真名side

「ア、アレンさん……」

「左眼の上に逆さ五芒星……。……ですがカモさん？何故逆さ五芒星が悪魔の証なんですか？」

「えっ？そりゃあ姉ちゃん……。……不吉の証だからだろ？」

いいんちよが疑問に思ったのか、オコジョに聞いてみたが、バカ丸出しの解答だった。

「……まさかカモさん？適当だったんですの？」

「カモ君……」

「い、いやだなあ、兄貴に姉ちゃん！そんな訳ないじゃないっすか！……やいやい！大人しく吐いちまえよ、自分は悪魔だってよ！」

「えっと、悪魔じゃなくて人間ですよ」

そんな風に聞いても自白する人はいないだろ？アレンさんも苦笑いで答えている。

「「……………」」

「だっておかしいじゃないっすか！？何でそんな傷があるんすか！

「？」

「…まあ、僕も実を言えば魔法関係者なんですよ。この傷は昔にちよつと…」

「そうだったんですか…。ごめんなさい、アレンさん！疑ったりして…」

「本当に申し訳ありません…」

「兄貴、姉ちゃん！？」

どうやら二人は誤解だと気付いたようだが、オコジヨはいまだに納得していないらしい。…殺るか？

「気にしないでください。失敗は誰にでもあります。今回の事はしっかりと反省して、同じ失敗はしないでくださいね？」

「「はい！」」

「うう」

良かった、何事もなく終わった…。まあ何かあっても、アレンさんなら大丈夫だろう。

「じゃあアレンさん、僕達は帰ります。今日の事はあやかさんと一緒に反省会をして、次に生かします」

「それではアレン先輩、失礼いたします」

「兄貴、姉ちゃん…」

「……私達も帰ろうか」

「そうだな、アレンさんも誘って甘味でも食べに行こうか」

カモside

「カモ君、あまり適当な事言っちゃダメだよ？…今回はアレンさんが許してくれたけど、もうこんな事しないようにね？」

「そうですね、危うく敵対するところでしたのよ？少しは反省してくださいまし」

「……分かったっス」

部屋に帰ってから、兄貴と姉ちゃんに説教されてもう一時間は過ぎた。うう…何でこんな事に。

「そ、それよりも兄貴、あの旦那が悪魔じゃないなら本当の悪魔はどこにいるんでしょうかね？」

「えっ………どうなんだろう？」

「本当にいるのかも怪しいですわ…」

「だからと言って、無視する訳にはいかないっスよ？」

「うーん、でも手掛かりも何も無いし…。正直僕達だけじゃ厳しいんじゃないかな？」

「それもそうですわね…。せめて何が目的なのかが分かれば良いんですけど…」

ふむ、確かにこのままじゃただ無駄に終わるだけだしな…。

「お二人に聞きやすが、近い内この麻帆良で何か大規模な事が起こったりはしないっスか？もしかしたら、それに便乗して騒ぎを起こすかもしれないっスよ？」

「近い内に起こる事…。あやかさん、分かりますか？」

「ええ、確かにもうすぐで大停電の日になりますわ。…麻帆良全ての電気を消すという大規模な日の事です。何かするならおそらくはこの日かと…」

「なるほど、大停電か…。確かに何かするなら絶好かもしれねえな。…なら決まりっスね」

「？何がなの、カモ君？」

「もちろん、悪魔を探しに行って退治するんスよ。大停電するなら人なんて歩いたりはいしないだろうし、もし歩いてる奴がいたら少し様子を見るんスよ。いきなり攻撃しても、また勘違いになるかもしれないやせんし、十分な注意が必要っスね」

「んゝ、そんな状況で歩いてたら僕達が逆に襲われたりしないかな？」

「大丈夫ですわ、ネギ先生！その時は私がお守りいたします！」

流石姉ちゃん、兄貴ラヴだな。

「よし、なら作戦決行は大停電当日っス！二人とも、それまでに準備をお願いしやす。……俺っちもやる事がありやすんで」

「……あやかさん、お願いできますか？」

「もちろんですわ。この雪広あやか、全力でネギ先生のお力になりますわ！」

「じゃあ、当日は頑張るっスよ！」

「「おおー！」」

「さて、兄貴のクラス名簿から戦力になる娘でも探して……………」

オコジヨの暗躍は加速する……。

魔法使いの反省（後書き）

ようやく次回は大停電です。……長かったなあ。

薬味パーティーとアレンはあえて対決させませんでした。……してもアレンが余裕で勝ちそうですし、真名や刹那もいましたから、薬味パーティーはボッコボコになったでしょう。

罵詈雑言以外の感想をお待ちしております。

お知らせ

読者の皆様にお知らせします。

まことに勝手ではございますが、当作品の連載を終了させていただきます。

理由については、今後の展開がほぼオリジナルになってしまうのと、ネギま！とはかけ離れた作品になってしまうので今一度考え直そうと思っております。

今まで読んでくださった方々には大変申し訳ないのですが、当作品は完結することが無くなりました。

今後については、もしかしたらまた思いつきで作品を書くか、しっかりとした作品を書くかもしれません。

作者の小説をまた見る機会がありましたら、またその時は応援よろしく願います。

改めて皆様に、お詫び申しあげます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3667u/>

左腕に十字架を宿らせる少年 in ネギま！

2011年9月7日01時52分発行